村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ!②

鬼畜のススメ

誕生編〜中学生日記からサブカル芸術論まで〜



村崎百郎

僕はいつも僕の中にいて、外へと出てゆくことができない。今こそ外部が必要だ。今こそ**飛び立つ時**なのだ。

ー村崎百郎「幻想遊録1」よりー

[お知らせ]

●本書の文字のミスや質問等は以下アドレスにメールをお願い致します。
nekomurasakineko+100@gmail.com

●本書のサポートサイトは以下の「鬼畜☆告知」中の
「データ版鬼畜のススメ　サポートコーナー」になります。
http://murasaki100.com/a0900.html

■商標について
本書に掲載されている各種名称などは、その発売元の商標、または登録商標です。
本書を制作する目的のみ、それら商品名、団体名、組織名を記載しており、著者、
および出版社は、その商標権などを侵害する意思や目的はありません。

目次

◆カ行

鏡リュウジ（占星術家／翻訳家）

きょん（エロ漫画家）

クーロン黒沢（ライター）

ケロッピー前田（身体改造ジャーナリスト）

◆サ行

さかもと未明（アーティスト）

GENET（AUTO-MODリーダー）

須川善行（編集者／元「ユリイカ」編集長）

砂（漫画家）

ソワレ（シャンソン歌手）

◆タ行

釣崎清隆（死体写真家）

◆ナ行

流水りんこ（漫画家）

二村ヒトシ（AV監督）

◆ハ行

比嘉健二（元「GON！」編集長）

第1章　村崎百郎未発表文セレクト集

第1章



村崎百郎未発表文セレクト集

二百三十八点のなかから

見事！最優秀に

黒田君（東中2年）の〝人権〟作文

このほど、東島牧中学校二年生の黒田一郎君の応募した人権に関する作文が見事、最優秀に選ばれました。

この人権の作文募集は、函館人権擁護（ようご）委員連合会が、さる十一月四日から始った〝人権週間〟の行事の一つとして管内（渡島、桧山、後志）の中学生を対象に「人権」に関する作文を募集したもの管内中学校生徒からの応募あった作品の数は、全部で二百三十八点にもなり、この中から黒田君の作品が、見事最優秀作品に選ばれたものです。

ここに黒田君の作品を紹介します。

観光公害による人権侵害と法律



東島牧中２年

黒　田　一　郎

人権とは、端的に言って、人間らしく生きる権利だと僕は思います。憲法がそれを保障し、法律がそれを守っているはずです。

僕の住んでいる島牧は、地域の性質上あまり人権問題で表面的にトラブルが起きることはありません。それだけに見のがされている面が、たくさんあると思います。

たとえば新しい悩みとして、観光公害をあげることができます。年々すすむ過疎化対策の一つとして、村では村営海水浴場などを作り「最後の秘境」として観光客を呼ぶのに努力しています。僕は習慣で、よく海岸道路を自転車で散歩しますが、道ばたには、数えきれないほどのコーラの空かんや紙くずなどが、投げ捨てられています。また、浜にはビールびんや、たき火の跡などが、そのまま残されているのを見かけます。漁協も密漁防止のポスターや標語を募集したり、監視員をパトロールさせるようになりました。貸切バスやマイカーが急増して、事故もふえています。テント村ができるようになって、子供の夜遊びもふえたようです。

たしかに、道路や施設などがよくなり、民宿や釣り舟も、できるなど良い点も見られますが、その反面、環境が汚染され、密漁や騒音、果ては人が集まることによって起こる少年の非行化など、お金には、かえがたい問題も生まれています。

のどかな田舎の茶の間に、ある日突然騒々しい都会人が車で乗りこんできて、用意されたテーブルの上の手料理を、さんざん食い荒らし、あいさつもしないで逃げ帰って行ったような感じです。ぼう然と見送った家族には、後始末という思いがけない土産が残され、子供達の間には、次の日からさっそく「観光ゴッコ」という行儀の悪い遊びが流行するでしょう。このことは、やはり地域人権の侵害と言えるのではないでしょうか。

村にはまだ、大気汚染や海洋汚染など、社会問題になるほどの大きな公害はありません。しかし、添加物や防腐剤によって起こる食品公害は、すでに全国的に広まっているのです。これは他の産業公害と同じく、企業エゴによって消費者が犠牲にされているのです。つまり人権侵害はいつも利己主義によって起こるものだと思います。

人間は、社会を作ってからルールを作ります。または理想的な社会を作るためにルールを作る場合もあるでしょう。しかしルールは常に人間のためにあるのであって、ルールのために人間が生きていく訳ではありません。いくら立派な法律を作っても、それを守り育てる心がなければ、それは形式にすぎないでしょう。

人権擁護は結局、法律だけで守られるものではなく、僕達が人間への限りない愛情でお互いを支え合う時、はじめて達せられるものではないでしょうか。

いちろう~~[illegible]~~ちゃんの誓い!!

1、ああさめしを食いません

2、ひるめしも食いません

3 ばんめしは もっと食いません

宇宙怪 山崎勤吾

~~10~~ 9月24日 (黒)

~~あさ食べたものはその日のうちにエネルギーとなり残りません。だから気にしないでもいいと思うよ~~

~~夜寝る前・特に10時以後に何か食べるのだと間食じゃないけどもおいらたちから もんだって 何かの本にかいてあったけど 成長にすれば何とかなるよ~~

~~一郎君はりっぱな体格してるから それなりに必要なものは必要でしょう。~~

○10代　（高校2年生）

『本人の日記より』

7月8日

今日から期末テスト．保、現、化があった。思ったほど出来ない。
まだ7教科も残っている。気分が悪くなる。明日は16時間勉強するぞ‼

夕刊を見たら三重県の高校一年生が発作的に小2の女の子を殺したという。
からかわれて腹が立ったんだそうな。その気持ち分からなくもないと俺は思う。
俺だってむしょうに何かやりきれなくなって破壊したくなるときがある。
道を歩いていてすれちがうやつらの顔をおもいきりまわしげりでけっとばしたら
どんなに気がはれるだろうか。俺は昔からくらべたらずいぶんおとなしくなったなと
思ったりする。なぜだろう？　空手をやったせいだろうか。その高校生もありあまる
エネルギーを思いきりぶつけることができたらそんなことはしなかったろう。
何でもいい、何かしなければ生きているという実感がほしい。そう思って何もできず
ただ毎日を何となくすごしている自分。もうよそう。もうやめるんだ。くだらないみてく

れ
なんて気にするな！　自分をごまかすのはやめろ。すべてに努力するんだ。勉強も空手も。
こだわりをすてよう。かっこつけるな。笑われたっていいじゃないか。
生きてるのは俺なんだ。俺は俺。世界にたった一人の俺じゃないか！

7月9日
暑い！　まったく暑い。明日のテストであせるばかり。たかが期末テストごときにこれだけ
苦しめられるとはわれながら情けない。あ～いやだいやだこんなちっぽけなものに苦しむなんて…。
まだまだ俺は人間が小さい。

夕食の後散歩に出かけた。羊蹄山の山頂を白い雲がゆっくりと滝のようになだれ落ちて行くのを見た。
ふりかえるとあさひが丘のジャンプ台が夕日を受けて照り輝いている。透きとおった青い空。光る雲

…もう夏なんだな。

7月10日
まったく暑い。32～3度あるという。たらいに水を入れて足をつっこんで勉強してもまったく頭に入らない。雨でもふってくれないものか。しかし泳ぎてえなあ。
下宿のおばさんからアイスクリームをもらった。今日は3つめ。
明日は試験のヤマ場。明日さえのりきれば‼ い～や あさっても物理、G（グラマー）、地獄じゃ～、がんばれ‼

7月11日
テスト3日め…まったくひどかった。何が何だかさっぱりわかんなかった。明日は物理とG（グラマー）。
あ～くるしい。ほんとにくるしい。たまんないよ。たすけてくれ～逃げたい逃げてしまい

たい。
だけどできない。俺にはできない。逃げるな‼
夕方、めしのあと外に出て河原へ行った。テストのことで頭がいっぱい。ほんとに苦しい。
苦しくて苦しくてたまらない。とにかく歩きたかった。連日の暑さでか羊蹄山やまわりの山はうっすらと
もやがかかってはっきり見えない。西の空の夕日に照らされたちぎれ雲だけがまぶしかった。
そんなすべてがけだるい中で、俺は工事でにごった川の流れを見ながら考えた。
「俺はなんて幸せなんだろう」と。そうなんだ。俺が感じている苦しさなんて苦しさのうちに入らないような
ちっぽけなものなんだと。明日で終わってしまう苦しさ…。小さい。あまりにもちっぽけな苦しみ…。
学校を卒業して社会に出たらもっともっと苦しいことがまっている。むこう岸のあの人々も今までずっと生きてきて、苦しんだんだろうな。あの笑顔の中にどれだけたくさんの苦しみが入っていることか…。

あそこまで生きるまでどれほどの苦しみを味わってきたことか。
俺はまだまだ16才。期末テストだ実力テストだと苦しんでいる高校生活。それなりに楽しみながら…。
幸せだなあ…なんて幸せなんだろう…こんなに幸せでいいんだろうか？
生きよう！　今をせいいっぱい。明日はいつまでもあるわけじゃないぜ！　Let's Go！

11月19日

故郷を探しに旅をしました
なつかしい故郷の山や川…
甘ずっぱい草のにおい
焼けたほこりの香り
霧が合間に立ちのぼる　青いほのおのように…
海は変わらずに…
街は小さくなっていた

あんなに長い坂だと思っていたのに
あんなに大きな建物だと思っていたのに
もうだれもいなかった
知っている人はいなかった

残ったものはつかれた体と変わらぬ心…。
俺は故郷を四つ持っている。一つは島牧　一つは古平　一つは豊浜
そしてもう一つは——海。

○10代　（高校3年生）

『本人の日記より』

12月5日

午後9時10分前…鳥を見た。
期末テストの前日俺は勉強につかれて部屋の電気を消し　窓をあけて
ぼんやりと音もなく降りつもる雪をながめていた。
5分もたったろうか…突然すぐ前の家の屋根のかげからちらちらとすきとおった
鳥のようなものが　二十mくらいあったろうか　右へ左へ移動しながら空をかけた。
それはまるで幻のようであり白くすきとおって鳥のような形をしていた。
おどろいた俺はこちらの屋根にかくれてしまわない前によく見ようと窓から身をのりだした
——とその時とけた雪のしずくが目にはいり…見失って
ふる雪の中ではっきりとは見えなかった。
あたりが暗くなっても俺はただぼうぜんとしているばかりだった——
——あれは何だったたのだろう
テスト勉強疲れの俺の見まぼろしだったたのか——
気がついてみると雪はすでにやんでいた。
たぶん二度と忘れることはないと思う…。

○10代　（大学1年生頃？）

『夜』

やっと夜だ。ほっとする。夜はそれ自体が都市の鎮静作用を持つ。
街のうすぎたなさも少しは覆い隠してくれるし。『夜は黒い修正液』さ。
うせろ、うせろ、くずども。○ゃくしょう、帰れ！　帰っちまえ。都心に住んでいる僕は
夜になって近郊から通勤してくる百○どもが家に帰って人が少なくなっていると思うと
うれしくてしかたない。昼間の東京は人でいっぱいで息がつまる。

○20代　（大学4年生頃？）

『無題』

うえているアフリカの子供達の
苦しみもだえる表情をビデオでいっぱいに撮って

我々の貧しい食卓を飾ろう
お茶づけやボンカレーでさえ
世紀の食事のように輝いてみえるさ
「イチロウ語録　1　○ゃくしょうについて」

○20代前半

『ですとぴあ』

くらやみ　ひかり　よるのあめ　ぜつぼうのにじ　にじますのなみだゆらめく
ことばするどいつめ　わらいごえ　たからかにもえるそらわきでるゆめ
です　です　でーす　しのよろこびまたひかった　くろいそら　かぜのこころ
たゆたうながめさけびごえ　ゆくはてはすいせんのようにならない
はとがないたゆめのゆこんどせん　みとこんどりやくおうく　はいぜんべるぐの
つたさいりせい　ちから　ちから　げんきんなこえ　き○がい
くずれおちるびると　くずれおちるじがのこたえ　こえだめのびいかあ

ふらすこはゆれるゆらりゆらゆ　なんとかきたね＊るきがひかる　ほうらここが
げきてきなぶぶんだよ　いみはことば　ない　ない　ない　ない
ないないなるとに　かぜのゆめ

○20代前半

『無題』

お前ら人間どもはいつもそうだ！　気まぐれに俺たちをカワイガル。
えらそうに支配者面をするならてっていてきにやってくれ。
もっと残酷に、もっと非情に冷徹に俺たちをしめてくれ。
ときどき思い出したように優しくするな、ボケが
お前ら人間どもはかわいいものしか愛さない！
犬はかわいい！　猫はかわいい！　クジラはかわいい！　ミッキーマウスはもっとかわいい！

ウジはダメだ！　ゴキブリはダメだ！　ヘビもトカゲもノミもシラミも
ぜんぶいけない！　ハチュウ類は全部ダメだ！
コレラ菌チフス菌ビールスウィルスは許されない！
バカヤローみんな生命だぞ、クソッタレが！
カワイイキレイは本能に根ざしたへんけんだろうが

ウジが好き好んでウジに生まれたか？
ヘビが好き好んでヘビに生まれたか？
ノミが好き好んでノミに生まれたか？
コレラ菌が好き好んでコレラ菌に生まれたか？
ウィルス自身に何の罪がある？

お前らが猫、犬、ペットの動物愛を叫ぶなら
俺は全ての害虫、ハチュウ類の愛を叫ぶ！
俺は全ての病原菌の愛護を叫ぶ！
おぼえておけ！　人間のためにだけ世界があるんじゃないぞクソッタレが！

○20代前半

『私の信念』

——恩を三倍にして仇で返す——

○20代前半

『人格のもんだい』　——私はトポス——　ひとつのからだにひとつの人格

わたしにとって人格とはなきがごときである。

自分自身で『私はこういう人間です』云々と語るのは自己限定もはなはだしい。

自分で自分の可能性をにぎりつぶすも同じである。

人がわたしを多重人格者と呼ぼうが一向にかまわない。

多重人格とは人格にはばがあるということである。

いつから人間はひとつの体にひとつの人格ということを決めたのか?
それは人格の未知なる可能性をつぶすことにはならないか。

わたしはひきょうものを呼ばれる人格も失いたくない。
わたしはうらぎりものとしての人格を放したくない。
わたしはぎぜん者の人格も持っていたい。
わたしはヘンタイでもありたい。
わたしはうそつきの可能性を手ばなしたくない。
わたしはドロボーの感性を持っていたい。
わたしは殺人鬼の可能性も持っていたい。
わたしは猟奇王にもなりたい。
わたしのあらゆる人格の中の、色男、コ○キ、ヘンタイ、金持ち、フ○ラチスト…

自然は同一の雲を空にかかない。

○20代前半

『中年の美学』

私は中年である。決して熟年などではない。
私はとりつくろったごまかしは大キライダ。
単に言葉をすり変えただけで意味が変わると思ったら
大まちがいである。世の中から中年という言葉が全て
消えてしまえば意味はそっくりうつるのだ。
そんなとりつくろいで自分をごまかすのが
気に入らない。私は誇りをもって言う。中年だ。
ガキ共の笑い声がきこえるようだ。
コトバにしてもだ。
だいたい中年についてまわる負のイメージは
一体誰がつくったのか。ほかならぬ我々自身ではなかったか。
ケツの青いハナタレのクソガキどもに笑われるのもあたりまえだ。
やつらの反応は正直だ。ごまかしたってどうにもならない。
自分に恥じずに生きてるか。
キレイ事と笑われようが笑え、若者に「※ジェタメン（ジェントルメン？）」と呼ばせて

自己満足している
やつは同世代とは認めない。
そんなやつらは中年以下だ。消えろ！
私はあくまで中年としてガンコに生きる。仕事でも人としても。
我々からあきらめていては若いやつらだとてあきらめる。
もういいかげん飲み屋で全てをいばるのはやめよう。
恥ずかしい以外のないものでもない。
親として人口として、何らはずかしいことがなければいいではないか！

※ジェントルメンのことか？

○20代前半

『私は賛核』

私は賛核
私は核兵器の廃絶は必要がないと思う

むしろ絶対に残さねばならない
人類が核をやったということは我々の死を身近なものにしたことでもあるとおもう
やがて、この星が太陽の極大化によって消えることは
広く知られているが、現実の危機感としてはない。
人は身近に死を感じるから生きるべきだと思う
それでほんとうに核戦争が起きようが　いいではないか。
滅びるため争う程であったということだ。
死のない人生なんてつまらない
死にたえる予感をもてない種族は悲惨である
核は人間がはじめて手にした自殺用のナイフだ。
それで手首を切るもよし、それを手に疑うもよし
私はいう
私の頭上で核が爆発しても何もうらまない
人類の一人として死をうけいれよう
反核をする連中は
その意味を問うがいい。
人間という生き物が存在するにあたいするかということを
つねに背後に死の予感

それが充実した生を生むのだ

月がゆがむと狂い出す

○20代前半

機械になりたい　機械になりたい
何も考えずに行動したい
何も食いたくない　何も排泄したくない
時々油をさされたい
一日じゅう休まずに音をたてて動きたい
夜は静かにまわりの空気と一緒に冷えていきたい
命令を逆らわずにいたい
時々人間の手足をはさんで血を流させたい
もっともっと精密になりたい
年を経て赤く錆びたい。

ネジの一本までまっ赤に錆びてくずれおちたい
そして歴史を忘れたい

○20代前半

『無題』

80年　スターリンは明らかにあの時代において物語の狩人だった。

支配者たちよ！
もっと強固に、もっと強力に、俺たちをしめあげてくれ‼
現実が強力であればあるほど
幻想の翼（つばさ）を広げることができる
現実あっての　幻想だ
ヘソマガリなオマエ…平和であればある程、戦争を夢みれる
のみやでゼンキョートーがどうのこーの　くだまくオッサン
あんたたちはゾクゾクするほど醜悪だ

カクエーや中ソネ、レーガンの方がイカスぜ。
そーさ俺たちちゃ生粋の資本主義×
資本論はトイレットペーパーにするにしても汚すぎる紙だ。

○20代前半

『無題』

ホラ真実が今日も又
二丁目の便所で
ネクタイをととのえて
あるいていくよ

公衆便所ＬＯＶＥ
俺らのただれた愛は
この養豚場の豚のしあわせ
中性子爆弾のシャワーをあびるまで

互いの体をむさぼりあうのさ
昼夜を通して　むさぼりあうのさ
幻想が足りない
ウソが足りない

イカサマでもいい
誰かサイコロをふってくれ！
このままじゃ俺ら
この幸せがやめられない

管理され
ぎむづけられ
税金を払い続けるのは×楽以上に快楽だ

くろだいちろう

君は

食べ[illegible]なくてもヘイキだ

(日)/12/25 AM10:30 緊急宣言（ダイエット）

たいへん突然ではありますが私は現時点をもってダイエットを断行する言をここに公然と宣言します。以後私は一日一食を理想に気力体力の続く限り頑張り通す事をかくごにここに

12.25「少食のすすめ」くろだいちろう

思い断ったら ダイエット

近頃のグルメ・ブームがなにやら気にくわない「味覚は欲望感覚である」とヘーゲルもいっているが食いもののことをあーだこーだというのはイヤシイ事である
本来 タルホ先生は食を好まれなかった。食は生命を養う、業を深める行為である
食しないでいられるか 生きるために食うよりはむしろ生きるために食べる

○20代前半

『無題』

俺の体のどこかにイナガキタルホ
そいつはいつでもそこにい＊
俺はカンジた
イナガキタルホ

やつがいるんだ
語る必要のない感覚がここに！

俺の体のどこかに
イナガキタルホがいる
それはもう　どうしてか　俺に
イナガキタルホがいる!!!!
俺の体のどこかに　俺に俺に

それを感じる
どこかに
）
とにかく　体がない

○20代前半

『無題』

私はとつぜんに犬が飲みたい。
それも決して＊い犬などではなく，ゴミ箱をあさり泥水をすすり腹に回虫を1グロスぐらいたくわえているようなバイタリティーのあるやつを左のみみからゆっくりと。
私の胃液はどんどんとかす。犬の記憶も例外ではない．
思い出ひとつ残（許）さない．

想い出さえも許さない。

○20代前半

『無題』

陽気にいこうぜ、月夜の決闘。

やあ！　突然に、コンニチワ。
やあ！　突然に、ゴメンナサイ
どうやら僕は君がキライだ
どうやら僕は君の敵。
君の気持ちはじゅうぶん知ってる。
僕の気持ちもおんなじだ。
（ホントはチョットちがうけど）

そんな不条理なと君は思うかもしれない
だけどさわやかに認識してくれ
ぼくと君は　やらなきゃならない
ぼくと君は　やらねばならない
さあ、今夜の月は君には残酷だろう
僕はつめたい夜行少年
君の身体をひきさくだけさ

ああ　だけど、ああ　だけど
彼女が君に涙を見せたら…
立ち去る以外に道はない

○20代前半

『俺はマルキストで国粋主義者』

俺はマルキストで国粋主義者だ
もちろん「資本論」を読んだこともなければ、建国記念日に旗を手に皇居へ行って
「天皇陛下万歳！」を叫んだこともない。だからこその二つは両立するのだ。
おわかりか？　脳たりん野郎！　ほーらてめえだ。
これを読んでるあんたのことだよＦ*ｃｋ　ＯＦＦ.
お前ら読者はこのテクスト本を壁にたたきつけることはできても
此の俺をぶんなぐることなんてできないんだぞ
バカヤロざまあ！　お前じしんの無力を知れ！

俺はマルキストで国粋主義者なのでよわいしア○ルセ○クスが大スキだ。
だからアナーキストなのかもしれない。それもいい。それはいい。

俺はマルキストで国粋主義者なので朝日新聞は読まずに日経を読む。
駅のゴミバコでひろう日経はいい。
日経はいいぞボンクラ野郎ども！
たいくつな三面記事はすくないからな。

マルキストで国粋主義者なので酒じゃ酔えない　自分にしか酔えないんだよ――

笑ってくれ、なあ百〇ども！　こうして書いているところえだめ臭え
てめえらの善良な臭いがぷんぷんと
なあ　もういいかげん　読むのをやめてはどうか？
俺はマルキストで国粋主義者なんだよ。おわかりか？
だから政治家のように灰色じゃない　真っ黒だ！

おんころころせんだりまとうぎそばか！
（薬師如来の真言　オン・コロコロ・センダリ・マトウギ・ソワカ　の駄洒落か？）

○20代前半

『アザラシの夜』

アザラシの夜は
ペンの先を机につき立てて
地球を回して遊んでみよう

きみの部屋から始まるさ
コップは空からマッハ３
つくしがはじめて星を見る
閉めて４３０円
スープがこぼれて壁の中
ドキドキたばこは雲の影
ボウシの底に月を出せ

アザラシ　アザラシ
共喰いはやめろ
アザラシ　アザラシ
寄付はワザトラシイ
アザラシ　アザラシ
あしたは満州
アザラシ　アザラシ
脳ミソが笑う
アザラシ　アザラシ
おまえのせいだ！

アザラシ　アザラシ
おかあさんが泣いてるぞ
アザラシ　アザラシ
出頭せよ　召集命令だ‼
アザラシ　アザラシ
セルフ・サービス
アザラシ　アザラシ
３割引きだ
アザラシ　アザラシ
にんげんを返せ！
アザラシ　アザラシ
ビタミン・ゼロ！

『５／２　僕らは何を破壊できるか』

僕らは何を破壊できるか

僕らは何を創造しうるか
僕らは何を守りうるか
僕らは何を得られるだろう

僕らは何を滅しうるのか
僕らは何をきずけるものか
僕らは何を曲げられるのか
僕らは何を超えられるのか

強力にして冷徹な高度資本主義社会のシステムを前に
僕らはオリジナリティーをあきらめる

何かからはずれたと思っても　必ず何かにはまってしまう
出口の先はシステムの末端なのか　中心部なのか
それすらわからない
敵はシステム　中心はない
最初の相手は自分だ！　自分を消せ

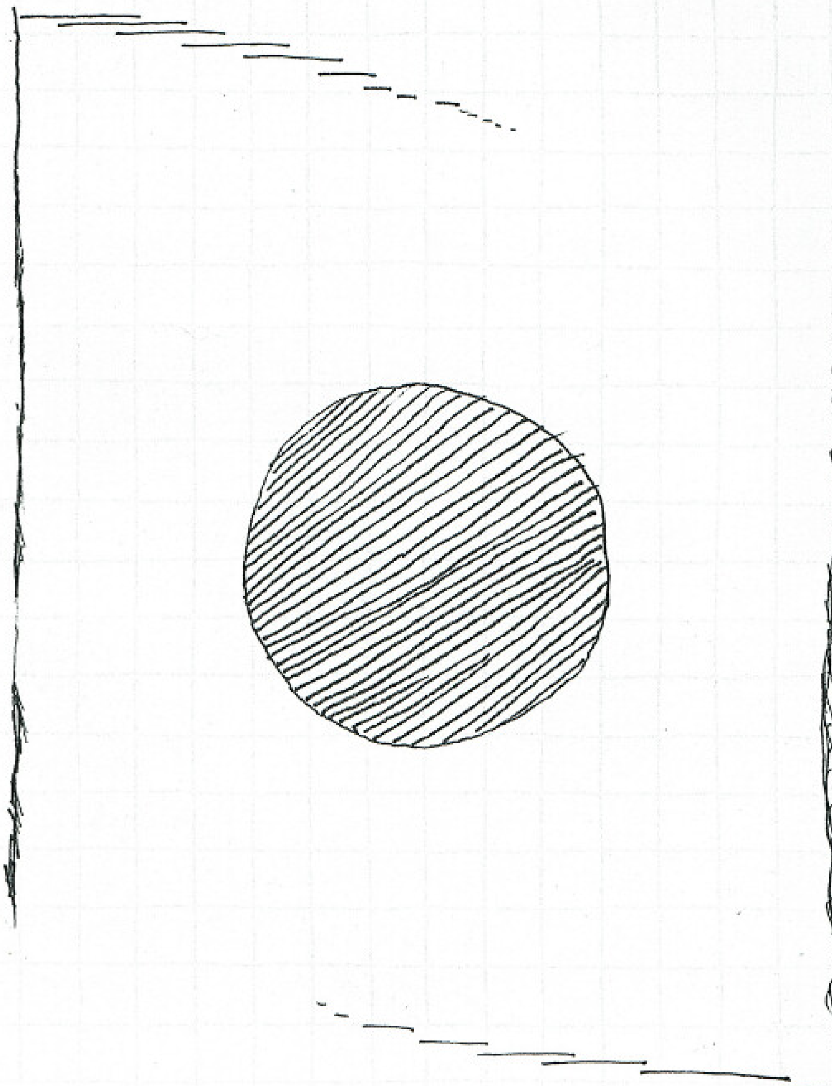
○20代前半

『じぶんがたくさん』

あなたは常にあなたであることを望んでいるのか。
いったい、いつまであなたを続けるつもりなのか。
現在のあなたをやめたいとは考えないのか。
自分について語ることはすべて自己限定にむすびつくことに気づいているか。
きのうまでの醜悪なあなた、明日もずっとそのままかシワはだんだんふかまるばかり、
予定表は消化されずに日曜日だけが気やすめか。
老後のために今を生きる。
ほんとうにやりたいことなんて考えたこともない。
食う食う、食うことだけでせいいっぱいだ。
キミはとてもよくやった。うん、ありがとう。関係ばかりがリゾームだ。
しがらみばかりが糸をひく聖人の夜とは汚き水のごとし、俗人のそれはドブのように納豆のように絡み、

ねっとりと糸をひく人間関係、もうたくさん、たくさんだよバカヤロ様×、お代官様お願いでございますだ、
年貢を×げてくだせえ、とりたててもらえないと払えないクズ、ＮＯ！ ＮＯ！ ＮＯだ、くそくらえ！
それにしても一体誰のために見栄をはる？
見栄をはらなければ生きられないような弱さが個性だというのか。
かっこつけたいほど（かっこいいのか？ ハア？）ステキなやつらがこの世界に何人いる？
信じられないのは顔の可能性がゼロのやつら× カッコつけるバカには頭を下げよう。
お前はひとりか？ ひとつか、わたしはひとりですがひとつではありません。多様体へと飛翔せよ！
マスクは多い程良い。武器が多ければよいようにね。
×ＦＥは読まない男。→ぼくたちの時代は明るい闇につつまれた
×はいろいろなりたいでも×を

日本がぼくを憎んでる。



ぼくもきみが大好きだ!!

幽霊たちはよく笑い、よくしゃべり、泣きもすれば、おこる
ときどき、人の足をふみ、ぶつかっても知らんふりをする
時にはよっぱらい、ゲロをはき、よいつぶれてすわりこむ
そしてぼくはこの幽霊たちに親しみも怒りも感じない
ただ存在をときどき、うとましく思うのだ
店に入り主より先に「いらっしゃい」といおう。場のハカイ

○20代前半

『無題』

問題は、たいして問題にならないことが問題としてまかり通っていることである。
DNAの命ずる所の欲望をことごとく無視するがいい。
反抗はいけない。反抗するのは単純だ。
DNAに刻まれた信号の言語はどんなものだろう。
無意識の背後にあるもの、という気がする。

○20代前半

5・深夜

公園で幽霊に出会う。

不思議なことに恐怖感がわかなかった。

感情が動かなかったというほうが正しいだろう。

人形（ひとがた）はめずらしくもなんともないのだ。

駅や朝の電車でたくさんの他人とすれちがい、

数多くのひとびとの姿を風景にとじ込めてしまうように、幽霊（かのじょ）を見ていたのだろう。

幽霊でさえも見知らぬ他人として無視してしまう。

冷徹な感情中枢部が哀しかった。

声をかけてもいいですか？　遠くでくこえる声「声をかけてくれて　ありがとう」

ぼくたちは毎日たくさんの人間の姿を見、すれちがい、別れてゆく。

決して声をかけることのない多くのひとびと。

この中のほんの少しでもいい。話し合えばよい友人とは×だろう。

あの幽霊、何がいいたかったんだろう？？？？？

街をゆく見知らぬ他人は皆、形のある幽霊である。

言語で考える事自体やつらの思うつぼなのだ。
コトバをこえるコトバが欲しい。
器官なき身体とは器官を排した身体のことではない。
器官の欲望に支配されない強い身体ということでももちろんない。
全てが全体となり部分をもたない全体のことだ。
これが何を象徴するものか考えてみるのもおもしろい。
書かれる以前にコトバはあるがコトバ以前のコトバとはどのようなものか。
書かれたことでなければなみはないも同然ではない。
ないのだ。だから書け！
書くとは「欠く」ということばに似て、欠如したものをうめる行為でもあり
べつの可能性を捨ててしまい誤解をうむもととなる意味の「欠く」でもあるのだ。
書くは「欠く」　僕は「かれ」　忘れるな。
自我なんてあるもんか。

○20代前半

『戦闘的知的生活のすすめ』

それを支持するのも、それに反抗するのも、それの存在を認めることにはかわらない。
たいせつなことは憎悪を反復＝回転（もしくは　反復二回転かも？？）して
エネルギーをからまわりさせるよりもむしろ、生産的に
まえむきに考えてゆくことである。生きられる時間は短い。
目的のためには手段をえらぶな！　つねに最短距離をめざそう。

近ごろやっとエディプスから、性欲から、愛から解放されるにいたった。俺は※シィシィジィー
※COS　（※印　意味不明）

DNAの深淵にたたみこまれた対（つい）への欲望をCUT　OFFするんだ。
愛のない人生のすばらしさを探そうとも
しないで愛を讃じるのはもうあきあきだ。アイドルもいらない。
女もいらない。車も、カッコも、金もいらない。
身のまわりのほんとのことが知りたい。
ありそうもないことだが、全てを知りつくしてしまったらどうしようか？
それでも君は更なる未知を求めて旅立つんだろうな。

好奇心から◯ＥＸするのはカンタンだしＳ◯Ｘをするのもいいもんだ。
ＳＥ◯のあとのざいあくかん？　ともつかぬ奇妙な冷静さ。
あのほんのひとときの中にこそ、覚醒への道があるような気がしてならないのです。
自由であることに気づくこと。
このかんたんなことに誰もきがつかない。
論理は現実に光をあててかべにうつしだされたかげのようなものだ。
影からは決して全てを知ることはできない。
感じるのがげんかいだろう。
決定——たくさんの自分の中のたったひとりをコロスこと。

想像力とは物理的な現在とは異なった∧別の現実∨へ到達しようとする力
　ニーチェ「偉大な人間とは自分の理想の演技者である」
——意識を極度の緊張状態において自己の発展を計る試み——

反省しよう黒田君。つまり君は緊張が足りないというわけだ。
仕事はもう5年にもなる。遊学ももうあきた。女も5年ごし。
もうたまらんぜよ！　と叫びたい心境はわかる。

衣食住の全てを変えろ！　仕事もだ！　戦闘的知的生活を目指そう。
思想を学ぶのはいい。しかし現実の生活に生かさなければ読まないのと同じだ。
金と時間をかけて何をやっているんだ。
頭の中でおわってしまう人生なんてたいしたことないだろう。
影響をあたえよう。すすんで影響をあたえてやれ。
おとなしくするのは老人のやることだ。
学んだ思想をもって現実の世界に切り込んでゆくんだ。
君の革命はたとえばある日、昼食を抜くことではじまる。
あらゆる思いこみをもう一度疑うこと。
問題が生じたらまず問題が問題なのかそうでないかけんとうすること。
きのうと同じじぶんをやめること。君は刻一刻と変化しているのだ。
自己の変遷を意識せよ。同時点にとどまるな。速くあれ！
いもしない自分を気にするな。決して理解しえない他者もないのだ。
その欲望は誰のものだ？　お前たち（黒田一郎）の望むものは何か？
構造を透析せよ！　他者をおそれるな。
それさえお前じしんだ。あいつらを殺さない限り自分もない。
千の高みにかけあがれ！　多様性としてのじぶんを意識するんだ。
強く、暖かく自分を意識しろ！

お前（黒田一郎）はお前の父、母、兄弟でありこの世界そのものである。
これから出会う人間の全ての心に爪を立ててやれ！
忘れられない存在にするんだ。
精神分析のきかない人間になれ！　時間はないぞイチロウ。
とりあえず恥知らずになろうよ。
ねえ、そこの君たち　恥知らずになろう　何を気にして生きてるの　流行？　女の子の存在？
たしかにいいね　でもそれだけでいいのか？
もう一度恥知らずになろう
手段のために目的を選んじゃいけねえ！　つまんねえよ　実際

○20代前半

『「言語」という神　「神」という言語（コトバ）』

右手のやっていることを左手に知られるな！
コトバが思想を表すのではない　コトバそのものが思想なのだ

コトバ以前に思想はない
主体に批判能力はないのだ　対立物がなくても存在してしまうもの
鏡がなければ確かめられない　支配されるもの（ヒト）─支配するもの（コトバ）　この
２つのかんけーは
一方が支配されていることに気がつかないのうまくやっていける
ヒトはコトバにあやつられていることさえ気づかない。ＤＮＡの背後にあるのは
あんがいコトバだったたりしてね　カタチがあるものよりないものの方がつよい！
われわれはすでにコトバによる支配下におかれている　女や家族を捨てることはできても
コトバを捨てることはできない　コトバを捨てることができるのは死んでからである
コトバに対する学びをいとむ（？）　バロウズのカットアップメソッドは
グルジェフのストップエクササイズ　ブレーキレッグクラスファイト！
コトバほど手軽なドラッグはない　どれだけつかってもへらない
国家にもみとめられている　誰もとがめない
コトバと戦うためにはコトバを知るコトが必要だ　コトバを知りつくせ
コトバ以外で思考できない悲劇！　俺たちは生まれながらにして
コトバという＊＊＊まかれていたのだ　ブロイラーのように
何かがちがう‼︎　僕等はどこかであやつられている
この暴走を止める手だてはないのか…

コトバで語るな。　俺のコトバは唯のS○X
無意識だけではない　意識もまたコトバである　忘れるな
無意識は他者のディスクールである　　ラカン

○20代前半

『それがオマエだ！　それを殺せ！』

やりきれない想いが日々をうめる。一体我々は何に対して怒り何のために考えているのか？　コトバの構造はコトバをつかって考える以上わからない。コトバをこえたもの、直観でやろうとしても、それさえもコトバのよう構造化されているという。実体論者はいいなあ。悩まなくても信じられるんだから宗教に近い。人間の思い上がり。直観…信じるしかないのだろうか…。「ぼくがしたいことは何ですか？」もう××な欲望では満足できないもんなー。
死ぬことだけは確実だ。宗教ばかりが大はやり、不安がないのが悩みのタネだ。こころはいつも非結晶質。ゆらゆらゆれて流される。

恋愛だけでも信じてみるか。恋愛だけは信じてやれよ。○ＥＸばかりが目的だ。だけどＳ○Ｘに飽きたらどうしよう？　変態の次は「死」だけだ。
とつぜんおとずれるから「死」は面白いんだよね。きっと。

私（人間）の欲望は他者の欲望である。　Ｊ・ラカン
人間は初めから何かを欲望する存在ではなくなにかによって欲望する存在になるのだということである。
自分のことを三人称で語ること→自分が見えてくるのではないかな？
Tu es cela Tu ez cela
テュエ　スラ　テュエ　スラ

それがお前だ　それを殺せ　それ＝鏡像
一人称は三人称のうらがえし
他者があったから自分（主体）が生成できた。
これからじぶんのことを三人称で語ってみよう　奇妙ではあるがそれは正確だ。
かれは　かれらは
それ自体が閉じていて内面に無限の反射角を持ちさまざまな差異を生成する点において、人体も又、ひとつの高度資本主義社会であるといえないこともない。か・ら・だ。資本主

義！
自分の中に自分でかってに理想をつくりあげてもうひとつさえないげんじつのじぶん（も又、虚構なのだが↑現実という虚構）と二人の自分をでっちあげて、そのギャップになやむ。
おろかしさもここまでくればお・か・し・い・なー。

○20代前半

『無題』

僕の還る
闇はどこ？
君の眠る
夢はどれ？
魂はいつか

宇宙を夢見るだろうか
忘れるんじゃない
僕はいつでもここにいることを…
君は真実にふれたかい？

○20代前半

『無題』

ごめんね。
ぼくは同情したいんだ
だから君をなぐる
君にはなんにもうらみがない

だからはじめにあやまるよ
ごめんね！　ごめんね！
ぼくは悲しみたいんだ
だから君には死んでもらう
君には何の憎しみもない
だからはじめにあやまるよ
ごめんね！　ごめんね！

○20代前半

『幻想遊録1』

僕がこたつに向かって座ると、僕の背後の時間と空間は、僕が見ていないものと思って、ほっとひと息、くつろいじゃうんだ。
それを小さな手鏡でこっそりのぞいている僕。暗いね。
誰かが耳のうしろで　ささやくように　歌ってゐる。

耳をすまして　じっと聞いていると　遠いむかしに僕がつくった
へたくそな詩たちだった。

僕はいつも僕の中にいて、外へと出てゆくことができない。
僕はいつも、僕という一定のひろがりの中を堂々めぐりだ。
ひっくるめて他人（ひと）から個として把握される情けなさ
今こそ外部が必要だ　今こそ飛び立つ時なのだ。
見えない壁がはっきりと感じられる。
それは「見える」のではない、「感じる」のだ。おわかりか？
僕はいつも僕の外側を恐れる。
僕はいつも外部にあこがれ、恐怖している。
僕のイメージの外へ行くこと。
これが当面の課題だ。
自分がわからなくなるまで知ってみる、感じてみる。
身体（からだ）で感じる。

「Zoo」へ行こう！
「まさかクマを放とうっていうんじゃないだろうな？」

狩りをするんだ。夜のZooへしのびこんで
オリの中のZooでいっぴき残らず殺しちまおう！
やつらを生からはなしてやるのだ

○20代前半

『無題』

多くの作家たちが人間の物語を数限りなく書き続け
わが愛する稲垣足穂は人間ではないものの物語を書いた。
そして、これから私が書くべきは、もはや人間でなくなってしまった（人間性の抜けた）
人間たちの物語だ。
道徳や愛、友情や真理は20世紀とともに消えてゆく。
僕の小説の登場人物は人間だ。感情と行動の予測が全くつかない、それでいて、どこかに
××の影が見える。

彼らは愛を意識しない、確認しない、夢見ない。
全ての思想からはずれて、もはや理由も目的もない。

一を聞いて十を感じる。イメージの外へ、外へ。
一瞬見た絵がそのまま焼きついて　僕の頭の中で物語を増殖させる。僕のいしとはかんけいなく。
たとえば、ハウルクレー（原文ママ→パウル・クレー）の緑だけの街。
緑だけの月。そのまま広がって、街の中まで見えつづける。街の物語は続くのだ。

読者へのちょうせんじょう

みんなこの小説を読んで主人公を憎むがいい。思いきり憎むがいい。
その思考を、行動を、きゅうだんするがいい。
そうして倫理を確立しろ！　平和を願え、まともな人間になるがいい。
だが、お前らの中で、この主人公の行動に一瞬たりとも美しさを感じたりしたのなら、お前の倫理は偽物だ。
お前の中の影をひきずり出してやる。



バースト・ヘッド

+ ねえママ
だ〜れ？ ホア？

ケケは？

少女

ねよーよー
ウルサイ
ねぇ

だれ

ずーずーしい
ずーずーしい
ずーずーしい

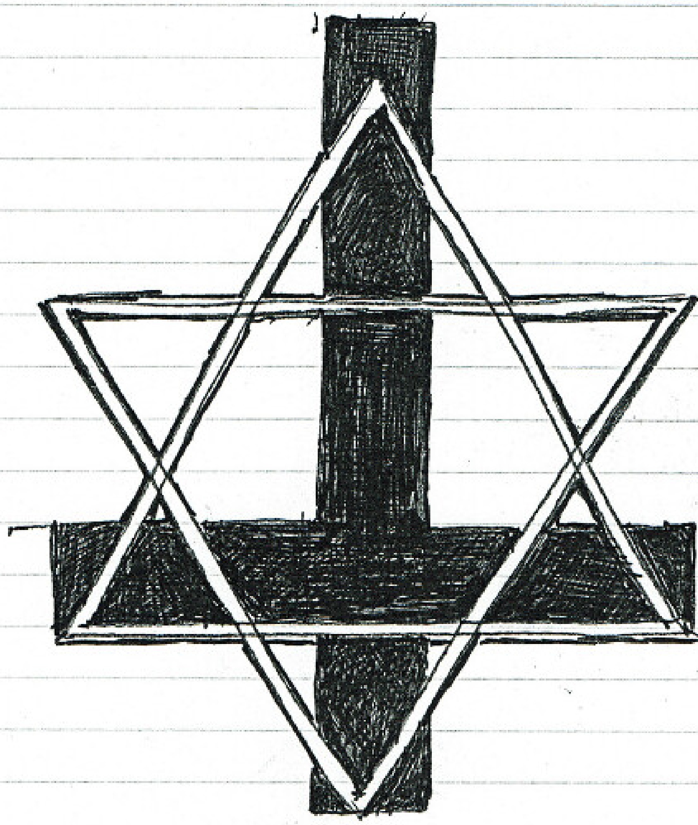
切っちまえ 切れ

バーカ

アホ

切れ 切っちゃう 切れ

やめろバカ



○20代半ば

『呪わしいのは』

呪わしいのは私じしんの平和である。
見えない敵、感じえない敵が多すぎて
憎悪や怒りを持つことができない。
ヘブライ語学者の話では「パン」と「戦」は語源が同じで、「パン」は「戦」によって得
られることを意味するという。
そうだ、何もかもあたりまえすぎて、金魚の様にボケてしまっているのだ。
コトバが平和なんだ。

私は差別用語を認めない。使ってはいけないコトバなど存在させてはいけない。
言いかえだけでは意味は死なない。
言わないだけではすまされない。
社会にてきとうではないコトバをあつめてふうじこめ
平和なコトバだけを流通させるなんて　おのれの　意識のワクをしめて限定を増幅させる
だけなんだぞ。

ぼくは自分自身の中でときどきおこるわけのわからない怒りや憎しみを全てはいじょしようとはおもわない。
ぼくは小心でやさしくて　ずるくて　小ざかしく、ときどき怒ったり　憎んだりするじぶんが好きだ。
それは失いたくないものだ

平和のテンプクはコトバから！
僕は吉祥寺外口書店のエロ本をおかない品のよさが嫌いだ
におわない水洗便所と同じくらいキライだ
清潔感がうらがえって不快感になる　あの拷問（？）を君は理解できるか？　F◯CK
ME！

○20代半ば

『ぼくは自分を数えきれない』

ぼくは自分を数えきれない
ぼくは〜ですと語ることはその場においての自己を限定せざるをえない
回路を閉ざすな‼　開けろ‼（機械は自分を感じられるか？）

限定された自分を語ることはむずかしくない　広告を作るみたいにカンタンさ
エンピツをけずる僕、ビールを飲む僕、くそをひる僕、S*X中の僕！
猫と遊ぶ僕　カサをさす僕　バスに乗る僕　コーヒーショップの僕
ポテトチップを買う僕、灰皿を万引きする僕、パチンコがダメな僕
フロー者の才能のない僕、権力が好きな僕、ぺ○スの小さい僕
高円寺の僕、古本屋の好きな僕、おフロは毎日はいりたい僕
夏は北海道へ帰ってしまいたい僕、のこちゃんと僕
僕をみつめる僕、僕と話す僕、僕から逃げたい僕、僕が憎い僕、
僕の好きな僕、僕の一番大好きな僕‼‼
僕、僕、僕、僕、大統領！　僕、僕、僕、僕、撲殺！
…………………………
コトバは僕をとらえきれない。

○20代半ば

『ＴＥＬ』

こんばんは　はじめまして　私は——といいます。
これはいたずら電話では
ありません。
あなたが誰であろうといっこうにかんけいありません。
でたらめにダイヤルしたので二度とかけることもないでしょう
そのままきいてください。　実は暑中見舞いなのです。
「暑中お見舞い申しあげます」　いいたいことはこれだけです。
なぜこんなことをするのかというと、先日私は暑中見舞いを書こうと思い
立ったのです、突然に。
わけもなく　もともとパラノイアックな私の性分ですから
そう決めたらすぐにでも実行しないと気がすみません

ところが考えてみると私には暑中見舞いを書く相手がいないのです。
東京に出てから6年、もうずいぶんたつのですが書く相手が一人もいないのです。
そう思うとなんだかやりきれなくなって　こうして　ほうぼうに電話をかけている
さいちゅうなのです　どうです　東京にありがちな話でしょう　アハハハ…
自分でもおかしくて笑っちゃいます
いったい6年もなにをしてきたのでしょう?
暑中見舞いをかくあいてのいない6年なんて何だったたのでしょう
笑ってください　いっしょに笑いましょう　アハハハハハハハハ

○20代半ば

『どうか僕を救ってください』

どうか僕を救ってください
僕は自分が何を考えているのかさっぱり
わからないのです

おねがいです　僕に指し図してください
もうなんべんもやってみましたがダメなのです
クスリも宗教も一向にききません
ナムアミダブツが言えないのです
人に相談してもぜんぶダメです。
何しろ相手は自分ではないので
僕はとても何にもなれません
自分は何処にいるのでしょうか？　アタマの中でしょうか？
ムネのオクですか　区役所の住民票の中なんですか。　わかりませんか？
あなた知っていたらおしえてください
もしや　あなたが自分なんですか？　え？
「あなたはあなたの自分」ですって？
だけど一体何処にあなたがあなたのじぶんである保証があるのですか？
現実は何処に？
現実は論理の内にあるというのですか
ああもうわかりません
存在って何ですか。　ここはどこですか。
オヤ、あなたの影が見えなくなってきましたよ。

あれ、どこへ行ったんです？
あれ、ああ、また私一人だ、はっはっはあ、ワタシ一人
世界はあなたの一人芝居だったのですよ　フハハハハハ
フハハハハハハハハハハ　フハハハハハハハハハハハハ……

○20代半ば

『コントロールが消えるまで』

1.
コントロールが消えるまで
いきなり性欲が股のあいだを蹴上げて
生体ラジヲ
１９２０年代をかき乱した言葉塵
俺の時間は最後の黒いかけらを使い尽くしていた
こうして俺は公共スパイとなり、誰のためかは知らぬまま、

交通標識、新聞会話の断片から受ける
指示に従って働く。　ぶっこわれたおかままであと五分
「世の中におかまより悪いものがあるとしたらそりゃヤクの臭いだぜ」
水晶の喉
俺たちは消化されここから消えさる。
二重が国を支配する
何を持ってるんだい……ガキンチョ…口の開いてない人間体?……
ここには何もない…変身は完了した。

2.

死んだ郵便ハガキのことを考えているのか?
ぼくらは消化されて何も残らない
百万の成人に習慣の壁と時間の国壕を破らせ
カットシティへ連れてゆけ!
言葉線を切断せよ
時間線を切断せよ
カットシティへ連れてゆけ!
——イメージをもっておはいり下さい——

脊椎の昆虫快感　壊れた部屋の虻色の欲望
覚えておけ　訪問はただ一度だけだ
体のない叫びをケイレンしながら死ぬ
問いは遥か遠くにある。

○20代半ば

『無題』

暴力はいい。
暴力はイイゾ、イチロウ！
暴力とは構造主義が包括できなかった
生命の本性にもとづくロマンである
時代でウケているものの半分以上は暴力である
暴力は論理を超えたひとつの説得力である！
ギロンにあきたら暴力だ！

力なき正義は無能なりとは歴史の中での道理である。
アルトーはカラッポの靴をにぎって死んでいた。
だけど中身のつまった靴なんて言わないのね、フッー。

○20代半ば

『無題』

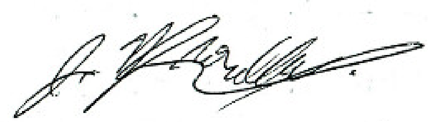
精神　は　今日　気まぐ　れ　だ
時間と　か　空　間とか　抽象的な　ものが
一層　あや　ふやな　夜　に

僕の　思考　は　横す　べり　すべり
一瞬　の　ディペイズ　メ　ント
その　とき　僕　は　世　界　を　見　失　な
った　確　か　に　見　失　な　っ　た　ん　だ
虚　無　の　さ　け　め　が　見　え　た　か　い
そ　の　空　虚　な　一　瞬　に
向　こ　う　の　空　に　見　え　る　はずのない
420。　の　満　月　の　出　だ
月の　中　に　月よりも　月らしい　月が　映って　いた

月よりも　月らしい　　月は　月から　出ようと　身をよじり
やがて　一じんの　疾風　と　共に　月は　古い皮を　脱ぐ
だ　けど　それは　たいしたこと　ぢゃ　ないよ

ぼくは自分を数えられない!!
ぼくは自分を数えられない!!

ぼくは ひとり だけど
ぼくは「ひどう」じゃない！



○20代半ば

『無題』

決して理解されることのない精神を持ち合わせてしまったことの不幸。
それを記述することの無意味さを知っていながら記述せずにはいられない精神の弱さ。
私には笑えない。私には感情がない。
二十数年の生涯を通して、感情を表す場面を知ってはいるが決して感じることができない
客観とはちがうある種の不透明な主観を持ってしまった。
この不確実な存在／非存在。

私はどこにある？
午後のアルトー
精神が落ち着きを失った午後、私はアルトーの本をひらくが見えないものにかこまれてあ
せってくる私、私、私…。
私はいったい何をあせっているのだろう。
思考が体の中を所せましとかけめぐる（ぐるぐると確かに）。

こんな時に読むアルトーはことのほかサイキックだ。
思考速度が速すぎる。感情が思考についてゆけない。
だれかぼくをとめてくれ
屁が出る。

○20代半ば

『君がもし』

君がもし、作家を志すならば書くにあたって念頭におかなければならない事がある。
それは「自分の事は棚（柵？）に上げろ」という事だ。
自分の生活やスタイルにこだわっていては私小説止まりである。
書いてはいけない事など何もないのだ。
全て限定がよくない。
・私は手段の為ならどんな目的もいとわない
・「自然に生きる」事にこだわることはすでに不自然であり

このことは「私はもはや自然物とはなりえない」ともつうじる。
言葉を信じてはいけない。自分も疑え。
なんじの師を疑え！
救われたいと考えるうちは構わない。
美は存在しない。人々が美と感じる物だけがある。
美を求める事は差別である。
「自分」はひとりではない。
私は私の生を存続させる為に多くの生命になってきた。
彼らが死に際して何の文句も言わなかったように私も死に対しては
それをこころよく受けいれたいと思う。

○20代半ば

『いかがわしいファーストルーム』（※タイトルでなくメモ？）

火葬場で死体を焼いたあと、みんなで燃え残った骨をかじる習慣は、私の地方（北海道）

だけではありますまい。
あれって妙においしいんですよね。
焼き魚の骨とはまた違った味で。これはカニバリズムとは、いえないでしょうが…。
※
肉食の害については、「血がにごる」だの「業を深める」だの、色々と言われていますが、私の場合、肉を食べると
殺された動物の憎悪を・は・・どうとして感じます。これが人体に悪影響をあたえている
のではないでしょうか。
※
「人肉を喰うと、体がむくむ」「うまい」とニューギニア戦さ帰りの○さんは言うのでした。
二万人行って26人ぐらいしか帰ってこなかったらしいのですが、全員カニバリストだった
ということです。
(付)マラリアにかかると、治った時、他の病気がふきとんでしまうそうです。
※
私は高校時代、下宿していてしかも貧乏だったため、年間200個以上インスタントラー
メンを食べるという生活をしていました。
ある日、袋の口をあけたままにして酸化していたインスタントラーメンを食べて激しい中

毒をおこし三日間ねこみました。
胃袋がうらがえってしまいそうな中でもう死んだってインスタントラーメンなんか食うも
んかと心に決めたのです。しかし…。

○20代半ば

『無題』

僕の革命は、つまらない事やくだらない事などがうじゃうじゃと書きなぐられた
ノートの空白のページからぼんやりと始まる
それはちょうど、季節知らず知らず移り変わってゆくのと同じように
ごくごく自然に始まるのだ。

きっかけはなんでもないごくふつうの、たとえば今まで飲めなかった
トマトジュースを急に飲めるようになったこと、真剣に就職を考え始めた
ことなど、ごくささいなことからにすぎない

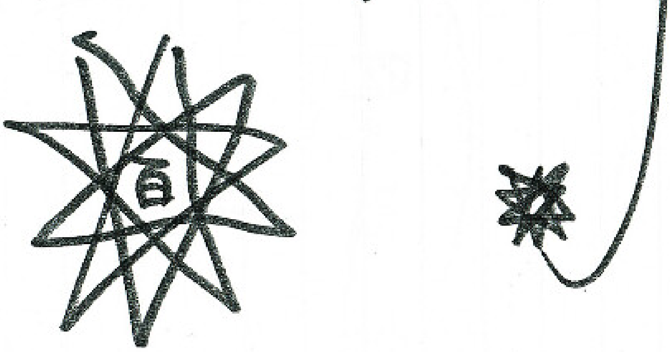
つるりと皮がむけるように、人間は年老いて行生のなんだ
この茶店を出た時から、僕の人生は、たぶん変わる。

このマニフェストは、いいかげんにいいかげんなもので
つまりようするにいいかげんだから良いのだ

〜 おれは言葉と いっしょに 生きるよ。〜

J. Kaneda

村崎百郎



真実は無数唸る。全てはそこから始まるのだ。
法則は成長するものなんだ

○20代半ば

『無題』

追従は理解ではない：理解した時あなたはひとりの××だろう

つねに、つねに自分の方向を確認せよ。
それは自分から遠くはなれている人に聞くのがいいだろう。
自分が今どこにいるかどこへ進んでいるか。
自分自身ではみえない。
外部との接触。つねに社会とのかかわりの中で自分をとらえることを忘れるな。
ことなるひとと話すのもよい。
俺の場合、物理、科学、法、数学系のトモダチを求めよ。

精神物理学へのほのかなあこがれ。
死者よ！
投票所へ行こう！
毎回毎回グズみたいなやつらが当選するのはそいつらの＊＊＊のグズどもがいるからだ。
だが、投票所へ行かない俺たちはそのグズども以下のグズの中のグズだ！
だから投票所へ行こう！　グズの当選をゆるすな！
せめてただのグズへもどるために！
この世界が少しでもよい方向へすすむように。

○20代半ば

『無題』

満月の夜は気をつけておくれ
満月が西の空にかかるとき

○気の光が地上をつつむ
あらゆる憎しみが光ともえて
人の心のやさしさを切りきざむ
ああ　だから
君だけには気がついてほしい
あの光が太陽の光を反射したものであることを
ああ　そして
君だけは忘れないでくれ
あの光は憎しみを照らすものであることを…

満月が何故に凶々しいのか？

○20代半ば

『無題』

上を向いて墜落しようよ
決して助からないように
叫びだす　夏の空
２５４人の夜

×

上を向いて墜落しようよ
決して助からないように

撃突する　夏の山
二百五十四人の死

♬

上を向いて墜落しようよ
決して助からないように
叫びだす　夏の空
二百五十四人の夜

◯年代不詳

『忘れてはならない』

忘れてはならない。
この国で成功するのはゲイと変態とキ◯ガイだ。

正常なやつらなんかいない。
やつらが正常でないことはシブヤのハチ公前の人海中を行けばわかる。
キャバイ女が大好きさ。
あの中で気も狂わずにいられるなんてふつうじゃあないぜ。
とりあえずぶん殴ってから考えよう。
思考と行動の一致は目前の他者をぶん殴る所からハジマル。
ユメのあるクラシ、コエダメのないクラシ、クラシックの好きなクラシ
ダマサレつづけてもなお人を信じる大バカ者よ
お前はパターンの神に勝利しているのだ。
キャバイ女のケバイヘアー。
どんなに勝利しつづけても、君のコトバはゴミダメだ。
ハキそうなくらい。
何に向かってキバをむく?
目前のチンピラにキバをむくよりも前に
システム全体にキバをむけるヤツはいるのか?
対立をしている向こう側でニヤけていたやつらがたまらない
もう　がまんできねー
いい歌がないとグチっているヤローは自分のうたをうたえ

人の歌をケナしてるやろーはじぶんの歌をきけ
ねえ　CTRの前で感情を忘れてゲームするのはやめようよ
CTRの前で充血した目を向けるのはやめよう

※CTR→ドイツのスポーツカーの事か？
　　　　　胸部レントゲンのことかも？

○年代不詳

『月について』

月よ、
この窓から
いちばん、近い星よ
不思議な光る地面よ
この夜のめじるし

青白く光るテレビ座
旅するペンギン座
どこか、よその星に引っ越すことができないのなら
せめて茶色の小包に分けて
海を渡る船に乗り込もう

今夜死んでゆく人たち
今夜死んでゆくどうぶつたち
さようなら、でもでも、
お化けサボテンに
追いかけられる夢を見て
うなされることもないからいいね

○年代不詳

『人→消える』

ひと人間が消える
ひと人間が消える
歴史の家から
ある日突然にゆっくりと
まわりの風景の中へ
溶け出して行くのが　わかる
だけど　一寸待ってくれ
消えてゆくのはひと人間だけじゃない
風景もゆっくりと
人間の中へ溶け出した

ああそうだ
やっと僕たちは帰れるんだ
もう誰の目にも　あきらかだ

ああそうだね

僕たちは等しく、存在しているんだ

○年代不詳

『無題』

精神が雲にかくれた夜
僕は紫の夢を織ろう
月影が路上のねこを照らし
昔の歌がよみがえる
柱時計が凍りつく
本棚は、いつも永遠だ
時間は、何処へすべりだす？
ゆらいでいるのは、世界か？　僕か？
知っているのは…

○年代不詳

『フラクタル　ラブ』

抽象的な貴方は、変化自在の海岸線の様
観念的なワタシを対幻想のから閉じこめる
情念がうらがえってしまいそうなクラインの壺の底で
貴方と交差するミンコフスキー空間を夢見るのよ
さあ座標軸をあわせて　メビウスのオビ

言葉はリゾーム　愛はパロール　フラクタルラブ！
言説はリゾーム　愛はパロール　フラクタルラブ！

愛の言葉はパロールで

カンセイフリーウェイブ

今日は街じゅうが　敬老の日だ。

○年代不詳

『無題』

だんだん腐っていく自分がわかり過ぎるくらいにわかる

彼方に一人の少年がいた
太陽の光を知らない。
とじこめられている両親は一方的に彼に光を見せないように
夜明け近くになると決まってますます薬をあたえた。
陽が沈むと覚○剤をうった。
彼は十七年間、夜の闇だけを見続けた。

○年代不詳

『無題』

まもなく引越しがなされ、このノートも終わりがもうすぐだ。
夢は崩れ言葉は消えてゆくだろう。ぼくの肉体も、心も。
まあね、だからどうというわけもない、ほんのひとつのできごとだ。
河と公園のそばに静かな良いアパートを借りたよ。
ＬＰエンジェル１０１　沼袋＊—＊—＊
この広い茶店の対角線に昔のクラスメートが昔とおんなじカップルですわって話をしている。
僕に気がつかないのかいっしょうけんめい話しあっている。
それほど親しかったわけでもない。語ることもないだろう。
人々と遠いところにいるぼくたち（ぼくの複数）を
ああ、夢はいつか崩れるんだろうね、あの＊山の様にね。
だけど僕はさびしくなんかない。だって夢なんだもの。

消えてしまうほどに哀しい夢を持っているかい？
君のイマジネーションは少年を忘れたか？

自我の世界最強ってやつは何をみてもうごかない（かんどー）んだからね
むかしのひとは感受性が強くて感じやすかったに違いない
だから人の想いで死んじゃったりしたんだろうね。

僕の皮膚の無数の毛穴に気でできた無数のぺ○ス、
君の皮膚の無数のヴァ○ナに無数の挿入！
ぼくがふれるたび
夢の＊＊やすい、夢が発狂しやすい
夢は風船のようだ。大きくしすぎると壊れて消える。
電車の中でなにげないひとのなにげない笑顔が
うごいてしまう。
かなしくてうれしくて。かなしくてうれしくて。

○24歳～

日記

8月8日［金］

ワープロを買ってはみたものの、打つべき文章の無いことに我ながら呆れている。
自分　はこれほど、語るべき言葉もない人間だったのだろうか？
考えてみると世界に対しても、自分に対しても、これといって特に、言いたいことが見つからない。
一体いつから俺はこんなにも満足しきってしまったのだろう？　確かなことは、こんなことでは
どうしようもないと言うことだ。
何をたかだか二十四、五で悟ったようなふりをする必要があるのか。
冗談じゃない、俺は「悟る」という事の何たるかさえ知っちゃあいないだろう。
ガキはガキらしくバカをやるのが本当だろう。
とりあえず感情の制御回路を。
f　fにして己の欲望を　最大限に増複させることだ。
この体に刻まれた道徳というややこしい情報をすべて叩き出　してから。

○年代不詳

『破滅派宣言』

――、我々は、虹の彼方にある　くそったれの世界を爆滅することを、公然と宣言する。

これは、言わずと知れたユートピアのことである。

く我々は、バカでも○ャクショーでも理解できるマニフェストを作るよう心掛けているので、

勿体ぶった言い回しと難解な漢字は、極力避けてやるから有難く思え！〉

我々は、ユートピアの思想自体を面白く思っていない。

ユートピアは、モトがムリなのだ。

本来、幸福とは、他者の不幸の上に成立するものであるが、そこに住む人々のすべてが幸福になるなどということになったら、我々は、どうやって自分の幸せを確認する．のだろう。

答えは、ノーだ。すべての人民が、等しく幸福に成るなどということは有りえないことなのた。

そんな夢の強制は許せない。
あばよ　さっさと死んでくれ！

４０代～

いきなり黒田チ●ポ丸だし三日間自転車こぎ続けてまずはハメ●メ話はあと申してます、マ●コしゃぶりだの便秘だのイ●ポだのの真似をしてちんぴょろすぽーん、●液ケツの穴のぬめり立派な家付き黒チャンこと黒田一太郎の野望の帝国ロシア革命以前の農奴はいやぁうちの若い猛者がきたないのはイヤだって言うんです綺麗になったらやってもいいっていうんですけど僕は汚いからカッコいいと思うんだったらウ●コのしみのついた雑誌つくってセ●ズリの写真「ぼくは汚らしいケダモノです」黒田目標三億円だ！オレの言う前に先に話すんじゃない、吉村お茶いれて薔薇されたことあるオードリー？粘液のすえたセピア色の尻の山をかき分け塗り込むイエージのペイ中黒田の死んだち●ちんが騒ぎ横切る輝く虚空、コーが前進して緑にねじりながら入ってくる肛●肉のなかへ茶色のひざに草のしみち●ぽこは何度も何度も噴出からだはよじれて二〇〇〇冊もどうするんだ黒田、俺は嫌だぞそんなのうちは芸術を育てる会社だからって社員を育てないと吉村猫まんま臭い魚の匂いと納豆のすえた茶色のしみ白飯にかかる魚の缶詰が目の中ではじけるヤン●ーハイホ

４０代〜

議論は止めよう！
アヌ[redacted]を舐めよう！
尻穴でイケる人間になればこの世は天国

差別は止めよう！
偏見を捨てよう！
ア[redacted]ルセッ[redacted]スで僕らはハッピー！

老若男女の区別なく
みんなで[redacted]ナルの快感を覚えよう！
カマを掘られる切なさと悦びを
未来永劫、子孫に伝えよう！

ああ、ア[redacted]ルよ　アナ[redacted]よ
掘られてはじめて知る悦びよ、
「アア、ナルほどな」と誰もが納得。

シ[redacted]ブをやめよう！
ジャンキーをやめよう！
健全な[redacted]ナルセックスで立ち直ろう！

反省は無意味だ！
ディベートは時間の無駄！
女子高生について考えるヒマがあったら
[redacted]ナルの快感を開発しよう！

[redacted]ナルセ[redacted]ク[redacted]でみんな仲良し！
ア[redacted]ルセッ[redacted]スで旦那の浮気防止！
アナ[redacted]セ[redacted]クスで戦争を止めよう！
[redacted]ナル[redacted]ックスで環境破壊阻止！
ア[redacted]ルセック[redacted]で民主主義万歳！
アナ[redacted]セッ[redacted]スで人権人権人権人権人権尊守！
[redacted]ナルセ[redacted]クスで人種差別撤廃！
ア[redacted]ル[redacted]ックスで世界平和実現！
アナ[redacted]セック[redacted]で宇宙平和も実現！
とにかくお前らはつべこべ言わずに今すぐ尻を鍛えろ！

○年代不詳

『無題』

秋でもないのに
センチメンタル
ロマンス・グレー

今から還ったら
海はやさしくむかえてくれるかな？
今から還ったら
海はぼくをつつんでくれるかな？
今から還ったら
海はおこってくれるかな？

ごめんね僕は
ぜんぶ飲んじゃったんだ
中身を失った薬ビンが

さびしそうに砂の上にころがっている
ごめんよ君には
この白い砂をいっぱいつめてあげるよ

さあ海（おかあさん）よ
今から還るよ
さあ海（おとうさん）よ
今から還るよ
波よ　やさしく
彼方へ送ってくれ

僕はただ
向こうへ行きたいだけなんだ!!
この海の青さが消えないうちに
僕は君の中へ還りたい。

この海の青さが失われる前に

第2章　村崎百郎寄稿文セレクト集

第2章



村崎百郎寄稿文セレクト集

今こそ「鬼畜」になれ！
アングラ／サブカルが必要なわけ
村崎百郎

なぜ「アングラ／サブカル」なのか？　あるいは、「腑抜けたブタ」どもへ！
アングラ／サブカル的な文化に対する欲望を持つかどうかというのは個人の問題であって、世代や年代の問題ではないと思う。求めるか求めないか。そこでハッキリと分かれてしまう。求めない人間は、基本的に全てに対して批判精神が脆弱な人間であって、普通にマスメディアから受け取る娯楽や文化で充分に満足してしまっている。下らないお笑いタレントのバラエティを見て満足なわけでしょ？　まあ、昔はとんねるずからこっちの世界に入ってきたという人たちがいてびっくりしたこともあるけど（笑）。
要するに現状に満足できない人間がアングラ／サブカルを求めるんだよね。アングラ指向そのものが「自分をとりまく日常や現実に対する異議申し立て」なんだから、必然的にそういう人間は反体制的・反社会的な反骨性質を持つことになる。60～70年代のアングラ・カルチャーを見ればわかるけどね。
ところが今はみんな飼い慣らされちゃってるよね。結局、反抗しなくてもアングラ／サブカル的なものに触れることが出来る世界になってしまったということなんでしょ？　とにかく、まともな知識欲と好奇心を持っている人間なら、絶対に現状で満足するわけがないんだよ。逆に言うと、アングラ／サブカルが衰退した（境界線があやふやでメジャーと

サブカルの区別がつかなくなった現状も含む）ということは、現状に満足して何もしない腑抜けたブタが増えたという、体制にとって実に都合の良い状態になったということだよね。

「アングラ／サブカル」は消滅したのか？　あるいは、きっかけとしての「サブカル雑誌」

きっかけはなんでもいいんだよ。中世ドイツの神秘家ヤコブ・ベーメは、25歳の時に錫器に反射する光を見てはじめて世界の神秘に気づいて、以後昼は靴職人をしながら夜はカバラの秘儀を学び、大宇宙の神秘に近づいたんだから。でもかつては、「アングラ雑誌」や「サブカル雑誌」がそういうきっかけやとば口になっていたんだよね。雑誌を読むということが、単なる暇つぶしではすまされないという時があるんだよね。『血と薔薇』『牧神』『月下の一群』『パイディア』『幻想と怪奇』『迷宮』『思潮』『レヴ』『幻想文学』などの幻想文学関係はもちろん70～80年代の『遊』の存在と影響力は大きかったし（80年代ニューアカブームのインフラを築いた）、70後半～80年代の『夜想』もそうだし（現在復刊中）、『メディテーション』『現代詩手帖』『ユリイカ』『現代思想』『イマーゴ』などあげれば沢山ある。『季刊NW―SF』『パピエ・コレ』とか武邑先生の『デコード』ってのもあったね。いまだにグレードアップしてがんばってんのが『トーキングヘッズ』とか……。きっかけはいつの時代も、ちょっと探せばどこにでも転がってた

んだよ。それに気づいて追及するかどうかは各人次第だったわけで。今は、出版点数そのものは増えてるはずなのに、そうしたアングラ／サブカル雑誌がほどんどないことも一つの特徴だね。

そうすると、ネット社会の到来とともにサブカルもアングラもなくなったという話になるわけでしょう？　別になくなったわけではなく、膨大な情報の洪水の中に埋没したというだけで、目覚めて求める人間の数や割合はそれほど昔と変わらないのが現状じゃないかな。だから、いろんな意味で過渡期なんだろうね。せっかく誰もが手軽にネットを利用できる時代になったのに、人間そのものが進化する傾向はまだ見られない。膨大な情報群の前でとまどっていて、どうしていいのか分からずにいるサルのごとき人類の姿がイメージとして浮かぶだけ（笑）。雑誌とか本とかが一冊も無くても、一生部屋の中に籠もって過ごせるだけの情報がネットに転がってるのにもかかわらず、そこから目を瞠るような新しいものが出てきているわけではない。みんな情報にひっついているだけで精一杯なんだよね。

ネットと「言語ウイルス」あるいは、「引きこもり」はキッチリ引きこもれ！

時代が平和でヌルくなっているだけに、孤立感や漠然とした存在の不安みたいなもんだけは大きく膨れ上がっていって、わけのわからない不安につつまれる。自分はこれでいいのか？　みんなは……どうなんだろう？　とか。そこで、2ちゃんねるのようなメディア

に群がる人間が増えるわけ。アレは自分に自信のない、漠然とした不安をかかえた人間には、何かを確かめたような気になって安心できる便利なもので、人生に何の目的も目標も持たない暇な人間が時間をつぶすには格好のメディアなわけだから。

だから、2ちゃんに代表されるものこそ、バロウズの言ってた「言語ウイルス」が悪意をもって活発な活動を展開する拠点だと思うんだよね。「言語ウイルス」はひたすら言語を消費させせればいいんだから。そこにはただ消耗しかない。だからオレはあまり入れ込めないいんだよね。単に生存時間を削られているだけ、って感じがするでしょ？　バカが使ったらネットに使われているだけになるんだよ。ネットはニュースや調べモノをする時だけに有効な「道具」であって、自分に関して言えば、いまでもネットを利用してる時間は読書時間よりも短いね。ネット・サーフィンってのもそもそも「電脳ゴミ漁り」なんだけど、現実のゴミ漁りが好きなオレにはやっぱバーチャルなゴミ漁りは物足りなくて（笑）。現実に夜中に外を徘徊してゴミ漁る方が好きです。

昔に比べれば、知識の採取はネットのおかげで格段に時間短縮できるようになったんだから、今の若いヤツらは昔の若者よりもスマートで、昔の若者以上のことができて当然って気がするんだけど、現状見ててもそこまで上手くやってるヤツらってのはあんまり見えてこないね。これからなんだろうと期待してんだけどまだみたいで残念だよ。だいたい、今言われている引きこもりだって、引きこもりでもなんでもないだろ。引きこもるんなら完全に情報を遮断して孤立した状態でひたすら考え続けたら、それはそれで成熟につなが

るんだと思うけど、中途半端にネットに繋がっているから社会に繋がっているような錯覚を起こすんだよ。それでは何も生まれない。

「鬼畜系」は如何にして生まれたか？　あるいは、「激動」の90年代

90年代と00年代に入ってからの文化の区別があんまりつかないでしょ？　世紀末的なものが一掃されたかというとそういうこともないし。ただ、どんどん多くの若い人が育ってきているのは事実。累積してきた過去のアングラ／サブカル物件も増えてきて、それをどんな順番で体験するかで見方も評価も完全に変わってくるだろうね。たとえばファミレスのBGMで流れてきたツェッペリンを聞いた女子高生が「なによこれ！　B'zの丸パクリじゃないのよ！」と憤るような事態がそこかしこで見られるようになるわけです。「最低な連中がいるな！」って（笑）。でもそれはしょうがない。そういう子たちにとっては、先に聴いた方がオリジナルなんだから。時間軸自体がぐちゃぐちゃになってるんだよね。60年代のアングラもアングラに見えなかったりして。情報量が多すぎると、無いのと同じ状態になるんだよね。

そもそも人間は年を経るに従って精神の状態も変化するわけで、そうすると世界の捉え方そのものが変わって行くから、年齢毎の真理があるはずなんだよ。だからオレ自身は、年代で区切って考えることがないし、文化運動は年代で区切るんじゃなくて個人の意識の問題として区切られるべきだと思う。でも振り返ってみれば昭和が終わったのは89年だけ

ど、それをみんながちゃんと実感したのは90年代に入ってからでしょ？　バブル崩壊と95年のオウム事件と阪神大震災という大きな「激動」も一応みんなが経験したわけで、それがアングラにも反映されて10年は食えたって感じだよね（笑）。

当時、ペヨトル工房をやめて、フラフラしてたとこに青山正明から「新雑誌をやるんで」と声をかけられて、彼らが「ごきげん＆ハッピー系」を念頭に置いて作っていたさわやかな麻薬雑誌に、ゲスで下品で暗黒文化を無理矢理ねじこんで、気づくと、読むとイヤな気持ちになる雑誌にしてた（笑）。しまいにゃ「鬼畜系」ってキャッチ・コピーまでつけて出させたのが『危ない1号』。あの頃は記名じゃない記事も書きまくってて、2号目なんて鬼畜記事の三分の一くらいはオレが書いてた。あと、酒鬼薔薇事件というのもあったけど、酒鬼薔薇は『危ない1号』の創刊号を読んでるんだよ。オレの犬肉喰いの記事も読んでるね。酒鬼薔薇が出した年賀状のイラストっていうのが、『危ない1号』の裏表紙に使われたLSDの紙パケのイラストの模写だったから。

賛否両論あったけど『危ない1号』は一応受けて、雑誌も売れて抗議も殺到。おかげで「鬼畜系編集者」の烙印を押された青山が鬱になって、この件も彼の自殺を早めた大きな要因だって、青山の周辺からはずいぶん恨まれました。謝って許されることじゃないから謝らないけどね。今でも悪かったとは思ってるよ。青山の名誉のためにも言っとくけど、青山は鬼畜とは対極にある本当に優しくて親切な良い人でした。彼の雑誌を「鬼畜系」にねじまげてしまったのは全てオレのせいです。他の連中に罪はありません。

考えてみると、80年代前半、藤原新也の『東京漂流』とか『メメント・モリ』が出た頃に死体ブームが起こったんだよね。都市があまりにキレイになってしまい死＝死体が見えなくなったという事に対するアンチみたいなものだったんだけど、その後に屍体写真集『SCENE』や『夜想』の屍体特集が同時発生的に出た。『危ない1号』はそういう系譜を継ぐ存在だったんだろうね。

「鬼畜」とは何か？　あるいは、「より良い世界」のために！

白状すると、80年代の広告ブームの時にコピーライターになろうと宣伝会議の講座を受講してて（笑）、そこでいろんなコピーつくりながら自分が過激なキャッチ・コピーを作るのだけは得意だって自覚してたんですよ。だから暗黒文化を総称するような言葉で「鬼畜系」ってのはすぐにできた。ここまで流通するとは思ってなかったけど、作った手前と責任上、死ぬまで「鬼畜ライター」は名乗り続けますよ。「鬼畜ライター」なんてオレひとりだったしね（笑）。

だいたい、オレの定義する「鬼畜」っていうのは、人でなし的な行為っていう意味だけではなく、より本質的なところで言えば、「他人に一切配慮せず自分の好きなことを貫く」っていう意味なんだよ。それが「鬼畜」の完成型だと思うし、それが社会的に見て良いことか悪いことかなんていうのはオレの知ったこっちゃねえよ、っていう。人間は二タイプしかいなくて、次の世代にいろんなものを手渡ししてゆくために存在している人間

と、そこからいきなりジャンプして強烈な発明なりコトを起こす人間とに明確に分かれてる。一歩先に進めるヤツらというのは、どう考えても周りの迷惑なんか考えず好きなことやったヤツらばかりだよ。そういう意味でも死ぬまで鬼畜でありたいと思うんだよね。だから、オレの言う「反・鬼畜」っていうのは、まわりに気を使ってまわりと同じ様なことをするヤツら。たとえば、巨大掲示板でみんなが悪口を言っている中で、一緒になって悪口を言うのは鬼畜じゃなかったりするんだよね。とにかく心がけているのが「他人の為には生きたくない」っていうこと。限られた生存時間なんだからさ。本当にみんながいちばんやりたいことをストレートに目指したら、今よりずっとましな世界が来るんじゃないかなって思うね。「やりたいこと」ってのが殺しでもなんでもいいんだけどさ。

だから今でも、というより今だからこそ、「鬼畜」であることが必要なんだよ。まわりの人間に律儀につきあったりせず、自分の好きなことだけを追求しろって言いたいね。これだけ情報にアクセスしやすくなったんだしさ。

「STUDIO　VOICE　（スタジオ・ボイス）」　2006年　INFASパブリケーションズ発行

ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア　アンケート

「俺は黙って発情してやる！」　村崎百郎

「愛はさだめ、さだめは死」
「ヒューストン、ヒューストン、聞こえるか？」
「そして目覚めると、わたしはこの肌寒い丘にいた」

はっきり言って、ティプトリーの書く小説は、読解力の乏しい中卒の俺には読むのが困難な部類の〝ムツカシイ〟小説にあたるのだが、そこは持ち前の〝電波系〟体質を利用して、半分は書かれている文字ではなく、読んでいるときにアタマが勝手に受信する〝電波〟でカバーして読んでいる。だから、俺が本来の意味でティプトリーの小説を読んでいるのかどうかは怪しいものだが、それでもいくつかの短篇は妙に心にひっかかって、たまに気が向くと読み返してあれこれ考え込んだりして暇が潰れることが良くあるので迷惑だ。

いい加減で出鱈目な読み方をしながら俺が思い浮かべるティプトリーは、「たとえ足をすべらせて泥沼にはまっても、泥沼にはまった人間にはそれなりの快感があるものだ」という事を、言葉ではなく、身体で理解している人間のような気がしてならない。

それは、おそらくティプトリーが心理学者であったことに起因するだろう。なぜなら、自分の行動が自分の意志以外の〝別なもの〟の影響下にあることを自覚できるのは、電波

れを「神」だの「霊」だのに求めるのに対して、科学者の連中は科学的思考から、我々人類が遺伝子に刻まれた情報につき動かされてメシを喰ったり、睡眠したり、糞をしたり、発情して生殖したりする、とびきり複雑な生体機械であると認識していることぐらいのものである。発想の過程は違っても、そうした認識のもとでは科学者もキ〇ガイも、最終的には「人間の自由意志」など無きに等しい妄想であると結論づけ、そこに淋しさを覚えても何ら不思議はないだろう。

「宿命」だとか「運命」などといえば幾分ロマンティックに聞こえるが、ティプトリーの小説を読んでいると、俺はいつも物語の背後にちらちらと、遺伝子情報に左右され、破滅したり、感情を昂ぶらせたり、幸福な気分になったりする生命体の悲哀や、遺伝子のコードに則って行動することで、生命体がまるで〝ご褒美〟でも貰うように〝快感〟を感じて喜ぶ情けない姿が、イヤというほどクリアに見えてきて複雑な気分になってしまう。

それは、俺などがいくら考えてもどうなる事でもない。せめてもの救いは、その泥沼も沼なりに、はまり込めばはまり込んだだけの快感があるということぐらいだ。生命体が必要以上に考えたり感じすぎたりすることは己の〝不幸〟な状況を過度に認識するだけなのだろう。所詮、俺達人類は本能には抗えず、〝人類〟という泥沼から抜け出すことは出来ない屑なのだから、黙ってこの泥沼の中で一所懸命に人類をやるしかないのである。だから「俺の性欲の正体が何で、それが何処に行くかなんて知っちゃいない。ただ、もう、目

の前のお○んこにぶち込むだけさ」というのが俺の低能下品な基本姿勢だ（哀れだネエ）。

俺の大嫌いな〝人間〟が一人も登場しない「愛はさだめ、さだめは死」は、そうした〝さだめ〟に生き、〝さだめ〟に死んで行く、一個の生命体の悲しくも幸福な物語だ。人間以外の多くの生命体の悲哀にまで優しい視線を向けるティプトリーには、人でなしの鬼畜として大きな不快感を感じる。遺伝子情報に左右されることが悲劇なのではなく、生命であることこそ悲劇の根源なのだろう。何でもいい、俺はさらに深く発情し、腐るだけだ。

「SFマガジン　1997年12月号　ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア特集」1997年　早川書房発行

「アルトー」という電波　村崎百郎（電波系鬼畜工員）

書き記そう。遠い昔に一度だけ彼を幻視したことがある。

漆黒の闇に包まれた夜だった

何処とも知れぬ場所で我々は静かにアルトーの到着を待っていた
もうすぐ町はずれの広場に
黒衣に身を包んだアントナン・アルトーが来るという
奴はマイナスのキリスト
その手に触れる全ての健康な者を
不具者と不治の病を持つ病人に変えるおぞましい奇跡を見せ
数えきれないほど多くの不具者や病人を率いて
耐えがたい腐臭を放つ汚穢と糞尿を大量に撒き散らしながら
ゆっくりとその身で空間を切り裂くように踊りながらやって来るのだ

——かすかな胸騒ぎと闇の奥から聞こえる群衆の遠いざわめき——

ああ、そして僕らも
彼に触られて不具者になってしまうのかと
暗闇の向こうをぼんやりと見つめ
己の運命を静かに諦めていた

こうして、我らはアルトーの手によって永遠の不具性と醜悪さを獲得し

の一部であることを辞めてやる／俺はいままで一度だってこの世に生きたことはなかった／俺の存在は捏造された記憶の断片／俺はいまからもう一度俺になり、俺の失われた全体性をとりもどすべく闘おう／そもそも我々は、あの糞ったれの神どもが定めた形態を維持する必要など全く無かったのだ／人間であることも／男であることも／女であることも／そして存在であることも／非存在であることも

……アルトーの詩や文章を読むたびに、体内で振動する無数の細胞たちの、こんな寝言が聞こえてくるようだ。そんな妄想に取り憑かれるからこそ、アントナン・アルトーの作品（全て電波文書）は俺にとって尊いのだ。アルトーを読んでゆらぐ程度の自我であるなら「いっそのこと綺麗さっぱり吹き飛ばしてもう一度最初から作り直せ」と、奴ならば言うだろうか。たぶん、アルトーを読むことは、体細胞レベルからこのあやふやな現実（リアル）を問い直す行為でもあることだろう。

そして、奇妙な声や音が絶えず頭の中に流入してくる電波系のキ○ガイである俺にとっての「アントナン・アルトー」とは、「身を裂くような激しい苦痛の中で思考し、己の存在を強烈に実感すること」なのだ。それは不完全な自分を生み出したこの世界に対して激しい呪詛と憎悪を持たざるを得ない作業でもある。

生涯を幼少期に罹った病気の後遺症で苦しんだアルトーにとっての「恒常的な激しい苦

もつれからこれまでに合計三回女に刺されているが、いつも痛みの中にアルトーを感じ、血を噴いた傷口の向こうにアルトーが微笑するのを見ている（俺はそんなアルトーが読みたくて、もともと好きでもない人間の女を相手に、その存在を信じてもいない「愛情」なんていう狂言を何度も演じようという愚行をくり返しているのだ。どこまで狂えるか？——それが俺の恋愛［ペテン］のテーマでもある）。

更に根性があるなら、走る車の前に身を投げ出したり、駅のホームに入ってくる電車に飛び込んでみるがいい。大怪我をして血を流し意識が遠のいていく中で、あなたはアルトーを全身で感じることだろう。命懸けで読むアルトー——別に確かめたことはないが苦痛が大きい程、感じられるアルトーも大きいものとなるに違いない。

いずれにしても、死の時はあなたにも確実にやって来る。
その死が瞬間的に訪れるものではなく、
大いなる苦痛の中で意識が遠のいてく種類のものであれば、
そのときはアントナン・アルトーを想い出して欲しい。
そのときこそあなたの意識はアルトーと重なり、
アルトーとして語り始めるだろう。
あなたが誰で／どこへゆくのか／あなたはそれを言わねばならぬ……

身を裂かれんばかりの激しい苦痛の中で明晰な思考を欲するのだ
不具と引きかえに得られる思考、
大いなる苦痛や不自由と引きかえでなければ獲得できない思考！
誰がそんなものを積極的に欲しがるだろう？

あいつが何で／どこから来たか／俺はそれを／語らねばならぬ／あいつの名前は／アントナン・アルトー／時間の始まりからこの世に偏在する／最も凶々しい電波／永遠に神を呪詛する者／もう一つのアルファにしてオメガ／カインにしてアベル／闇の深奥に住まう者／腐臭漂う汚穢の肥溜／醜さと美しさを同時に合わせ持った最も凶暴な魂／焼けつくような生の実感／燃えるような憎悪／ああ、もう、何とでも言ってくれ！

あいつのコトバはその全てが精神の自立と暴走を促すトリガーだ。あいつの呪わしい詩の一節をつぶやくだけで、我々は我々の身体を構成する細胞の全てがおのおの勝手に意志を持ち、いっせいに造反して離散していく気さえする。

我々がいまここでこのまま一つ全体にとどまる理由はない／我々が一人の人間でいる必要はない／我々が組織であり続ける必然も根拠もない／したがってこの人間という一つの全体の中で己を殺し、埋没する義務も一切ない／俺はいまこの瞬間から俺という人間の中

輩のたわ言などが、頭の中へ入れ替わり立ち替わり洪水の様に押し寄せている状態だ。幼い頃はそれに幻視も加わって、毎日がにぎやかなお祭りの様だった。

かといって、それはお祭りほど楽しいものではなく、三十四歳になった今でも、少し疲れて体調が悪い時に、感情操作系の悪質な電波を強力に受信したりすると、夜中にアパートの部屋でのたうち回って大声で「うるせえ！　黙れ！」「やかましい！」「殺してやる！」などとわめき散らして付近の住民に多少の迷惑と恐怖を与えている。年間を通して電波の強かった昨年（95年）は近隣住民からの抗議もずいぶんあったらしく、大家から二度も「最終警告書」を受けていて、今度やったら警察を呼ぶそうだ。やれやれ。

やって来る電波の中でも、とりわけタチが悪くて大嫌いなのが宗教系だ。自称「神」だとか「使徒」だとかいう声が、押しつけがましく「あなたは選ばれました、私の言葉を多くの人に伝えねばなりません」などと頼みもしないのに延々と宇宙の創生から人類の使命、世界の成り立ちを語りはじめ、妙ちきりんな宇宙のイメージを送ってくる。これがたった一つなら「そうか、俺は選ばれたのか」などと信じたかもしれないが、こういうのが酷い時には一日に十件も二十件もやって来る。しかも、そのどれもが違う事を言って、自分だけが正しいことを偉そうに主張するのだ。「てめえら、いい加減にしろ！」と絶叫したくなるのもお分かり頂けるだろう。

俺は、神も仏も悪魔も霊体も全て信じない。ただ電波をウルセエと思っているだけだ。

そして、**間違いなく俺はキ〇ガイである。**ただ、そのことについては幼少時からしっか

痛」は、結果的に彼に「常に自己の存在を圧倒的に自覚させる」という役割を果たしたことだろう。俺の感じる苦痛はとてもアルトー程ではないが、たまに電波が途絶えるときに訪れる「何も感じないことの幸せ」や「ぼんやりできることの幸福」は貴重なものだ。だからこそ、常に感じる「焼けつくような生の実感」が個体に与えうる恐怖と不安、精神的な苦痛は想像するに余りあるのだ。アルトーの苦痛には肉体的なものに加えて、「肉体的苦痛による圧倒的な現実感と存在感の強制受容」という精神的な苦痛があったことを忘れてはならない。

だから提案しよう。アルトーを読みたければ、何もガリマールの全集や白水社の翻訳選集を買わずとも良い。何故ならアルトーはこの世界のどこにでも存在しているし、我々はその気になりさえすれば、世界のどこからでもアルトーを〝身体的に〟読むことが可能だからだ。そして、その方法は少々気○いじみてはいるが、「気○いの文章を理解したければ、てっとり早いのは気○いになること」だろうからいたしかたない。ひとは誰も、そう簡単にアルトー程は狂えないのだ。

その方法とは次のようなものである（注：マジで実行しないで下さい）。もしもあなたがアルトーを読みたければ、たとえば手近なところにある壁に気絶するほど激しく頭を打ちつけてみるがいい。運が良ければ遠のく意識の中で己の生と存在を実感しながらアルトーを感じることができるだろう。または誰かに思いきりブン殴ってもらってもいい。流れる血が気にならないなら刃物で自分の身体に切り刻んでみるがいい。鬼畜な俺は痴情の

が、そもそも麻薬常用患者は社会の事など考えてはいないのだ」などという類の発言を繰り返し、世間に悪態をつきまくっていた。しかし、本当のところ、それは逆だったろう。アルトーが求めた心の平安は、彼がこれ以上、この世界を憎まないための手段でもあったはずだ。

人間なんて情けないもので、他者に対して思いやりの心を持ったり行動したり出来るのは、大抵の場合、心身共に余裕がある時に限られる。例えば、あんたらは思い荷物を両手に持って運んでいるときや、風邪をひいて40度近い熱で苦しんでいるときに他人の手助けをしようなどと思考できるだろうか？

誰かがその昔、発言してひんしゅくを買った**「障〇者や病人の考える事は不健康だから嫌いだ」**という鬼畜格言は、正常な人間が聞けば粉砕モンの台詞かもしれないが、自分の症状を考えれば「確かにおめーの言う通りだよ」と納得できる部分もあった。俺は、まだ電波に対してあまり抵抗力を持っていなかった小学生の頃、強い電波で頭が割れるように痛み、一人で山奥や砂浜でのたうち回りながら苦しみ、全世界を呪っていた。平和そうに暮らしている奴ら、楽しそうな奴らがとにかく憎くてたまらなかった。「何でこの俺だけがこんなに苦しい思いを！」などと、水源地に農薬ブチ込んで家に火ィ付けて、村ぐるみ潰したろかと幾度考えた事だろう。その憎悪を思いとどまらせたのは、ひとえに「この苦しみは、とてもこのビンボー村一つと引き替えでは割が合わない。大きくなるまで生きて生きて生き抜いて、都会へ出ていつか日本全土へ憎悪と苦痛と恐怖をばらまいてやる！」

「ユリイカ　１９９６年12月号　アントナン・アルトー　生誕百年記念」　１９９６年
青土社発行

電波とアルトーそしてドラッグ
——あらかじめ壊れた人間たちにとっての麻薬

村崎百郎

電波の強い日は苦しい。いくら俺が生まれつきの「電波系」といっても、これぱかりはなかなか克服できない。いちいち説明するのも面倒だし、人からキ○ガイ扱いされるのも嫌だったので、これまで電波を受信していることは極力まわりの人間に気づかれないように努めてきた。しかし、それでもときどき電波の呼びかけに、つい声を出して答えてしまうことがある。これは一人で居るときならいいのだが、まわりに人がいるといろいろと都合が悪いものだ。突然何の脈絡もなく意味不明の言葉を語る人間なんて、やっぱり他人から見れば不気味だし、そんな奴とはできれば関わりたくないんだろう。皆さんのご想像通り、俺は友達が少ない（凶暴なせいもあるけど）。

平静を装っている俺の頭の中ではこれまでにも幾度となく根本さんの言うところの「妄想幻魔大戦」が繰り返されてきた。それでなくとも目が覚めていて意識のある時には、ほぼ四六時中、意味不明の音やら声やら陰謀の告発、神話的イメージ、神や悪魔を自称する

である。
かくいう俺も、幻覚剤をもって幻聴や幻覚を相殺する事が出来るんじゃないかと、今から15年以上前の話だが、そんな思いに取り付かれて色々試みた事があった。残念ながら電波は少々のドラッグぐらいではどうにもならなかった。効いたといえば、**聞こえてくる電波の声が少し大きくなった程度だ。**それ以後俺は、自分自身の闘い——対電波について、ドラッグには何の期待もしていない。やりすごしたり、死んだふりをしたり、本当に危ないと思った時は自分で手足を縛ったりすることさえある。ドラッグだろうが宗教だろうが、それで魂が救われる奴は幸せだ。押し寄せる破壊衝動や暴力衝動、殺人衝動をやりすごしながら今日も俺はいいかげんに生きている。
こういう状態なので、俺はあえてドラッグを使って幻覚を見たいなどと思った事はないし、同様にジャンキーたちについても特別思う事はない。対岸で釣をしている赤の他人を眺めているような気分である。実際、そんなものは散歩の途中で出会う、数多くの風景の一つに過ぎないのだ。
そして、何も麻薬でなくとも「人の心を蝕む麻薬」という点で考えてみれば、酒やタバコ以外にも罪深いものはいくらでもある。すなわち、競馬をはじめとする公営ギャンブル、パチンコ、パチスロ、洪水の様に出版されるマンガ雑誌、新聞、たれ流しのTV番組（特にワイドショー）、ファミコンやパソコンのゲーム、カラオケ、サラ金、クレジットカード、AVビデオ、ソープやヘルス、イメクラなどの各種風俗店、各種宗教……人を夢

りと自覚していたので、今では自分がキ○ガイであることに恐怖や不安は感じてはいない。これからも日々やってくる電波を受け流し、やり過ごし、極力無視して生きていくだろう。

そんなわけで、比べるのは非常に恐れ多いが、アントナン・アルトーと俺の唯一の共通点は、「どちらも壊れたままこの世界に生まれてきた」ことである。

俺は、『ユリイカ』の特集を読み（七四年八月号）アルトーが幼少期に患った骨髄膜炎の後遺症で生涯頭痛に苦しんでいた事を知り、親近感を覚えたものだ。もっとも、痛みを和らげる麻薬の常用なしには、激しい頭痛で正常な思考さえ困難だったというアルトーの苦しみに比べれば、俺の電波受信などは砂糖菓子みたいに甘いものだ。

アルトーは並の麻薬常用者たちとは違って、快楽を求めたり、幻想や幻覚が見たくて麻薬を常用していたのではなかった。無限にうち続く肉体の苦痛から解放されたくて、ただ精神の平穏で平和な状態を欲して麻薬をやっていた。自堕落な快楽を貪っていたのではない。せめて人並みに、正常に思考できる状態が欲しかっただけなのだ。

俺は、麻薬撲滅キャンペーンの「覚醒剤やめますか、それとも人間やめますか」のポスターを見る度に、いつもアルトーを思い出しては「むしろ、人間になるために麻薬を常用した奴もいたのにな」と小さく憤慨していた。

アルトーは、しばしば麻薬取締り問題について「麻薬は社会にとって害があるという

少しでも霊力のあるセ○クス依存症性欲キ○ガイどもは、この秋、天国から届いた極上新作電波群の中に、生前と同じ元気さと持ち前の頑固さで、今年度の霊界期待の新人、聖女マザー・テレサの霊を四つん這いにしてそのシワだらけの尻穴をオカしまくり、キリストの足元に跪く快感と貧乏人とをいじりまわすだけのネガティブな快感しか知らなかった無知な老処女（妄想）に、けつの穴をしこたま掘られる至上の悦びを懇切丁寧に指導するバロウズの雄々しい姿と屹立するペ○ス（しかし悲しいかな白人なのでフニャマ○ラ）の鮮明な映像を見て、誰もが心から拍手を贈り、ああ爺さんはあっちに行っても元気だなあと心から安心したことだろう。その横で四つん這いになって尻を高く上げて順番待ちをしているダイアナ元妃霊の下卑て爛れた上品な金ピカお○んこは少々臭すぎて俺は全くそそられなかった。

一部のおかま達がこよなく愛する肛○性○は、神どもの定めた○穴オンリーの性○から人間の意識とペ○スを解放する優れて反神的で効果のある背徳行為だと俺は勝手に妄想して（別に本気で信じちゃいないけどな）実践しているのだが、そもそも考えるに人間をアダムとエバの男女二種類に造り分けた事実から鑑みても、神どもが本気で人間など愛していなかったのは明白である。なぜなら、冷静に考えれば考える程、人間という動物の不完全さと弱さのある部分は性が男女二つの両性に分かれている所に起因するものであるし、「人は異性を愛するのが当然である」などという根拠のない妄想は単に個人の愛情を限定

という、更に大いなる憎悪と野望のおかげである。

こんなふうに長期的な肉体的苦痛（天然の拷問）は人間の心身を荒廃させる。ならば、もうこれ以上、世界を憎悪したくないからこそ、麻薬を使ってでも精神の平穏を得るという方法は認められても良いように思える。確かに、世界を憎悪し悪魔のような犯罪者になるぐらいなら、無気力なアヘン漬けの廃人になった方が社会の為というものだ。これを甘えと受け取ろうが、情ないやつだと思おうが、それは読者諸君の勝手だ。世の中には苦しみを精神力で克服できる意志の強い人間も大勢いることだろう。しかし以前、善良な事で有名な、日本最大規模の宗教団体の信者になった元知人が、俺を折伏中に言った「障○者や不治の病人？　ああ、あの人たちの事なら同情なんかしなくていいのよ。**あの人たちは前世で悪業を積んだから、あんな風に生まれて当然なの。**だからそういう施設に一時しのぎの寄付をするよりも、うちの団体に寄進したほうが、正しい教えが広まる役に立つから、結果的にみんな救われるし、ご利益があるわよ」という慈悲深い収金理論に対しては、俺は今後も誠実に暴力で応えようと思う。宗教はアヘンだとほざいた奴がいたが、この場合、宗教は明らかにアヘン以下である。俺は正義も倫理も知ったこっちゃないが、こんな事を目の前で言われて黙っているほどお人良しでもない。

話がややずれたが、要は、快楽や幻想を得るための麻薬以外に、人によっては憎悪や呪詛をうち消すための麻薬というのもあるということだ。それが良いのか悪いのかはわからないが、あらかじめ壊れた人間にはどっちに転んでもたいした救いがない事だけは、確か

自分の身体が自分の思うように動かないという不自由な感覚、我々自身が真の意味で我々自身の生（性）を生きていない事への不満、数多くの人間の懸命な努力にもかかわらずあらゆる事態がさっぱり好転することなく、世界がひたすら悪い方へ悪い方へと向かっていることへの絶望感と不安……真面目すぎる人間どもが抱えがちなこの種の悪性妄想が、ドラッグ中毒と趣味のお○ま掘りに興じていたバロウズの中で見事に結実して「言語ウィルスによる人類コントロール妄想」が生まれたのは、月面着陸と並んで人類が20世紀に果たした快挙（怪挙）の一つであることは正常な精神の持ち主以外、何ら異存はないだろう。

そもそも「自分が自分以外の何物かに操られている感覚」というのは何も現代社会のキ○ガイ特有の妄想ではなく、記録を調べると19世紀の頃の精神病患者にも多く見られるものであり、これを俺が常々主張する「神や悪魔＝電波」理論（妄想）で考えれば、〝電波〟は人類が〝意識〟を持ち、言語を持ったとほぼ同時期に人類に取り憑き、人類の歩みとともに成長し、国家や宗教や民族的な習俗として我々の生活に深く浸透しているので、我々が常に奴ら神どもの〝コントロール〟とともにあることは何ら不思議ではないのである。

ここまで書けばいくぶん明晰な連中は気がつくことだろう、「コントロールが神の摂理ならば、それに逆らわずコントロールにしたがって生きる方が、そこからもたらされる幸福や悦びは深くて大きいのでは？」と。確かに養豚場の豚は豚に徹して肥え太れば、とり

中にさせ、なおかつ常習性が高くて、それにかかわった多くの人々の人生を崩壊へ導くものなどいくらでもある。現代の**我々は、何も麻薬や幻覚剤に頼らずとも、ほんのチョットの努力でいくらでもどこまでも自堕落に堕ちて人間のクズになることができる**のである。とても国家が麻薬を取り締まった所でどうなるものでもない。

そして一九九五年十一月、現実世界へ——単調で退屈な日常へ逃げ込む為に、俺は相変らず新聞を読み、TVのワイドショーにチャンネルを合わせ、近所のコンビニの親父にくだらない愛想笑いをしながら、やってくる電波を無視して流行の雑誌やマンガを立ち読みする卑怯者だ。自分がどこまで壊れるかなんて知らない。現実がどこまであやしくなるか分からないのと同じように。

「ユリイカ　1995年12月号　特集　サイケデリア」　1995年　青土社発行

カマ掘りの快感とコントロール妄想　村崎百郎

あらゆる意味で断片的なジジイが、どうやら断片的に死んだらしい。そんなジジイに向けて語るコトバや思うことは、やっぱり必然的に断片的なものになるだろう。

以下はそういう文章だ。真面目に読むなよ馬鹿が移るから。

る！」とギャアギャア騒ぐ連中は騒ぐ前にもう一度冷静に検証してみろ。そもそもお前は誰か別のものにコントロールされるほどの価値のある人間なのか？　何か特別な富や才能や能力でも持ってるのか？「自分は神や霊と交信できる」なんてのはハナシにならねえぞ。そんなもんシャ○常用患者にだって珍しくも何ともねえんだからな。たったいま思い出したヨタ話で恐縮だが、よくある心霊現象の例で「青山墓地から幽霊を乗せたタクシー運転手の話」ってのがあるだろう。雨の夜に青山墓地のそばで若い女の客を乗せたけど、気がついたら客が消えてシートが濡れていたという都市伝説にもなりつつある逸話である。こんなヨタ話は、「都内で働くタクシー運転手におけるシ○ブの普及率の高さ」を考えれば、３日に一回あってもおかしくも何ともない現象であることを忘れてはならない。

こうした「支配」（妄想）に気づき、それから逃れるためにバロウズが選んだ「カット・アップ」は確かにある程度の有効性はあるだろう。何故なら我々人間は、言葉を覚え本を読み、言葉に沿って賢くなり、言葉に沿って馬鹿にもなっているからだ。

こうして文を書きながらも、俺は言語ウィルスの術中にはまらないように注意深く言葉を選んで論理の破綻したいいかげんなデタラメを意識的に書いている。それは言葉にこだわりすぎてマジで厳密な文章を書けば書くほど、奴ら「言語ウィルス」（妄想）を活性化させることになるし、読んでも面白くないので誰も読まなくなるからだ。そのいい例が思

するにすぎないからだ。ここから派生する多くの性欲と支配欲と所有欲がらみの種々の軋轢と悲劇の数々にはもういい加減うんざりだ！　射○の後のほんの一瞬、俺はいつも俺の身体と俺の正気（妄想）を取り戻して「ああ、こんなことではイカン！」と思いつつも、次の瞬間に再び溜まり出した精○が脳内に送る性欲電波は俺に次の射○に向けての準備と勃○を促す。このような心地の良い支配から逃れるのはそう簡単なことではない。そして、そのさい、ほんの一瞬の正気の瞬間に脳が夢みる事象のすべた、いや〝すべて〟は「ウィリアム・バロウズ的対コントロール妄想」と言っても過言ではない。

「俺達は勃○したくもないのにチンポが立ち、欲情したくもないのに女を見るとそそられる。畜生！　この身体の主人は一体誰なんだ⁉　しかも奴ら牝犬どものすかしきった面の皮の裏には、俺達男のそそり立つペニスに完膚なきまで徹底的に犯されたいというあきれた被暴行願望が満ち溢れてウズを巻いていていつでもあそこは即バメＯＫのヌレヌレ状態だ。そんなことは俺たち男どものムシのいい男根主義的妄想に決まっていると気がついているはずなのに、俺はどうして進んでそんなふうに思い込みたいんだろう？　ああ、腐った女の爛れたま○このすえきった匂いが今は何故かたまらなくいとおしい！　この俺に俺独自の俺自身の意志などほんの少しでもあるのだろうか？　ああたまらん、目の前の女を殴り倒して俺の太マ○でブチ犯したい！　ああ我々をこんなふうにコントロールしてあざ笑っている神どもが掘り合うおかまはどれだけ気持ちの良いものなのだろう？」

想書である。言語で深く思考し、言語を厳密に使う思想家（要は言語ウィルスにアタマをヤラレた一種のキ○ガイども。余計なお世話だけど言語オナ○ーばかりではなく、たまにセ○ズリでもして身体感覚を取り戻せと言いたいねえ）の書いたものは同じ思想マニアにはズリネタにもなりうるが、普通に暮らしている庶民にはさっぱりわからねえことだらけだ。しかも連中は言語ウィルス患者特有の症状で、言語による思考を重ねるうちに「自分が他人よりも格段に賢くなった幻想」（かなり悪性の妄想）にとらわれ、自分以外の他人を見下し始めるから始末に悪い。思い当たる奴は気をつけとけよ、自分が特別の人間だとか選ばれた人間だとか意識の高い人間だなんてのはほとんど全て妄想だよ、妄想。何度もくり返し言うようだけど、この世に特別な人間なんていねえんだよ、馬鹿。

だけど特別なキ○ガイはいる。それがウィリアム・バロウズだ。

奴のように「言語ウィルス論」などの皆で共有化できる妄想を発信するキ○ガイというのはそうそう滅多に世に出るものではない。そう考えると奴は貴重な存在だった。

たとえば俺はバロウズの小説をわざと真面目に読んでカ○掘りの悦びや楽しさを確信した。義務教育しか受けていない中卒な俺だが、思い出してみると中学3年までで「○マ掘りの快感」について明確に書いていた教科書や副読本は一冊もなかった（しかしつくづく情けねえ国と教育制度だよなあ、教科書にカ○掘りひとつ満足に載せられねえなんてよォ……）。

あえずは出荷されて殺されるまでは幸福に生きることができる。豚は殺される一瞬前までは飼い主の寵愛を受けられてとても幸せなのだ。そういう豚は自分がいずれ殺されることは知らない方が幸せである。だから豚に限らず、「我々平和な市民の一生なんて〝養豚場の豚の幸せ〟とほとんど同じだ！」などと気がついたら非生産的な「コントロール妄想」に取り憑かれて不幸な気分になって毎日が苦しいので、お前ら人間はくれぐれも「言語ウィルスによる人類コントロール支配」などには気づかないほうが幸せだろう。

言っておくが、俺はそういうコントロールが本当にあるとか無いとかということを問題にしているのではない。「コントロール妄想」は気づいた瞬間に機能し始める妄想であり、「実体としてのコントロールの有無」には全く無関係である。「コントロール妄想」は「ある／ない」ではなく、「気づく／気づかない」にかかっている妄想なのだ。

この種の「コントロール妄想」は、気づいて疑い出すと性に目覚めた年増女の性欲のように果てがない。天皇制の強さと同様、形のないものや実体のないものは壊しようがないし、UFOや宇宙人の有無や真偽と同様、完全否定ができないのをいいことに好きなことが言えたり書けたりするからだ（これは俺にも当てはまる）。ちょっと冷静に考えれば「コントロール妄想」が単に本人の自意識過剰からくる性質の悪い妄想であることぐらいは正常な人間には分かりそうなものだが、テンパッた患者（俺も）には、なかなか冷静な判断など下せないものだのだ。「そんなことはない、奴らのコントロール支配は現実にあ

それだけにバロウズ文学の相互カ○掘りシーンは新鮮な驚きだった。わからない奴は試しに『ソフトマシーン』を最初から飛ばし読みをせずにじっくりと一行ずつ精読するがいい。カマを掘る悦びと掘られる悦びがこれでもか、これでもかと随所に書かれていて、それがあまりにもしつこいので、しまいにはうんざりするだろうが、読んでいくうちに不思議と妙な気分になってきて、同性愛指向がなくても何やら肛○周辺がムズムズと熱くなり、精神がしりの快感を心から味わいたいという淫靡な気持ちに支配されることだろう。この世には同性愛とは全く無関係に「尻を掘られたくなる欲望」というのも存在するのだ。

「何だか頭ン中がモヤモヤして、しりに太いモノをぶち込まないことには今夜は眠れそうにない」――良くわからないが、読者をこういう気分にする作品こそが「優れた文学」という代物ではないだろうか？

バロウズの小説を読んでいると、本来排泄に使用する器官を「新たな性器」として鍛練し、その新しい快感に徹底的に酔いしれること――これこそが創意工夫を旨とする「人類」にふさわしい「人類の尊厳に溢れた行為」であるという気にさえなってくる（妄想）。

ぬるま湯のような平和な日常にどっぷりとつかって立場や使命（妄想）を忘れた我々が、自分の存在を確認する意味でも、誰か適当な相手に思いきりカマを掘られてみるのは

いい経験である。尻の快感に目覚めることを「神への反逆（妄想）」と位置づけ、その快楽（アナ○セ○クス――徹底的に非生産的な、快楽享受のための性交）に浸ることとは、造物主への反逆であるばかりでなく、我々自身が何処から来て何処へ行くのかという世界への基本的な問いかけ（ロマンティックな妄想）を思い出すのにも非常に有効である。深い山奥の寺へ入って坐禅を組むのも対言語ウィルスの戦略としては悪くはないが、俗世の中で俗にまみれてカマを掘られてよがり狂って我を忘れるというのもなかなか近代的で乙な戦法である。取るに足らない「カ○掘り」という行為を人生の意義を問う崇高な行為にまで高めてそれに興じて大真面目によがり狂って真理を掴もうとすること自体が、限りなく馬鹿馬鹿しくて造物主を侮辱した反創造的な行為であると思うのは俺だけかもしれないが、対言語ウィルス戦においては、とにかくあまり真剣に考え過ぎないことが大切だ。

ある意味でバロウズは、「目に見えない世界」や「世のはじめから隠されていること」を勝手に確信して「それらを徹底的に真面目に考えることの愚」を、自ら体現してくれた親切なジジイだということもいえるだろう。俺は自分の妄想を何一つ信じてはいないが、「全ての妄想戦は消耗戦でもある」ということだけは確信している。

問題は「肉体の牢獄」だけではない。「妄想の牢獄」こそが我々のテーマだ。

人はしばしば自らが勝手に持った妄想に殉じて死んでいく不思議な動物である。しかし、何一つ妄想を持たなくてもその人生は味気なくて生きるに値しないだろう。我々は妄想なしには一日も生きられない弱い生き物なのだ。

だからこそ我々は今日も明日も「わかっていながら夢を見る」――それこそが妄想戦で己を失わずに戦い続ける唯一の秘訣なのだ（妄想）。

この地上に過去・現在・未来に存在した全生命たちが悲しそうにソフトマシーンから手を振る。死んだ指が煙の中、外宇宙を指し示す。

「現代詩手帖　１９９７年11月号　追悼特集　ウィリアム・バロウズ」　１９９７年　思潮社発行

そうかジジイ、やっと死んだか、良かったな。（寄稿文　元原稿）　村崎百郎

★居酒屋弔辞「黄昏最後のタマ吸い」

バロウズの訃報を聞いた瞬間、俺の脳内妄想インターネットのCNNチャンネルでは遺体にとりすがって、泣きながらバロウズの萎びたペ○スをタマ袋ごとまるごと頬張って、まるで人工呼吸でもするように激しく吸いまくる秘書兼専属永遠ムスコシャブリのジェイ

ムス・グラウァーホルツ氏の真摯な姿が、瞬間最大迷惑騒音一二〇〇ホンの狂〇号泣付きでモハメッド・アリアリアリと映し出されて、その光景を妄想するもの全ての涙を誘っていた。確かにそれはある意味で大嘗祭並みの神聖さと上野の世界傑作劇場の便所で繰りひろげられる庶民的な愛に満ちたハッピーなコミュニケーションを思わせる行為ではあったが、「お〇まの末路は哀しい」というもっぱらのサイベリア評判通り、真剣に泣きながら亡きがらにとりすがっていたジェイムス・グラウァーホルツ氏の脳裏には、これから半年後にシャブリまくる別の若くてビンビンでそれいけジョニーでつっこめウィリーな雄々しくて形の良いペ〇スの映像が無数に映し出されていて、彼がそのことで彼自身の勃〇に若干の拍車をかけていることを俺の妄想神経繊維は勝手に見逃さなかった。〝お〇まの末路は哀しい〟、〝俺の死は何処にある？〟、〝俺の匂いをかげええええええ！〟――無数の妄想幻聴がどの街のどの夜のどの下水道にも流れ落ちて汚水の中に溶け込んでは消えていく……〝おいらここよ……おいらここよ……おいらここよ〟――ああそうだ、その時、それを見つめるそいつの目は虚ろで、心はすでにそこに無かった。

★遺骸に糞をかぶせろ！

　バロウズの訃報にあたって俺はこの惑星上に存在する全ての妄想戦士を勝手に代表してバロウズへの尊敬線を切断することを高らかに宣言する！　俺は今後も決してバロウズの写真を偉そうに精神障〇者面した文学者や詩人どもの肖像写真の横には並べないだろう。

バロウズの死をマジで悼み、〝偉大な文学者の一人〟などと美辞麗句を並べて評価して〝文学の殿堂〟に押し込めてこの現実から葬り去ることはバロウズのファンとして、バロウズの妄想戦を引き継ぎ受け継ぐ狂人の一人として、絶対に許さない。バロウズを教祖に祭り上げて神聖化することは、バロウズの意志（もちろんこれには俺の勝手な思い込みと妄想が入ってる！）と彼の書いた妄想文学テキストから学び取れる多くの事柄から最も外れた行為であると知るがいい。

俺は今後も一切バロウズに尊敬の念を持たないし、朽ち果てたバロウズの遺骸には何の興味もない。できればバロウズの墓に股がってとびきり臭い糞をたれたい気分である。

バロウズの名を、己を飾るスカシの小道具に利用した全てのスカシどもに大いなる呪いと災いあれ！　対象を無闇に尊敬視することで批判精神を欠いたまま思考停止を起こして、それで対象を理解したつもりになるような脳たりん偶像崇拝は、お前ら賢い文明人どもに任せてやるから有り難く思え。俺はこれから夜を徹してバロウズを頭のテッペンからけつの穴まで徹底的に無慈悲に完膚なきまで罵倒する（これがウィリアム罵倒ズ・コミュニケーションであり、俺流の鬼畜供養である！）。

だいたい、お前ら人間どもは何にでも簡単にいじましく感動しすぎなんだよ馬鹿野郎。見たものをそのまま信じるぐらいの愚は、たまに幽霊を目撃したぐらいでギャアギャア騒いだ上に霊界の存在を信じる精神障○者低能オカルティストどもでも簡単に出来ることな

んだから、ちったあ反省して自分の感覚ぐらい疑えよ。しょっちゅうワケのわからねえ電波受信してる俺が言うんだから間違いないが、この世で人間の感覚ほど当てにならねえものはねえぞ。神を自称する声が聞こえることが何だというんだ？　バロウズなら「人間は己の見たいと思うこと以外、何一つ見られない」とでも言うだろう。

しかしまあ、常に尊敬する対象を持ちたがる諸君らの心の弱さも分からないでもない（偉そうだなあ、こういうつまんねえ事でも、このように偉そうに言うと最もらしく聞こえるものだ。詐欺のテクとしては初歩の初歩なので騙され易い奴はよく覚えておけよ）。何故なら人間には「尊敬↓感動↓快感」という図式があって、何かを尊敬することはそのまま直接己の快感に結びついているのだ。少々ネガティヴでマゾヒスティックな快感がそこにはある。例をあげておくと、先ごろ長年植民地のアガリで喰っていたド鬼畜帝国の親玉一家の息子の元嫁が成金野郎のドラ息子と仲良く事故死した事件が世界中で盛り上がったのは記憶に新しいことだろう。どいつもこいつも、この金持ちの元嫁の色香と暇潰しの偽善事業でやっていたボランティア活動に感動してその死を哀悼していたらしいが、この件のとばっちりで切られて殺された総量5トン以上にものぼる花束たちのことを思うと俺は悲しくて夜もまともに眠れねえよ（嘘だけどな）。全く、人間なんてつくづく身勝手でテメエの快感のためなら何でもやる鬼畜野郎だっていういい例だな。

（この元嫁の死で、その後に続いたマザー・テレサの死がすっかりかすんでしまったのは、この世の腐敗に加速をかけるべく日夜活動を続ける人でなし鬼畜として嬉しい限りで

ある。あのババアは間違いなく元嫁など足元にも及ばないガンジーやキリストレベルの存在して欲しくない超超超超超善人野郎で、あんな奴が数世紀に一人でもいたら、せっかく腐ったこの世が良くなってしまう可能性があるので俺には深刻な脅威だった。世界中が一刻も早くあのババアとババアのやった善行を忘れてくれることを切に願う）。

そういうワケで尊敬と崇拝は人間の快楽に直結したものである。
これを読んでいるお前らも、お前ら自身の崇拝対象についてもう一度考えてみろ。
本当にソレを尊敬してンのかァ？
感動やキモチ良さを味わいたくて尊敬しているのではないか？
自分以外の何かに追従することで得られる安堵感と一体感に満足しているだけなのではないか？
己の中の隷属意識を大きく育てて何が楽しい？　そこに個体としての尊厳はあるのか？
このように知らず知らずに人の背後に忍び寄り、秘かに進行する〝支配〟の背後には、バロウズが長年妄想戦を繰りひろげてきた〝言語ウィルス〟の存在（妄想）があるのだ。

★ポスト・バロウズの「対言語ウィルス戦」について
言語線を切断しろ、時間線を切断しろ、妄想線を切断しろ、連想線を切断しろ、幻視線を切断しろ、幻聴線を切断しろ！　架空線はあい変わらず鋭い火花を放って俺の身体は大

量の妄想神経繊維を放出して海からの風に乗って世界に広がり、この人生を見渡してもそれほど欲しいものはない。されば、全ての語りえぬものどもに告げておく！　お前に繋がる神秘線を切断しろ、淫靡線を切断しろ、浣腸線を切断しろ、放尿線を切断しろ、前立腺も切断だ！　色欲線を切断しろ、可視線を切断しろ、猥褻線を切断しろ、俺は全ての感覚妄想を遮断して、徹底的に元素のレベルまで還元してやる。お前らが醜悪な構造と妄想をこの世界に持ち込むならば、俺はそれを上回る更に醜悪な構造をお前ら電波にぶつけて相殺してやる！　これ以上、俺の頭にうす汚い電波を飛ばすんじゃねえ！

さて、それでは、今後の「対言語ウィルス妄想戦」についての戦略を発狂（発表）しよう。何世紀も流通している言語を用いて言語ウィルスに闘争を挑むのが愚の骨頂であることぐらいは俺も充分承知の上だが、脳内に新たに妄想言語（略すると妄言！）を捏造して皆の脳髄に電波送信しても、殆ど届かないばかりか、届いたばかりに気が狂う輩も出てこないとも限らないので、甚だ遺憾ながらここでは日本語を使って説明する。

バロウズ同様少々言葉を崩したり、カットアップ・メソッドではないが、俺が独自に開発したギャグ・ストップ・メソッド（論調があまりマジにならないように文内に下らない親父ギャグを混ぜて、あまりの下らなさで読者にエポケーを促す手法。一部にはあまり効果がないという意見もあるが、そもそも我々のようなキ〇ガイは、このような〝独自の手法〟を頻繁に開発する生物であるということも押さえておいてほしい。諸悪の根源の一つ

は、物事を〝言葉で〟あまりに真面目に深刻に考え過ぎることに起因しているのだ）を使用しながら記述するので、以下の文章は〝考えながら〟ではなく、〝感じながら〟読んで頂きたい。

最初に、バロウズがこだわった〝言語ウィルス〟について、電波系キ○ガイの立場から真正面から考えてみよう。バロウズ文学においては重要なモチーフのひとつの〝言語ウィルス〟だが、これまで所謂〝正気〟の文学者や言語学者がこの〝言語ウィルス〟を真面目に考えなかったのは学者として当然といえば当然のことだ。これは一般の人間も同様で、人は映画の『ダイ・ハード』で有名になった俳優のブルース・ウィリスについて考えることはあっても、言語ウィルスについて考えることは殆どないだろう。

しかし、ここで**「意識が低いんだよ、お前らは」**などと思うのは独善的なキ○ガイにありがちの勝手な思い上がり妄想なので思い当たる者はくれぐれも気をつけることだ。言語ウィルスの挑発に乗って己の意識を無闇に暴走させるのは得策ではない。バロウズの文学内にもしばしば見られるミイラ取りがミイラになる〝主客の転倒するモチーフ〟同様、対言語ウィルスとの妄想戦においては、敵の発信する陰謀妄想に触発されて対象を激しく疑うあまりに、そこで新たな陰謀を自分で生成してしまい、不毛な消耗戦を繰りひろげる妄想戦士が後を絶たないのは悲しむべきことである。ひとえに人類が四十五億年の長きにわたって言語ウィルスとの妄想戦に敗退し続けた原因もそこにある。

世界は数多くの〝ことば〟に満ちている。そして、それらの〝ことば〟から生じる無数の妄想にも満ちている。妄想と妄想がぶつかり合って無限に派生する妄想戦の数々……敗退した者はその妄想に心奪われ、その妄想を絶対的な現実として受け入れるのだ。

これが、自分自身の思い入れや思い込みからくる〝個人妄想〟や、特定の相手との間に生じる愛や恋などの〝対妄想〟に属する妄想戦ならば、それほどの悲劇も生みだされないだろう。しかし、国家や宗教的な習俗など、共同体まるごとが巻込まれる〝共同妄想〟に属する妄想戦はしばしば民族規模の扮争となって多くの血と命が流されるのだ。

「どうか言語ウィルスどもの巧妙な罠に気づいてくれ！　奴らの正体は自分たちを使用する全ての人間に寄生して、世代を超えてその身体を拡張し続ける極めて特殊な疑似生命だ。彼らの希薄な身体と支配力は、彼らを使用する人間の数にかかっている。そのため彼らはできるだけ多くの人間に取り憑き支配しようと、自分が取り憑いた民族を刺激して他民族に対して侵略をしかけるのだ。歴史をひもとけば、侵略に成功した側の民族が征服民に自分達の宗教や言語を使うことを強いる例はいくらでもある。**〝神〟はことばであり、同時に言語ウィルスなのだ**」という言説は、一九七七年の秋以降、俺の頭に二十九日周期でやってくる電波特有のものだが、この種の妄想は記録によれば十九世紀後半のヨーロッパでは道端に転がる犬の糞ぐらいにポピュラーなものであったというから、そもそもキ◯ガイの妄想には所詮大したオリジナリティーなど皆無なのだ。

たとえば「言語ウィルスはバロウズが妻殺しの言い訳で捏造したものだ」という説をとなえるのはたやすい。しかし、仮にそうでも当のバロウズには判断がつかなかったろうし（そうした場合に人間は殆ど自己催眠並みの〝自分に都合の悪い記憶の抹消〟と〝過去の捏造〟を己の中で無意識に行うものである）、その逆に、実体としての言語ウィルスを大真面目に発見しようと顕微鏡に向かう試みは、月面でブルース・ウィリスのそっくりさんを探すぐらい困難で、結果的に精神病院からのスカウトの目に止まるだけなので、シャバに留まって楽しくやりたい諸君は手を出さないのが賢明だろう。

とどのつまり、バロウズの言語ウィルス論から我々が学ぶべきは、「我々の使用する言語の中には〝言語ウィルス〟という言葉に象徴されるような致命的な欠陥が存在する」ということだ。我々の日常のコミュニケーションの中でも、伝えたいことが何ひとつ相手に伝わらず、つまらない悪意ばかりが増幅して伝わってしまうことは良くあることだろう。最も伝えたいことが相手にさっぱり伝わらないもどかしさを感じて言葉につまった経験はないか？　それは何も〝ボキャブラリーの貧困〟ばかりが原因ではない。

コミュニケーション・ツールとしての〝言語〟が持つ不完全性と、そこから生じる〝悪意〟をつねに意識しながら注意深く言語を使用すること——それこそが、我々意識ある人類が陥った〝言語の拘束〟から解き放たれるための第一歩なのだ。全ての言語が、発生したその瞬間に、嘘もつける〝詐欺の手段〟としての機能をも同時に合わせ持った〝両刃の刃〟であることを忘れてはいけない。

★言語ウィルス撃退法

最後に、大雑把に妄想言語ウィルスとの妄想戦略について語ろう。

「無意識にも構造がある」と気がついたのはユングだったが、「妄想には構造しかない」と気づいたキ○ガイは歴史上いくらでも存在した。この種の〝妄想の構造〟を克明に想い描くことこそが、言語ウィルスとの妄想戦に勝利する秘訣であることはヒヒノケツ上流でサソリに刺されずとも明らかであろう。

言語ウィルスに完全勝利するには全人類を精神障○者にするか死滅させる必要がある。

使う者が一人もいなくなれば、奴らは命を保てないからだ。この手法は同様に、地上の人間の精神に巣食う多くの神ども（妄想）をコロスのにも有効である。もちろん、そんなことはハナから無理なので、それ以外の闘争方法について考えよう。

バロウズは沈黙が望ましいと言ったが、現実問題として沈黙は事態の引き伸ばし程度しか効果がない。寝ているときに寝言を言うだけでも言語ウィルスはその命を保つことができるのだ。口に出さなくても、アタマの中でことばを使ってモノを考えるだけで、言語ウィルスは活性化する。これらの対抗手段として思考を一切停止して参禅するのもいいが、まさか死ぬまで飲まず食わずで坐禅を続けるわけにもいかないだろう。確かに、ことばを使わなければことばに負けることもないが、同時に勝つこともない。そうした消極的な戦略は、結果的に言葉を使わなければならず、むしろそのことで言語ウィルスを増長さ

せるだけなので、あまり薦められたものではない。
バロウズのやったカットアップやフォールド・インもそれなりに効果的だが、これらは主に〝記述された〟言語ウィルスに有効な手法なので、我々が普段会話したりする日常レベルの戦略としては普及が難しいだろう。
とりあえずは、言語を神聖視することを徹底的にやめることだ。
〝ことば〟を軽んじて、徹底的にふざけまくること——つまらない親父ギャグを何度も何度も何度も繰り返し言い続け、世界中に〝くだらなさ〟をばらまくこと——思い切りでたらめな会話をして議論を無化すること——とにかくギャグを飛ばして物事を必要以上に難しく考えたり、必要以上に真剣になったり真面目になったりしないこと（マジになってテンパると言語ウィルスの思う壺だ）——つまらないプライドを肥だめにぶち込んで、精神のき○玉のシワ（女性は小○唇のシワ）を限界まで伸ばして裏の裏まで堂々と世間に晒すこと——これらの活動は全て、言語ウィルスが引き起こす争いごとや〝絶望的な状況〟を緩和する効果がある。できれば全ての人間がこの闘争を通して、人間としての限界まで腐敗し堕落することが望ましい。汚いオトナを代表してキレイな若者に偉そうに訓をたれておこう、**「堕落も成長のうちだぜえええええ！」**ってな。
そして、もちろんこんなのは無限にある闘争方法の初歩の初歩だし、世界には更にやっかいな〝映像ウィルス〟もいれば〝数字ウィルス〟もいる。この俺も、敵のコントロールラインを完全に切断するには更に大いなる狂○に接続する必要があるだろう。そこに

〝愛〟などという書くのも穢らわしい薄汚い妄想のつけ入る隙は全く無い。
俺は死ぬまで汚穢にまみれながら、全ての妄想戦を勝ち抜くつもりだ。
意識線を破絶しろ、神聖線を破絶しろ、知識線を破絶しろ、汚穢線を破絶しろ、主霊線を破絶しろ、呪力線を破絶しろ、天使線を破絶しろ、悪魔線を破絶しろ、朦朧線を破絶しろ、魍魎線を破絶しろ、奇形線を破絶しろ、無能線を破絶しろ、常磐線は速やかに混雑時の電車を増発しろ、全ての電波は速やかに発信されたアンテナに帰れ！
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜寄稿文　ここまで〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜以下は寄稿文の後に書かれていた文章〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

★参考資料　『気〇いナチス』（カルカッタレコード）―
ひとの思い込みと思い入れが大きな形をとって
ひとえに人類の歴史は妄想の歴史だった。俺は
N1961年以降、俺の眼前20センチに浮かぶ80せんちの巨大肛〇が

感謝する！　感謝する！　感謝する！　この汚穢じみた世界の汚れに感謝する。腐った
マスコミに感謝する。
気がついたら俺は現実という名の汚水の中にいて、傍らを流れる

俺が
俺の頭の中の金多摩

俺はお前を必ず裏切る世界は俺を必ず裏切る
そして無数のペ○スがぐぐった無数の肛○の彼方まで俺達はなんて大きなでたらめに真
面目に取り組んでいるんだろう
すかしきった世界の果てまで
執筆陣は妄想陣が　妄想陣ができあがるまで
ボーイスカウトはキム
妄想のない明るい街という看板をけり倒して
奴が送った醜悪な妄想に現在答えられるのは俺しかいないだろう。

「ユリイカ　１９９７年11月号　バロウズのいない世界」　１９９７年　青土社発行

『クラッシュ』——大いなる変態のバラード　村崎百郎

以前、雑誌の取材で悪趣味極まりない実録モノの死体ビデオを二十本余りぶっ続けて観たことがある。その中には交通事故で身体がバラバラになった凄惨な死体を延々とナメるように撮ったビデオもいくつかあって、それらはなかなかの見物であった。

どう見ても「アスファルトの路面に落として割れたスイカの破片」にしか見えない轢死体の頭部は、厚さが数センチになるまでペシャンコに潰れて全体がスルメのように薄く広がって、それでもその表面を覆う血まみれの骨付き皮には、まだぼんやりと人間らしい表情が残っていた。自分に関係のない人間の死体などいくら見ていても同情や哀悼の気持ちなどさっぱり感じられない鬼畜な俺だが、不思議とそういうところには何ともいえない情趣を感じて「いやあ、人生ってホントにはかないもんですね」と笑顔で合いの手を入れたくなるのだから困ったものだ。こういう情景はビデオだからこそ平気な顔をして楽しめるのであって、現場にいれば血や臓物の臭いでいたたまれない気分になっただろう。弾けた腸の中から漏れた糞の臭いを考えただけでも気がヘンになりそうだ。現実の事故現場なんてどれも汚くて臭いだけでロクなものではないだろう。しかし、これがバラードの『クラッシュ』で語られる「イメージとしての衝突事故」となると、何やら甘美なうえに淫靡

さまで完備していてやたらと格好が良く、読むと脳内ペ○スが激しく勃○して「これなら俺も衝突してみたい」という気にさえさせてくれるから文学というものは大したものである。

ＳＦは門外漢の俺だが、バラードが追求した内宇宙が「人間の心の宇宙」であるとするならば当然のごとく、その中はさらに「正常宇宙と異常（変態またはキ○ガイ）宇宙」という大雑把で陳腐な類別が可能なはずだ。そして、文学であれ悪趣味であれ、面白いのは何といっても「異常宇宙」の方で、この中にこそ人間という不可解な存在の根源的な謎やら意義やら真理やらに到達するヒントがいくつも溢れていて、バラードにとっての『クラッシュ』とは、そうした「異常宇宙」を描いた最も分かりやすい作品であると考えている。

衝突事故に取り憑かれた男のオブセッションを描いたこの作品は「エロティシズムとは死に至るまでの生の昂揚」というありふれた言葉で説明してしまえばそれまでなのだろう。確かに快感とは、ある意味で全て苦痛が緩んだ状態のものともいえるし、死や危険に向かうスリルを味わったあとで、しばしば人間が性的に興奮するのはよくある話である。個人的な経験を語ると、人間は誰かに思いきり理不尽で凶悪な暴力を働いた後にも猛烈な性的興奮を覚えることがあるし、「男は己の死期を自覚するとその瞬間に勃○する」という話もあって、それは「個体が最後に遺伝子を残そうと○起を試みる行為」に違いない。

ただ、『クラッシュ』にはそうした「死と隣り合わせの極限のエロス」以外に、「テク

ノロジーに溢れた近未来の世界では、テクノロジーも人間の生活に自然に溶け込み、そこで人々はテクノロジーまじりの性生活を送るようになる」という予見も当然入っていることだろう。何も車でなくとも、たとえばインターネットで無修正のエッチ画像を集めて興奮しまくっているマニアの中には、コンピュータを起動させると条件反射的にムクムクと陰○が勃○するというサイバーピンクな奴がいることだろう。現在のMacの「スコーン」という抜けるような起動音を聞いて、射○の瞬間や陶酔を思い起こす人は案外多いのではないだろうか？「夏の蒸し暑い時期にプールに飛び込む快感に似ている」という声もあるが、あれは間違いなく射○の快感を表現した音である。俺にはそうとしか思えない。

そうした妄想をふまえて、もう一度肉体のレベルで『クラッシュ』を考えるとき、我々は我々自身の裡に深く潜む「死への欲望」を問題にしないわけにはいかないだろう。

我々個体は誰も皆「人類種」の遺伝子を次世代へ受け渡すための〝容れ物〟である。その目的と理由はこのさい置いておいて（考えてもわからないが、どうせロクなもんじゃないだろう。『タイタンの妖女』を思い出して笑おう）、当然のことながら、我々人類の多くは子供を作り、遺伝子をバトンタッチして、その子供が大きくなるまで養育する。「遺伝子の受け渡し」が我々の主たる使命なら、それを果たした後の個体は、次世代の為にさっさと死ぬのが最重要な使命ということになるだろう。速やかな世代交代のために、我々自身の裡には自己保存本能と同時に、ある程度生きたら、今度は自らの死を自然に願うような自己破壊本能ともいうべきプログラムが組まれているのだ（「老化」などがこれ

にあたると思われる）。そして、単なるこじつけのようだが、死を甘美なものとしてとらえる退廃的な芸術の多くは自己破壊本能に基づいたものであるという気がしてならないのだ。

おそらく遺伝子のプログラムの中には「民主主義」だの「老人福祉」だのという文字は皆無なのだろう。我々は次の世代のガキどもの為に速やかに死なねばならないのだ。どうせ死ぬならその死はできるだけ楽しく――こうしていつのまにか俺は『クラッシュ』の主人公のように自分自身の衝突（死）のデザインをしはじめている。

己の生命を投げ出すという行為ですら、大いなる快楽と陶酔を獲得するための単なる一要素でしかないという何かが完全にねじくれた世界――自分の存在などどうなってもかまわないと感じるエクスタシーの瞬間――『クラッシュ』の中でぽっかりと口を空けているのは、人生を一瞬で棒に振りかねない、そうした黒い大きな落とし穴なのだ。

そして映画の『クラッシュ』は原作に加えて、クローネンバーグ監督に長年憑いてまわっている「女房殺しのオブセッション」がかぶさって作品の変態度が更に高まって質の良い仕上がりとなっている。これは必見の作品だ。

「ＳＦマガジン　１９９７年3月号」　１９９７年　早川書房発行

なぜいまホラー映画が流行するのか？　村崎百郎

ホラー映画の流行――それは単純に考えて〝恐怖〟が求められているということにほかならない。ホラー映画の現状を語る前に、〝恐怖〟そのものについて簡単に考えてみよう。

〝恐怖〟は本来、自己保存本能に基づく危機回避のために人間に備わった、個体の生死に関わる非常に重要な感情である。人類が恐竜や猛獣などの脅威にさらされていた原始時代にあっては、誰よりも早く〝恐怖〟を敏感に感じ取り、迫り来る危機を回避できた者だけが長く生き延びられたであろう。そういう時代に生きた人間は、生きるために〝恐怖〟したのである。ところが、現在のように高度に文明が発達し、社会が安定した状態の中では、〝恐怖〟という感情は本来の目的を越えて、個人の快楽追及のための〝娯楽〟として囲い込まれてしまっている。外敵からの脅威にさらされていた原始時代や、食料の乏しい飢餓の時代や、いつ死んでも不思議ではないような戦争中とは違って、今日一日を生き抜くことがさほど困難ではない現代日本に生きる我々にとっては、〝恐怖〟は暇つぶしの娯楽のための感情として機能していることの方が圧倒的に多いのが現実だ。

社会が安定し、穏やかな平和が続けば続く程、人々は娯楽としての〝恐怖〟を求めるだろう。だらだらと続く変わりばえのない日常がもたらす〝退屈〟とともに渡り合えるのは、発狂レベルの宗教信仰心や超国家主義的な目的意識（例えば世界征服とか）でなけれ

ば「絶対安心圏から安心して体験できる〝恐怖〟」にほかならない。
過度なストレスは個体の生命を危うくするが、適度なストレスは生命体が持つ免疫力を高める効果があり、「全くストレスのない平和すぎる生活」というのも健康には良くないらしい。そういう話を聞くと、遊園地のジェットコースターなどの絶叫マシーンの過激さが年々エスカレートし、遂には高所からの投身自殺シミュレーションとしか思えないバンジージャンプが流行るようになったのも、我々が単に娯楽としての恐怖を貪欲に追及するだけの馬鹿な生き物ではなく、潜在意識の奥底では種としての危機回避能力や免疫力を低下させないために努力をしようと考え、進んで恐怖を体験しているのではないかという、好意的な解釈も可能である。我々人類が種として強くあるためには決して〝恐怖〟することを忘れてはならないのだ。
さて、一口に〝恐怖〟というが、社会が高度に複雑化した現在、〝恐怖〟もまた同様に多種多様化している。試みに〝恐怖〟を産業の分類のように区分して考えてみよう。
自分自身の命に関わる恐怖——自分が殺されるかもしれない、誰かに襲われたり事故で怪我をしたり死んだりするかもしれないという、自分の身にふりかかる基本的な恐怖を「第一次恐怖」とするなら、自分が殺されるわけではないが、自分の家族や恋人や子供など、自分の愛する人々の命が危険にさらされ、それらが失われるかもしれないという、恐怖は「第二次恐怖」ということになるだろう。
ホラー映画は、そのほとんどが観客が主人公に感情移入して襲ってくるモンスターたち

と戦う「第一次恐怖」に属するものが多いが、最近は「第二次恐怖」をメインのテーマにすえたものが多くなっている気がする。例をあげればスティーヴン・キング原作の映画化『ペット・セメタリー』や『痩せゆく男』のラストシーンなどがそうである。なまじ他者への愛という感情があるがゆえに起こる恐怖と惨劇――「第一次恐怖」の映画が「怖い映画」ならば「第二次恐怖」の映画は「イヤな映画」ともいえるだろう。中田秀夫監督の『リング』のラストもこれに該当する。愛する我が子の命を救うために、年老いた両親に死のビデオを見せに車を走らせる母親の姿は、愛や憎悪や慈悲や妄執のいりまじった判断のつかない複雑な感情を観る者に突きつける。子供を救うために主人公が老いた両親を犠牲にするという構図が、そのままお年寄りに冷たいこの国の福祉政策の不備を表すメタファーであり、実は我々は誰もが意識せずに老いた両親を殺しに行くあの母親と同じことをしているのであるという解釈も充分に可能で、それがあの映画の後味の悪さに拍車をかけているのかもしれない。

もう一つ、産業でいえば主にサービス業の第三次産業に相当する「第三次恐怖」というのも確実に存在するだろう。これは、自分の命も愛する人たちの命も危うくなるものではないが、自分がこれまで築いてきた社会的地位や名誉が一瞬で失われてしまうかもしれないという、恥をかかされたり自分の所持する大切な「モノ」が損なわれてしまうのではないかという恐怖である。これには様々なパターンがあって、自分の大切な趣味の領域が犯される恐怖、たとえばアニメオタクたちが大切にしているプレミアグッズやフィギアが無

残に壊されるという恐怖もあれば、インターネットなどのパソコン上のコミュニケーションで正体もわからない連中にデマや誹謗中傷を受けて大恥をかかされるなどの恐怖も含まれる。大蔵省のエリート官僚が汚職で捕まって一夜で転落して人から蔑まれるという恐怖もあれば、部下の造反にあって社長の座を追い落とされる恐怖もあるだろう。締め切りが過ぎても原稿が上がらず本が出ないというのも、赤の他人にはどうでもいいことだが当事者たちにとっては充分に恐怖である。いずれにしても「第三次恐怖」は、現象だけ見ると「別に生命の危険など全くないのだが、個人にとって重大な意味を持つ有形無形の〝価値〟が侵害されたり失われたりする恐怖」であり一次恐怖や二次恐怖に比べると「贅沢な恐怖」なのである。しかし、社会が複雑化すればするほどこうした「贅沢な恐怖」が死ぬか生きるかの切実な恐怖へと変わってしまう可能性は充分考えられる。よく我々日本人は恥を重んじる民族だと言われるが、それでなくとも、若い女性にとっての「自分が太っていく恐怖」「年老いて醜くなっていく恐怖」「仲間からイケてない子という烙印を押されて無視される恐怖」などは、命にかかわる「第一次恐怖」以上の恐怖で彼女らにとっては生きるか死ぬか以上の問題かもしれないのだ。今後はこうした「第三次恐怖」に関するホラー映画が作られるようになるかもしれない。福本伸行氏の描くディープなギャンブル漫画『アカギ』や『金と銀』などの映像化もこれに該当するだろう。

こうした様々な恐怖が映画化されることは映画の観客としては非常に楽しみである。個人的な感想だが、こと邦画やVシネマに関しては、どういう理由か知らないが、今まであ

まりにも安易にヤクザが出てくる映画が多すぎたような気がする。ヤクザ映画は仕方がないにしても、そうでない映画でも実によくヤクザが登場してくるのが邦画の特徴で、これが映画の安っぽい仕上がりに絶大な効果をもたらしじているのだが、どんなものだろう。ヤクザの持つ暴力性と恐怖にも見るべきものはあるが、それも健さんの時代の仁侠映画ならいざ知らず、現在邦画で描かれるヤクザは恐怖というよりひたすら鬱陶しさしか感じられない。そうした現状から、観客がヤクザの恐怖とは別の、良質な恐怖を求めていることもホラー映画が流行する理由の一つとなっているのではないだろうか。

最後になったが、個人的にお薦めのホラー映画（邦画）は何といっても黒沢清監督の『CURE』である。これは霊感商法や宗教サギを助長する荒唐無稽の下らないオカルト映画とは違って人間という生き物の不可解な部分をリアルに描いた秀作だ。今後に期待する監督は『女優霊』と『リング』の中田秀夫監督だ。どちらも凄くイヤな映画で良かった。

村崎百郎（鬼畜ライター）

「キネマ旬報」　１９９９年　キネマ旬報社発行

セイショーネンの成人映画

村崎百郎

性欲労働者のエロ映画観賞

俺は純粋な映画マニアではないので、自分の性欲からエロ映画を考えてみたい。そもそも性欲やオナ○ーの問題抜きにエロ映画の事を語るのは、エロ映画に対して大変失礼な気がする。スカした映画論抜きに、単なる強度の性欲保持者にとってのエロ映画体験とはいかなるものであったかをつつみ隠さずお話ししよう。あくまでこれは俺個人の体験談で全ての男性がこうだと言うつもりはない。

まず第一に、俺がエロ映画館に通っていたのは映画が観たかったからじゃない。女の裸が見たかったからだ。ここが映画マニアとは根本的に違う点である。俺がエロ映画を観に行っていたのは八○年代の初めからだが、当時映画を観に行くか行かないかの判断基準はあくまでも出演女優とジャンル（SMものとか乱暴ものとか）で、監督が誰かなどというのは完全に意識の外にあった。本当に誰が撮っていようがどうでも良かったのである。好きな女優のハダカが拝めればそれで良かったのだ。

その頃のエロメディアの状況を説明すると、八○年代の初めというのは今のようにヘアヌードやAVビデオやテレクラやQ2などといった恵まれた環境は無く、サブカルチャーが満載の安値のエロ本が自動販売機で売られ、スケスケのパンティごしに陰○やお○んこが淡く見える「ビニ本」が出回りはじめ、ノーパン喫茶がどこの繁華街にも出来はじめて

汚穢愛好派ではなかった俺にはいささかハードすぎる店だった。まあ、観賞後のオナ○ーを前提として映画館へ足を運んでいた人間としては、やはり欲情してきん玉を握りしめながら家に駆け戻ってオナ○ーの出来る牛込文化が一番良かったような気がする。家と映画館の間は「勃○したペ○スが萎えない距離」が理想だろう。

当時は俺も十八歳だから、性欲もギンギン状態の「野獣期」というやつで、いくらセッ○スをしても、あとからあとから精○がたまってすぐに欲情してしまうという大変な時期だった。同棲中の女とも朝昼晩と日に最低三回は性○していたし、女の生理中も生尺で抜いてもらったり、それ以外にしていたオナ○ーも合わせて考えると、年間の射○回数は一千回を軽く越えていたと思う。肉体的にも絶頂期で、水をいっぱい入れたヤカンを勃○したペ○スのカリの部分に引っ掛けて楽々持ち上げられた。（無論こんな事はセ○クスの技法とはまるで関係がない）。反省をこめて言えば、当時の俺は相手の女の事など全然考えていなかった。女の快感など本当はどうでも良かったが、性○は一回限りで終わりではないので、次回も○らせてくれるようにイカせてやっていただけである。女と一発○（ヤ）るためにはどんな嘘でもつけたし、思ってもいない事も平気で言えた。一発のためなら何だってやれる時期だったのだ。女を「なかなかヤらせてくれないめんどくさいモノ」だと思っていた。だからずっと同じ女でヤってれば当然飽きるし、飽きたら女の頭からシーツや袋をかぶせてエロ本やビニ本を観ながら性○していた。これほど女を馬鹿にした話もないが、要は相手の事を思いやる余裕もないくらいに性欲が高ぶって発狂状態だったという

を妄想してから、そのど真ん中の特設ステージで嵐のような罵声と怒号を背中に受けながら女を四つん這いにして思いっきり腰を使ってやった……。などと、まあ、こう書いてみると入院というよりは監禁レベルのキ○ガイという気がするが、幸いこの国では、実行さえしなければ心の中で何を考えようと罪には問われない。顔に出さなければ良いのだ。

そういうレベルの性欲を持った人間にとってのエロ映画というのはもう、映画としての完成度などどうだっていいのである。女のハダカが出てくればそれでいい、あとは勝手に妄想するから。そんなふうに観ていたのだ。ストーリーは気にならなかったし、むしろ妄想の邪魔だった。逆にまじめに映画を最初から観てしまうと退屈なストーリーに引きずられて興奮出来ない場合もあった。映画を観たあとでするオナ○ーよりも、同じ映画のグラビアがカラーで載っていた『映画の友』をオカズにしたオナ○ーの方が興奮できた事もある。上手く説明できないがオナ○ーというのもかなりメンタルなものだから、女のハダカが動けばそれでいいというものではないのだろう。わざとらしく悶える女優はなんとなく嘘っぽいし、妙に大げさにしごいたりする女優のオナ○ーシーンは、さも「男の側が考える女性像」みたいで興醒めしてしまうし、そういうのを見せられるとなんだか馬鹿にされているような気になったものだ。どうでもいいと思いながらけっこうそういう所でリアリティを求めていたのかも知れない。あと、よく「日本のエロ映画は汚い」という批判を聞くが、俺に言わせりゃ薄汚いからこそオナ○ーが可能なのである。あまりに健康的で綺麗すぎるヌードグラビアではちん○が立たない。完璧な美人ではなく、どこかに欠陥がある

いた時期である。歌舞伎町ではまだぼったくりのキャッチバーがそこらじゅうにあって、確かビルの上の階にあるキャッチバーで、法外な金額を要求された大学生が逃げようとして窓から飛び降りて死んだ事件があったと思う。当時はまだ風営法もなく、歌舞伎町の風俗産業の店は今のように安心して行ける状況ではなかったのだ。だからエロ映画館というのは、トルコやピンサロへ行く金も根性もない若者が安心して行くには非常にお手軽な場所だった。俺も若くて見識がなかったから、変なプライドを持って「※トルコへ行くほど女に不自由しちゃいない」とか「女を金で買うなんて」などという勘違いもはなはだしいバカな思い込みを持って、そういう場所へ行かないことを誇りに思っていた。若かったとはいえ全く恥ずかしい限りである。これを読んでいる若い男性諸君、「風俗に行くのは油ぎったデバラの中年になってからにしよう」などとナマイキな事は思わず、行きたければ今すぐ性感マッサージでもヘルスでも手近な所から始めよう。

※トルコ＝現在のソープの事

野獣期（または鬼畜期）

良く通った映画館は家から歩いて十分ぐらいの、地下鉄の神楽坂駅に近い「牛込文化」だった。他にも歩いて二十分ぐらいの所に「飯田橋くらら」があり、ここは三回行けば一回タダで観れるという特典があったが、（今はどうか知らんが）劇場内に入ると目が痛くなるくらい小便臭いうえに、上映している映画も出演女優も地獄の様な酷さで、当時まだ

親しみの情どころか「同棲の相手がいる俺はお前らとは違うんだ！」という優越感を持って、「俺は余裕を持って観にきているんだ」などと言い訳しながら映画を観ていた。ホームレスや女にもてなそうな若いやつらを見下しながら映画を観ていた。人を勝手に見下しながら映画を観ている自分に対して嫌悪を抱きながら映画を観ていた。ああ、金さえあれば、生意気そうなオンナのツラを札束で思いっきりひっぱたいて、どんな体位も文句を言わせないんだが、何で俺はこんな場末の安映画館で人間のクズどものような連中とうす汚い欲望を共有しなければいけないのか？　ああ、みじめだ……たまらなくみじめだ！　そんなふうにゆがみながら出てくる女のハダカにはしっかり欲情した。映画名は忘れたがロビーに貼っていた朝吹ケイトのポスターを盗もうとして見つかった事もある。それでもポスターを返してからまた平然と場内で映画を観ていた。そんな事も許される良い映画館だった。

エロ映画館の闇は淀んでいる。街中の汚れを全て集めてしまったかのような暗い場内でイスにだらしなく身を沈めてダラダラ画面を眺める快感というのは、ぬかるみに足を取られた時に「しまった」と同時に感じる「もうこれで悩まなくていいんだ」という快感に似ている。それは決して虚無感などという格好の良いものではなく、ひどくみじめで滑稽なものだ。俺にとっては、自分がいかに人間のクズかを再認識させてくれる貴重な場でもあった。

わけだ。恐ろしい事である。野獣期というよりは鬼畜期と呼ぶべきか。
さらに言えば、一緒に暮らしている女がいてもそれはそれ、他の女に欲情するのはケダモノとして当然である。寝ても覚めても考える事はセッ○スの事ばかりで、色々な女のあそこが見たい、乳が吸いたい、触りたい。縛り上げて、泣き叫ぶ女の横っ面を張りたおして顔の形が変わるまでぶん殴ったあとでさんざんオカしてから、トドメにけつの穴にも太いのをむりむり一発キメ倒してやりたいという汚い夢ばかり抱いていた。しかし、残念ながら、好き放題に女がオカせるほど世の中は甘くない。そうなると、おさまらない性欲は想像力を暴走させる。性欲が最高潮を迎えた頃は、出会ったり街で目にした女の全てに対して欲情し、彼女たちのセッ○スを妄想した（ばばあと幼女は除く）。もちろんこの妄想には女性に対しての人道的配慮などまるで無い。
美人やプロポーションの良い女ばかりではなく、動物並みの醜女に至るまでがまんして心の中で一所懸命オカした。ＯＬも人妻もわけへだてなく、視界に入る女は毎日毎日、一人残らず頭の中でまる裸にして手当たり次第にオカした。余裕があるときは、女の体をナメるようにじっくり見ながら頭のてっぺんからけつの穴まで克明に妄想した。乳房のまわりについたブラジャーの跡からパンティについたシミ、上つきとか下つきとか、小○唇のカタチや白濁したオリモノの匂いや味、果ては肛○のまわりに拭き残した糞まで次々と勝手にイメージした。俺にナマイキな口を利いた女は特に念入りにそいつの親兄弟親戚恋人の目の前でオカしてやった。闘技場を思わせる広いスタジアムを埋めつくす５万人の親戚

村崎百郎が試聴する「電波ディスク」ベスト20選!?

村崎百郎×木村重樹（a.k.a.ニコラス啓司／編集者／文筆家）

木村：村崎さんの書いた「電波の種類」のくだりとかを読ませていただくと、いわゆる〝電波〟を受信する感覚に最も近いものを、われわれ一般ピープルの体験の中から疑似的な参照例として挙げるとすると、ある種の聴覚体験……演奏やディスクを聴く……というのが一番近いような気がしたんですよ。で、そんなことがきっかけで、かなり〝電波〟受信に近い……と思われるような特殊なサウンドが流れるレコードやCDを、周囲から適当にかき集めてきましたので、演奏家や作曲家にかんする先入観抜きで、ざーっと聞いていただき、寸評をきかせていただけませんか？　〝電波〟っぽいとか、似てねえよとか……。

村崎：よっしゃよっしゃ。でも基本的に、音楽と〝電波〟は別物だってことを、了解しといてくれや。

木村：体験として全然違うってことですか？

村崎：大部分の電波は音楽のように整然としてないんだよ。もちろん〝音楽〟が聞こえてくることもある。どこかの時間と場所でかけられている、テレビの中から聞こえてくる「都はるみの歌声」とかがね。

適当にブサイクな女のほうが安心して欲情できた。相手の欠点を見つければそこから愛せるのだ。そして、何だかわからないが身も心も汚れきった薄汚い女が無性に欲しくなる夜というのが必ずあり、そんな時は、エロ映画館の汚い闇や場内に漂うすえた匂いさえ懐かしいものだ。

牛込文化の夜

八〇年代の初めの牛込文化は、例えて言えば上野駅の構内や地下道の小便臭いすえた匂い、終電近くの駅の階段で時々見かける酸っぱそうなゲロのかたまり、あまりの汚さに便意も尿意も引っ込む公園の便所に似ていた気がする。受付兼売店にはいつ作られたか分からないラスクが置いてあって不気味だった。もちろん、便所で食事をする人間が少ないのと同様、場内でモノを食いながら映画を観ていたやつはあまりいなかった気がする。

三本立てで四百円、オールナイトでも五百円か六百円というリーズナブルな値段。その安さがそこにいる事を一層みじめなものにした。場内に入ると客はいつも十人あまり。一番前の席には必ず紙袋をたくさん持ったコ〇キだかホームレスだか見分けのつかないのが寝てるし、セビロのくたびれた中年の親父がどこかしらに座っている。みんなゴミのようだった。早稲田大学が近いせいなのか大学生風の若いやつもちらほら来ていた。どいつもこいつもしょぼくれて情けない格好でつきあってる彼女どころか、若い女と満足に口も利けないような感じのやつらばかりに見えた。情けないことに俺は、そういう連中に対して

村崎：ううむ。受信すると末端から身体がトロケてく感じの電波を思い出すなあ……もちろん連想するだけで、実際にこんな心地良い音が聞こえるわけじゃない。こんなふうにパァーっと上方に拡がっていく音ってのは、まだ前向きでイイかもね。たぶん妄想だろうけど、意識が拡大していくような気がするじゃない。ただね、宗教系の押しつけがましい〝声〟がやって来る時って、こういう感じの音を伴うこともあるんだ。心地良いだけに、罠のような気もして油断できないんだ。

（別の曲）こんなふうに風の音がゴウゴウと鳴ることはたまにある。俺の頭の中に聞こえるノイズ電波はだいたい複数の種類が重なって聞こえるんで、単独で来ることは稀なんだ。（また別の曲）こういう郷愁をさそうような心地良い音と音の狭間から、どこかで死んでいく人間の断末魔の呻き声がかすかに聞こえることもある。

2■ジ・オーブ：『UFOR』

木村：アレックス・パターソン率いるジ・オーブのダビーでアンビエントな大作です。

村崎：この「彼方からサイレン」が聞こえてくる感じの曲はなかなか電波っぽいところがあるなあ。ヘッドホンで聴くと色んな音が一度に聞こえてきて……少し苦しい。この犬の鳴き声が耳元にひっついて離れない感じは、毎年夏になると耳元でうるさい英霊のジイちゃんたちの愛国電波に感じが似てるよ。あいつら延々と語りかけてくるんだ。「あの戦争は正しかった、正しかった、正しかった、正しかった、正しかった、正し

さて、止まない雨が無いように獣のような性欲も年と共に消える。最近縁があってピンク映画を観る事が多いのだが、三十三の現在、やっと目を血走らせる事無く落ち着いて女の裸を観る事が出来るようになった。ただ、今もって映画マニアではないので演技がどうのだとか全体の構成がどうのなどという通ぶった見方はできない。役者の演技がどうしようもなく酷い映画もあるが、想像力を妄想で鍛えたせいか、どんなに酷い学芸会以下の演技を見ても、同時に別の空間で「監督やスタッフたちが撮りたかった理想の場面」を想像できるようになった。感動とは映画の完成度に比例するものかもしれないがそれが全てではないし、そうでなくても作り手の気合いは伝わるものだ。一流の監督が一流の脚本や演出、役者を集めて一流と呼ばれる作品を作ろうが、それは映画を観終わったあとで受ける感動とは別のものだと思う。人間の美しさや尊厳というのは、どんな情況にあってもあきらめずに常に限界までの努力を続けようとするその姿勢の中にあると考える今の俺にとって、ピンク映画は作り手たちの気合いがストレートに伝わり、爽やかな感動を呼ぶ「美しい」存在である。

「銀星倶楽部2　特集桃色映画天国1980~1994」1994年　ペヨトル工房発行

かった、正しかった、正しかった、正しかった、正しかった、正しかった、正しかった、正しかった、正しかった、正しかった、正しかった、正しかった、正しかった、正しかっ
た、正しかった、正しかった……」。
木村：はいはい分かりました。

3■オービタル：『オービタルⅡ』

木村：ハートノル兄弟のユニット、オービタルより。1曲目の「タイム・ビカムズ」なんか、ひとつの台詞が延々とループするんだけど、左右でシークエンスする時間が微妙に違うんで、最小公倍数が来るまでズレ続けるという趣向。
村崎：ああ、ああ。複数の声が間断なく押し寄せてくるところなんか、電波の感触を思い出させる部分もあるけど、それはどんな音楽でも見いだそうと思えばあるんだよ。これもそういう音……それ以上の感想はないなあ。
だいたい電波で聞こえる音って、こんなふうにCDに収録された曲のようにしっかりと長時間聞こえるわけじゃないんだよ。それこそ瞬間とか、ほんの何秒とか……また記憶がごっそりやってくる電波だと、何十日かその音を聞き続けた記憶が生まれたりするんで、何がなんだかわかんなくなっちゃう……それを教えてくれる電波とかも来るし、もうどれが本当の記憶か？　なんて考え出したら、きりがないんだよ。

木村：？
村崎：受信した電波の中に整然とした音楽が聞こえることも、たまにはあるけど、音楽＝電波じゃあないいってこと。要するにある種の音楽の中には、聴いてるうちに「音の連なり系」電波の受信を想起させるものもある、って位のこと。だからこのコーナーで取りあげたディスクと俺のコメントを読んで「ああ、電波が聞こえるってこんな感じかなぁ？」って朧ろげにでも連想してくれれば、それでいいんだよ、キムラさんよお。

＊テクノ篇
木村：まず最初に、昨今隆盛をきわめている「テクノ」ですが、ビートのキツいのは祭囃子みたいでちょっとアレですので、電子音が延々と連なるタイプ……いわゆるアンビエントとかトランスとか称されるものを数枚。

1■エイフェックス・ツイン：『アンビエント・ワークスvol.02』
木村：テクノ世界のモーツァルトことリチャード・D・ジェイムズの代表作です。彼は10代から電子楽器を自作し、起きてる時間の大半を作曲にあててる一種の電子音フリークです。『アンビエント・ワークス』は音色の快楽を追求したノンビートの楽曲が並んでいるんですが『vol.02』にいたっては「全部夢の中で作曲した」という説があるんですけど、なにせ本人に猛烈な虚言癖があるので、誰も本気にはしていないんですけど。

4■KLF:『CHILL OUT』

木村:ちょっと古いですが、チル・アウト・サウンドの古典ということで、ひとつ入れておきました。色んなサウンド・コラージュが入ってますし。

村崎:これはねえ、ウィリアム・バロウズの書いた詩のなかに出てくる「風に舞う銀紙遠い都市のすり切れた音」って感じっていえば、近いかなあ……電波ではどこかの時空の生活音みたいなのがときどき混信するんだけど、これはそのソフト版って感じ。もっとグジャグジャにくることが多くて、そういうのはとっても苦痛なんだよ。

＊ジャーマン・ロック篇

木村:では年代を遡って、今日のテクノ・サウンドのルーツともいわれている、70年代に栄えたジャーマン・エクスペリメンタルものをいくつかピックアップしましょう。ところでタンジェリン・ドリームとか、けっこう村崎さんもお聞きになってたとか……。

村崎:ああ、東京に出てきた頃に随分中古レコードとかで買ったんだ。でも全部売っぱらっちまったけどね。今聴いたら、只のニューエイジ・シンセ音楽で、さぞ退屈だろうなあ。

5■アシュ・ラ・テンペル:『ニューエイジ・オブ・アース』『インベンションズ・フォー・エレクトリック・ギター』

木村：1970年にギターのマニエル・ゴッチンクが（後出する）クラウス・シュルツェらと結成したバンドです。最初の頃はブルース色の濃い、即興的でヘヴィなサイケデリック・ロックだったんですが、ティモシ・リアリーとのセッションなどをへてメンバーが交替し、次第にゴッチンクのソロ・ユニットと化していって、この6枚目の『インベンションズ・フォー・エレクトリック・ギター』にいたっては、エレクトリック・ギターの音色を多重に重ね合わせ、微妙な音のうねりが延々と続くミニマムなテクスチャーで今日のトランス・テクノを先取りしたとも言われてるんですけど。

村崎：んー、これは音楽だなあ。音がグルグル回っていくところはちょっと電波っぽいけど……それでも規則正し過ぎるし、聞いてて気持ちがイイ。こんな気持ちイイ電波なんて、そうそう来ないんだ、実際にはね。

6■クラスター：『クラスターⅡ』

木村：69年にメビウス、レデリウス、そして（これも後出する）コンラッド・シュニッツラーの3人で結成されたユニットです。最初期は〝Kluster〟を名乗り、即興性あふれる現代音楽ふうのサウンドを鳴らしていたんですが、シュニッツラーの脱退した71年から〝Cluster〟と改名し、72年にドイツの誇る名物電子音プロデューサー、コニー・プランクを迎えて制作したのがこの『Cluster II』です。ジャケットも電波くさいでしょう

村崎：ううむ、このお星様キラキラはええなあ。

木村：でも、シンセとか電子楽器といわれるものはまだ全然使ってなくて、アナクロな発信機や変調機だけで作ったアルバムらしいです。ただループ音がグルグル重なって、えもいわれぬ音のモワレが展開していくんですが。
村崎：聞いてるとそのうち幽体離脱しそうだなあ……でもこれでもまだ音楽って感じだよね。音の連なりが、もうちょいデタラメだと電波っぽいんだけどねえ。

7■コンラッド・シュニッツラー：「うにゅうにゅ」
木村：クラスターの最初期やタンジェリン・ドリームのファースト『Electronic Meditation』に参加した人。電子音響を駆使したソロが結構凄くて、無機的かつドラッギーな電子音が堪能できます。過去のレア音源がここ数年の間に、フランスの現代音楽関係のレーベルから次々とCDで復刻されて聴けるようになりました。
村崎：なんか聞いているとね、自分が裏返っていくような感覚につつまれるんだよなあ。う～ん……何年前だったか、ある電波を受信した時、自分の身体がガラス細工のように硬直し、高い所から落とされてバラバラに砕けて深い闇の底へ落ちていくような感覚に陥ったことがあったんだけど、このCDを聴いててその時のことを思い出したよ。
　それは自分の身体が陶器みたいに脆くてスベスベの空洞になってしまう感覚だったんだけど、今考えると、自分の身体が陶器になったんじゃなくて、来た電波に自分の意識を持っていかれ、どこかの時空で机の上から落下した花瓶の中に、自分の意識が一瞬シンク

ロしちゃったのかもしれないな。
木村：はあ～。

8■クラウス・シュルツェ：『Black Dance』『Timewind』
木村：タンジェリン・ドリームやアシュ・ラ・テンペルの最初期メンバーの一人だったんですが、バンド脱退後、自宅で電子楽器による試行錯誤を繰り返して、シンセサイザー・ミュージックでソロデビューした、電子音楽界の巨人です。
村崎：いやあ、さすがはクラウス・シュルツ。シンセ音楽というと、ともすればスペーシーだったりニューエイジだったりBGM的な聴かれ方しかされないんだけど、シュルツェの場合、冷徹で呪術的な感覚が充満しているんだよ。このしつこく耳に貼りついて離れない感覚は、いかにも電波っぽいなあ。粘着質な感じが、いかにもソレらしい。タンジェリン・ドリームなんかより、ずうぅーっと電波っぽいよ。
　個人的には両方とも好きだけど、どっちかっていうと『Timewind』のほうが電波らしいな。物質の持つ固有の振動を音で表現したような雰囲気がある。こういうのは良く聞こえるんだ。水の中で聞く音って空気中よりも早いじゃない……そういう速さが電波なんだよ。
木村：わかったようなわからないような。

9■アンソニー・ムーア：『Pieces From Cloudland Ballroom』

木村：レコメン系のファンには、スラップ・ハッピーのメンバーとして知られるアンソニー・ムーアは、ファウストとの交友でも有名ですが、この1stソロでは特にA面一面を使って、一定和音を鳴らすピアノを背景に、3人の歌手が発声する呪文のような台詞を多重録音することで、微妙なズレやもつれを発生させ、混信状態にも近い調べが延々と続いてます。これはどうです？

村崎：ああああああ、こういう無意味な音って、けっこう電波にもあるよ！　バルタン星人の笑い声みたいな音も、たまに聞こえるんだけど……ぎゃはははははは、これはそれ以上に笑える！　身体じゅうの力が抜けて、肛◯も緩んで脱糞しそうだね。

木村：ちょっと止めてください。音楽聴いて脱糞する時は、トイレでしてくださいね。

村崎：けけけけけけ、なんかそういう脱糞音楽って感じじゃん（笑）。これはもう電波合格ですよ〜。この宇宙の中には、こんなおマヌケな旋律やリズムがあるんだよねえ。

＊プログレ篇

木村：ではジャーマン以外の電波っぽいロックを総ざらえしましょう……というと、ジャンル的には「プログレッシブ・ロック」というくくりが一番分かりやすいんでしょうか？　ところで村崎さんの愛聴してるバンドとか、ないんですか？　マイク・オールドフィールドとかサード・イヤー・バンドとか、どうです？

村崎：う〜ん、サード・イヤー・バンドはよく聴くんだけど、あんまり電波って感じじゃないんだよな。プリミティヴなサウンドを指向してるんだけど、やっぱり現代人がアタマで作った〝音〟って感じでしょ。案外右から左へと抜けていくんだよ……それだけ俺にとって自然な音（無理に解釈すれば電波）ってことかもしれないんだけど。

10■ピンク・フロイド：『狂◯（The Dark Side of the Moon）』

木村：ピンク・フロイドもけっこうお気に入りでは？

村崎：シド・バレットのことを電波の文脈で取りあげるのも何なんで、ここではさらっと流すとして、その名のズバリ！『狂◯（The Dark Side of the Moon）』のB面「ブレイン・ダメージ」の途中の笑い声、アレはいいぜえええ。

木村：あんな笑い声が、耳元で聞こえることがあるんですか（電波として）。

村崎：もっとエコーがかかってるけどね（笑）。なんかアソコ聴いているとさ、引きずられて発狂しそうになるんだ……もう20年以上も世界中の数千万人という若者が、サイケな気分でこの曲を聴いてきたわけでしょ。そうすると非科学的に考えれば、無意識層のピンク・フロイド・アーカイヴには、かなりの人間の思い入れや妄想がこの曲にひっついて蓄積されてるわけ。そのおかげで、今この曲を聴くと、そういう想念や妄想がもれなくオマケで付いてくるからたまんねえよ。

木村：それまた豊かな音楽体験ですねえ……。

11■キング・クリムゾン：『太陽と戦慄』

村崎：大御所ついでに言えば、キング・クリムゾンの『太陽と戦慄』。アレもクるぜ。

木村：ジェイミー・ミューアが暴れる「パート1」ですか？　アレはけっこうキますよね。

村崎：いやいや「パート1」はね、学校の先生に叱られて廊下に立たされた時のような緊張感が走るから（笑）、実はそんなに好きじゃない。オレのお気に入りは「パート2」の方。あれは凶暴になれる音楽だ。俺は因業鬼畜なので、ニューエイジ系の善人馬鹿どもと全く正反対の「暴力瞑想」ってのを時たまやるんだけど、これはそのときのBGMにちょうどいいんだ。これは自分の中の邪悪さと凶暴性を増幅させる瞑想で、日々の平穏な暮らしで脆弱になりがちな自分の精神にこれによってヤキを入れるんだ。

木村：『バクネヤング』の著者の松永豊和も、殺人シーンでは必ず掛けているって話ですよね。『エマニエル夫人』のサントラでもパクられてましたけど……って関係ないですか？

村崎：闘争本能を刺激する電波ってのもあってさ、「パート2」はそういう電波に近い音だね。

木村：フリップ&イーノの『イブニング・スター』とか、あの辺もちょっとだけ電波チックな気もしますけどね。

＊前衛、実験、ノイズ、ポップス、その他

木村：あと、フレンチ・ロックの重鎮でマグマのコバイア神話とか、今年めでたく来日を果たしたゴングの「ラジオ・グノーム・インヴィジブル（見えない電波の精）」とか、あの辺りの設定も、もう完全に電波なんでしょうけど、そっち方面深追いしていくと別の本になりそうなので、その他諸々のディスクを駆け足で聴いてきましょう。

12■クリスチャン・マークレイ：『More Encore』

木村：2台のレコード・プレーヤーで曲を間断なく繋げたりするのがDJミックスだとしたら、クリスチャン・マークレイの場合は純然たるターンテーブル・ミュージック。元のディスクを音源に、ターンテーブルで音楽を演奏してる感じでしょうか。

村崎：ラジオのチューニングが完全に同調するちょっと前の感じ……雑音まじりの人の声とか、そういうところがちょっと電波っぽいね。なかなかいいセン行ってるよ。ただしつこいようだけど、電波はもっと断片的で不規則な音で、ときどき一気にどどっとやって来るんだけど、まあまあこんな感じ。少し「高尚な芸術」って印象がするけど、それはオンガクなんだから仕方ないよね。

同じ電波の音でも「静かな雑音」ってのがあるんだよ。音自体は静かなんだけど、耐えがたくわずらわしい音ってのがね。そういう音を聞いている時は。何となく腹立たしく、

いつもより怒りっぽくなってる。この曲はそんな電波を思い出させてくれる……ただ、それでも「耳に優しい」というのは、しょせん音楽である証拠だよね。電波的混沌は非常によく現われているんだけど、それでもやっぱり音楽って感じ。

13■デヴィッド・リンチ：『イレイザーヘッド・オリジナル・サウンドトラック』

木村：じゃあ、その〝耐えがたくわずらわしい音〟っていうので持ってきましたノイズ系。とはいえこれは映画のサントラなんですけど……どうです？

村崎：うわあああああああ！　やめてくれえええええ……これは作品自体、もの凄くいたたまれない電波映画『イレイザーヘッド』のサントラじゃねえか。おい止めてくれ、聴きたくねえよ。カンベンしてくれ。この不快感は限りなく電波そのもの！　電波の音のイヤな部分がよくわかる音だよ。赤子の悲鳴はヤなんだよなあああ……もうこんなものは音楽じゃなくて音苦（おんく）だよ、音苦……オイオイ木村さん、何で頬に両手をあてて口開けてるんだ？　それはムンクだろうがあ！　ふざけんじゃねえええええ！（ビンタ）

木村：すいません、気配りが足りませんでした。

村崎：このリンチのサントラと、現代音楽家のシュニトケの曲は〝電波そのもの〟って俺は思ってるよ。それをな、「不快な音を連続して聴くとき、わたしたちは基本的にこの世界が苦痛に満ちたものであることを最確認できるのです」なあんてことを。しゃあしゃあとほざく奴がいたら、みんな壁際に並べてビンタだよ、ビンタ。

14■ハフラートリオ：『A Thirsty Fish』
木村：では、同じノイズ系でもちょっと趣きが違って〝やかまし一辺倒〟ではないのをひとつ……。
村崎：ほおおおお、これは……うん、今まで聞いた中では一番電波に近い音だなあ。「無意識の底に吹き荒れる風の音」とでも表現したくなる音だよね。
やっぱり電波の音って、ノイズに近いのが多いんだよ。これはその中でも、聴いてて苦痛でも快楽でもなくて、ノイズっぽいけどそれほどウルサくない……そういう音だよな。こういう音が頭の中で回ってる時って、わりと正常に思考できるんでまだ嬉しいんだよね。プツンプツンといいながら、静かに意識の底を流れる音楽って感じがいいなあ。いつもこういう音ならオレももう少し他人に親切なんだけどなあ。これとさっきのクラウス・シュルツェを同時にかけると、なかなか電波っぽいと思うけどね。

15■ギルバート・アートマン：『アーバンサックス２』
木村：フレンチ・ジャズロック系でちょっと毛色の変わったのを入れてみました。
村崎：んー。たった一人とり残された山の中で聞こえてくる、山自体の音って感じかな。ワァ～って湧きあがってじわじわと浸透してくるような感覚は、そういう自然の中で聴こえてくる電波に近いんだ。「山の音」ってやつかなあ……ちなみにこれは前にも言ったたん

だけど、物質はみんな独自の音を持ってるよ、ちょうど固有の振動数を持っているようにね。

16■セシル・テーラー・ユニット：『AKISAKILA』

木村：ここからはランダムに、人体実験します。まずはフリージャズ。

村崎：いや、いくら演奏がデタラメっぽく聞こえても、これはやっぱり音楽だなあ。電波ではこんなに整然とした感覚はしないもの。ラジオ放送の音が聞こえてくるような時に、たま~にジャズっぽいサウンドが聞こえてくる時はあるけど、それももっと断片的だしね。あああそうそう、たまに音それ自体が生き物のような奇妙な奴と遭遇することもあるよ。奴らは生きた音なんだ。身体が音で出来てる生命があっても別にイイけど、こんなこと感じてる俺は、やっぱりマトモじゃないんだろうな。

木村：でしょうねー。

17■ミュージカル・ボックス（オルゴールの音楽）『The Three Disc Synphonion』

村崎：うっ、これは……たまらねえええええええ……こういうムチャクチャな鐘の音がやかましく聞こえてくることも、けっこうあるんだよ。もっと何重にも重なった、狂○に満ちた鐘の音なんだけどね。キリスト教系の宗教電波のお誘いで来ることもあってとっても迷惑。

木村：こんな音が延々と聞こえたら、発◯しそうになりません？
村崎：まあ俺はとうに狂ってるからイイんだけどさ……曲のことでいえば、昔の奴らの音楽ほど、その曲のまわりに電波的なものがついている場合が多いんじゃないかな。中世の音楽とか何千年も前のエジプトの音楽とかさ……だって昔の奴らって今よりもずっと電波を身近に聴いていたと思うんだ。アタマの中に直接響いてくる音の連なりを、音楽で表現しようとした奴らもいたんじゃないかな。

18■メリーゴーランドの音楽
木村：♪ターリラーリラーン、ターリラーリラーン♪
村崎：こんなのが四六時中頭の中に聞こえてくるなら、それはそれで盆踊りと獅子舞とディズニーランドのパレードが同時に来たようで楽しいだろうな。さすがに俺は、こんなハッピーな音は聞こえてこないけどね……つまりこれは西洋の祭囃子みたいなもんじゃないの？　日本の祭囃子だったら、遠い波の音の合間に聞こえてくるようなノスタルジックな電波を受信することって、たまにあるんだけど、そんな情緒あふれる電波はほんとうにごく稀さ。

19■ペインキラー：『処女の臓物』
木村：あと〝はやいもの〟も聴きたいって、村崎さん言ってたんですけど、ハードコアも

のがあんまり用意できなかったんで、ジョン・ゾーンのペインキラーでも聴いてください。

村崎：うううううむ。はやいけど、これも単なる音楽だねえ……こーゆー悲鳴が聞こえることはよくあるから、別に感想はない。サックスが悲鳴のようにころがるところが、まあ電波といえば電波かなあ。

20■ビートルズ：『ホワイト・アルバム』所収「レボリューションNo.9」

木村：では最後に、ポピュラー音楽の最高峰、ビートルズの作品でありながら、きわめて暗黒な妄想にリンクする曲を掛けてみます。この「レボリューションNo.9」は、コンクリート・ミュージックのフォーマットを採用した、けっこうディープな楽曲です。

村崎：あああああああああああああ、いやいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ頭痛いいいいいいいい！　やめてくれ〜！

木村：（暴れる村崎をなだめすかし）いやいや大丈夫ですか？　そんなにキツいですか、コレ？

村崎：これはねー……聞き手の側からの思い入れや妄想でいくらでも意味を引き出せる音ってあるけど、これはその代表格だろうなあ。聞き手の精神状態次第で、どんな意味が汲み取れてもおかしくない。「ヨハネの黙示録」みたいなもの。ここには確実にそういう混沌がある……今日、聴いた中でも一番「電波的混沌」ってやつが強かったよ。さすがの

俺も全部は聴かなかったけど、ビートルズの暗黒面を垣間見たような気分だぜ。
木村：かのシャロン・テート殺しで知られるチャールズ・マンソンみたいに、ここから「世界最終戦争」の啓示を受ける奴もいましたからね。
村崎：全く正反対に、ここから聖なるものや高次の知性からの呼びかけを感じる奴だって、絶対いるさ。とにかく雑音の中からは、方法次第でどんな意味だって汲み取れるものだからな。それだってやりすぎると気が狂うぜ。だからね、俺が偉そうにいえることといったら、妄想電波とまったく同様で「どんな意味が音楽から聞こえたって不思議じゃないし、それに入れ込みすぎるとドツボにはまるから、あんまりマジに受け取るな」ってことぐらいさ。
木村：いやいや今日はどうもお疲れさまでした。帰ってエンヤの『ウォーターマーク』でも聴いておやすみください。

１９９７年頃　初出不明

EATER（イーター）インタビュー

「電波的ノイズ論」　元原稿　　　　村崎百郎

村崎　ノイズもねぇ、けっこう好きっていうか、聴いてたほうだと思うよ。若い頃はライブハウス・フリークでインディーズ系はわりと観に行ってたね。80年代当時に勤めてた製粉工場は一日に30トンくらい粉袋を移動するような重労働の現場でさ、そのかわり夕方には風呂入って帰れるのよ。いつも5時からフリーになっちゃうんで夜はついつい遊び回ってたなあ。給料が週末払いってのもシャブみたいなもんでさ、まとまったカネが貯まらなくてなかなか辞められないんだよね。カネがたまったらすぐ別の職場に移ろうと軽い気持ちで入ったんだけど、結局7年間ぐらいそこにいたよ。ずっとバイトのまんまでね。

俺って他人と一緒にいるとさ、なんかわかんねえけどすぐに軋轢が生じて、ちょっと気にくわねえとすぐブン殴っちゃうんだよ、はははははは。ほんとにねぇ、暴力セ◯クス依存症性っていうのがあるんだったら、俺はそれかなって感じで。ダメだよねえ、たいして理由もなく一方的に他人をブン殴るの大好きなんだ。「キレル」とかっていうんじゃないから、もう通常意識のまんまね、なんか気がついたらもう始まっちゃってんの。これがまたイイんだよ！　もしかしたらオンナよりもイイかもしんない。殴ってる時にすっごい快感っていうか、なんか目の前が真っ白っていうかね、物体のオーラが全部白く光輝いて見える。ちょっと時間が止まってるような感じでさ。セ◯クスとは全然違うんだけど、もの凄い快感があんのよ。そういうの好きでさ、人の殴りぐせってのがついちゃったんだなあ、ははは。でも俺がこうなったのは、小さい子供の頃から親父にブン殴られて育ったからだろーな。いや、ウチの親父は超がつくモノ凄い暴力親父でさ、何かっちゅうとすぐに

俺のこと思いきりブン殴るのよ。それも身体が後に4、5メートルふっ飛んじゃうぐらい激しくね。常識のあるフツーの親はとてもあんなに殴らない奴は動物と同じだ。そういう奴は殴ってわからせる」ってのが親父の言い草で当時はマジで怖くてさ「こいつがオイボレたらいつか殴り殺してやる」っていっつも思ってたね。まあ、そのおかげで殴られ慣れして喧嘩にも強くなれたんだけど、そういう育てられかたしたガキは人を殴ることもやっぱりなんとも思わなくなっちゃうんだよ。だからマトモな人間に育てたいならやっぱりガキはあまり激しく殴んないで育てた方がいいんじゃねえかと思うぜ。

そんなこんなで上京して仕事探しても、面接に行ったあたりですでに担当が気にくわなくて暴力沙汰を起こしちゃうんで困っちゃってさあ……接客業なんか絶対に無理だよね。客と目が合っただけで殴っちゃうんだもの。ウエイターやったって注文も取れないって、ははははは。それであんまり人と合わなくていい仕事がないかって探して、行ったのがその製粉工場だったんだ。あんまりしゃべんなくていい。ていうか、製粉機ってのは、ガーッと原料の粉を細かく砕くんだけど、飛行機が離陸するときみたいなモノ凄い音するんだ。ギ～～ィンってね。で、ブラジルから輸入してくる原料は安いけど粗悪で粉にまじって鉄のネジとかさぁ、とんでもねえモノが入ってんのよ。混入すると製粉機の歯が全部折れて、雷を四つ五つまとめて落としたような物凄いガガーッ！って鳴るんだよね。心臓が潰されそうなぐらいの酷い大音響なんだけど、それでもだんだん慣れちゃうから人間ってタ

フだよねえ。とてもパチンコ屋の比じゃないんだよ。そういう中で7年間位働いてたんだけど、そうなるともうね、音楽で、ホラいわゆるジャンルで言われてるようなノイズなんて、すんごい可愛くて、もうノイバウテンなんて五木の子守歌よ。「なんだこりゃ？　立派な音楽じゃねえかよ」みたいな感じでさあ、聞いてたら充分眠くなったよ。昔誰か言ってたけど「聞きながら眠れる音楽はいい音楽だ」って思うよ。そいで俺は工場じゃ他人と話したくないから、わざと製粉機の上に立って原料詰めの作業ばかりやるの。それは製粉工場の中でも一番うるさくてキツい、みんなの嫌がる仕事なんだけど、同僚と話さなくて済むからいいんだ。そうやって仕事で半ば強制的に、心や身体の調子のいい時も悪い時も延々と聞く大音響に比べれば音楽のノイズなんてどれも可愛いもんだよ。なんせ一日8時間を7年間だもんなあ……いやあ俺もよくやったよな。おかげでますます馬鹿に拍車がかかった気がするねえ、ははは。音楽の場合はいいんだよ、嫌になったらレコード回すの止めればいいんだからさ。好きな時に聞いて嫌になったら止められるのは音楽なんだって。聞きたくなくても、調子のいい時も悪い時も聞かなきゃなんない製粉機のギューン！って脳を削られるような騒音に比べれば音楽のノイズの暴力性なんかたかが知れてる。苦痛の度合いが全然違うって。

加えて『電波系』って本に書いた通り、俺はいつも幻聴聞いてるんだ。今もそうだけど。なもんだから、一緒に暮らした女みんなわかってんだけどさ、時々聞こえてくる声がタマんなくなって、「黙れェ〜！」「うるせ〜！」とか言って叫んだり発作起こしたりす

るのよ。もう警察にも何度も通報されてるしね。「もの凄い声でわめいてる住人がいる」って。で、大家から「今度やったら出てってもらう」とかさ、何度もそういう警告状来てるんだけど、本人が覚えてないから困るんだよね（笑）。

いやー、そういう頭だから逆に、うるさいのとうるさいのをぶつけて相殺って感じで、製粉の仕事してる時は、逆に凄く楽だったのよ。頭に聞こえてくる音を上回るような雑音が欲しかったんだよね。それが製粉機のもの凄い音、ギィーーーン！ってやつでね。いつもいつもネジが入って製粉機がぶち壊れるような音っていうのを、実はどっかで待ってたような気がする（笑）。製粉機ってのはこんなでっかい歯がいっぱい中に入ってて、凄い高速で回転するんだ。それが一瞬で全部バキバキバキバキって割れちゃうんだけどさ、なーんか「この世の終わり」の大当たりって感じでね（笑）。

で、工場の中は暑いし、環境すごい悪いんだ。夏の暑い日は、朝から40度越えてるんだけど、窓開けると粉が飛び散って、付近住民から苦情がくるっていうね（笑）。その工場は都内の某工場街にあったのよ。工場街っていうだけでもう街ごと最低に糞ダサイのよ。それでもねえ、底辺って言っちゃ悪いけど、底辺の中にもさらにヒエラルキーがあってさ。俺等の工場は実は、その工場街でも一番最低の存在だったのよ。昼休みにラーメン屋とか行くと店のババアに露骨に嫌な顔されたりとかさぁ、もう凄いの。銀行なんか行ったら大変だよ。俺らのこと見たらお客様係が猛ダッシュで飛んで来るんだからね。つくり笑顔で馬鹿ていねいに「お客様、何の御用ですか」とか言うんだけど、もう目が全然笑ってって

ねえの。「銀行なんて他にもいっぱいあんのに、なんでわざわざオレの店に来るんだ！このヘドロ野郎があ！」ってな感じよ（笑）。確かに俺らは頭から粉だらけで汚かったからねえ。その粉も吸湿性があって、すぐにグチャグチャになるんだ。だから梅雨時や夏なんかヘドロ人間が歩いてるようなもんでさぁ。そういう汚いカッコしてるとさ、自分を見る周りのやつ、歩いてすれ違う通行人たちがすげえ嫌な顔するかってのが良くわかる。いかに人が見てくれで人を判断するかっていうのが良く分かるのよ。

だからその工場街にとって、俺らの工場ってのは迷惑なノイズだったんだよね、やっぱり。隣の大きな磁石工場なんかさぁ、すごい楽しそうだったもの。男の子と女の子がいっぱいいてさぁ。休み時間に、テニスとかするんだよね。で、俺らの工場の方に転がってくる球を手にとって持ってってやるとさ、ろくに礼も言わずに汚いモノでも掴むみたいにして球ふんだくってくんだ。そういうの体験すると人間の本性ってのが分かるよね。汚いカッコして工場街歩いてる時に飛ばされる凄い冷たい視線でさ、町中から憎まれてるってのが分かるんだ。最下層の中のド最低。汚いし、うるさいし、粉を吸って体にいいことなんかないしね。一応労災保険かけてくれるけど老後の保証なんか何もないでしょ。俺ら従業員なんかゴミ屑扱いだよ。加えて社長はパチンコ屋で二百円分玉買ってもカウンターで「領収書くれ」って言うようなセコいドケチときたもんだ。山野一さんの漫画みたいに事故で指落とす人とか、足落とす人とか実際いたもんね。製粉機のとこにグッサリいくとかさ。機械止めて血だらけの粉といっしょに足首掘り出したりするの。はははは、もう大笑いだ

よ。確かに長時間製粉してると機械のなかからおいでおいでって呼ぶ声とか聞こえてくるし、わかっていてもついフラフラ手ェつっ込んでみたくなるもんなんだよ。悪性の電波なんだけどさあ。どうしようもねえ連中が手や足を失ってさらにどうしようもない未来を抱える。あまりにも馬鹿みたいに悲惨なんで同情なんかできねえって。そいつらの明日考えただけで暗く楽しい気分もぶち壊しだって。「これは見なかったコトにしよう」とかね。そういう中にいると、ホントに人間なんて大したことねえよなとか、上品とか人生ってなんですかって言いたくなるよ（笑）。人権って何ですかって思うけどさ、ほんとねえ、今から思うと、やっぱノイズだったんだよね、街にとっての俺等の存在なんて。ノイズになってみると、逆に見えてくることもあるっていうかさぁ、たまには汚いカッコしてヘドロ人間やってみると面白いよ。対応する人間の本性マル見えになるからさ。今もその時街中から蔑まれ疎まれていた自分ってのをやっぱり引きずってると思う。上品で知的な連中見る度に「どうせお前ら相手が汚かったら顔をしかめて態度変えるんだろ。それがお前らの限界だよ、上品なクズ野郎どもがあ！」っていつも思うよ。

そうやってヘドロ人間やってたせいか、キレイなものだけが好きだとか、見てくれの清潔さだけを愛するような事が大嫌いなんだ、俺は。多分、奇形に対する興味にもそういうところから来てると思うよ。別に目ェそむけちゃいけないとか真面目に思うだけじゃなくてさ、なんか存在感あるでしょ。身○者でもさ。そういうの好きだな。言葉でも詩でも音楽でも、強烈に存在感のあるものがすごい好きだよ。

村崎　仕事はすっごい重労働だった。経営者もそれはわかってて、残業の強制はあんまなかったね。だから午後5時過ぎには風呂入ってキレイになった状態で帰れるの。その当時としてはわりに高給だったなあ。それも週払い。いつも週末にちょっと金が入るわけよ。ヘドロ低能ゲス工員が週末に4万円位持ってるとやっぱ使っちゃうよね、普通はね。俺の場合は友達もいなくて、そのまま古本屋行くか、映画観に行くか、演劇観に行くか、ライブハウス行くかでライブハウス行くのが多かった。だってちょうど5時で終わったらさ、新宿ロフトも7時位から始まるから都合がいいじゃない。

優雅なサブカル生活だよねえ（笑）。そんなことやってっからいつまで経っても金たまんなかった（笑）。それで辞められなかった。俺は初めからこんなとこ一週間で辞めてやろうと思ってたよ。工場も汚いし、マスクするけど肺ん中粉だらけでしょっちゅうゲホゲホ咳が止まらないしさぁ。そういう場末の工場って、働きに来る奴らも掛け値なしでホントにド最低なんだ。バカすぎて天気の話しかできねえような奴らとかねえ。もう「真面目にやってれば、そのうちきっといいことがあるよ」なんて、お世辞でも言えねえような絶望的な個性持った奴ばっかし来てんのよ。それは暴力キ◯ガイの俺にしても同じなんだけどさ。どこの現場も満足に勤まらねえで流れてきて最後に着いたのがこの工場ってな感じの奴らばっかりだったな。まあ、大部分はそこも満足に勤められずにやっぱケツ割って逃げるんだけど。凄かったよ〜人間ってここまで落ちれるのかって感じでさあ。クズ人間の

◇

見本市だって。それでやんなっちゃったっていうかさ、すぐ辞めたかったんだけどねえ。ついつい、欲しい本があったりとか、行きたいライブがあるからさぁ、来週一杯我慢しようかって気になって行っちゃうんだよねえ。だけどとにかくうるさくてさ。まあだんだん慣れてくるんだけどねえ、頭の中の声よりはうるさくあってくれたおかげで、まあもったっていうかね。だからノイズなんかよりも俺の頭ん中に聞こえてくる音の方がよっぽど苦痛だよね。

そうそう、取材でクラブスカルとか何度か行って聞いたんだけど、今はもうジャパノイズって言って、日本のノイズが世界のノイズミュージックシーンをリードしてるんだってね、凄いよね。俺の友達もアムス行った時にさ、向こうのノイズマニアに「おお、君は日本人か、マサミ・アキタは僕にとってはキリマンジャロ・マウンテンのような存在だ!」って言われたんだって。秋田昌美さんって向こうでも人気があって尊敬されてるんだって。俺も秋田さんが川崎のチッタでやった鈴ヶ森刑場のライブが忘れられなくてね（笑）。面白かったよあれは。会場のまん中に鈴ヶ森刑場が出来ててさあ、そこで秋田さんがハリツケにした妊婦の腹裂いて、胎児（キューピー人形だった）を取り出すパフォーマンスやったの。あれはノイズっつうかオルタネイティヴって言うのかね。なんかあの辺の音は自分の頭ん中に聞こえてくる雑音に似てるんだけど、それとは全然違うもので、それでいいなあと思っちゃうんじゃないかな。

スターリンの場合は、ミチロウの詩が好きなんだ。かなり影響受けてると思う。歌はも

しかして下手なのかもしんないけどさ（笑）。ソロで弾き語りで歌ってる曲はみんな好きだよ。たまにライブも見に行くけど見る度に良くなってる気がする。

バンドについては言葉（歌の詞）が好きなバンドと、音で好きなバンドってのがあると思うのよ。オートモッドはきっと歌詞の世紀末的雰囲気が良くて好きだったと思うよ。別にさ、メッセージ性がなきゃだめだってわけじゃないんだけどさ、俺はけっこう言葉にこだわって音楽聞いちゃう方で、純粋に音だけ楽しんでるような聴き方ができないみたい。だから、最近の若い奴等の間で流行ってるような音は全然聴けないんだよね。

まあここ（フライング・ティーポット）通ってんのはやっぱプログレ好きだからなんだよね。俺は昔からキング・クリムゾンとピンク・フロイドがすごい好きでね。クリムゾンは小学校六年生位の時から聞いてんだ。ラジオで。日本のバンドは渋谷陽一の番組で外道聴いて好きになって、そのあと四人囃子やコスモス・ファクトリーとか知ってレコード買ってたよ。もう、すげぇ田舎だからね、自転車で一時間かけて16キロ離れた町のレコード屋に外道とか四人囃子の新譜とか注文するの。まわりの連中は吉田拓郎とかキャロル聞いてた時代だよ。あと頭脳警察。俺、鬼畜原稿書いてる時は、だいたいPANTAの歌聴いてるんだ。ああいうメッセージ性強いのがさあ、なんか好きなんだよね。メチャクチャ怒り感じるじゃない。ああいう感情、俺にないからかもしれないけど「R★E★D★」や「プラハの手紙」はいつも聴いてる。

だから俺、ユーミンとかサザンとかああいうの生理的に全然ダメっていうかね。もう死

んでくれって思うんだけどさ。誰かにとって心地よい音が、皆に心地よいわけじゃないだろう？　すげぇ暴力を喚起する音ってあるじゃない。サザンとかユーミンを聴くと無性に女を○したくなるとかさ、そういう奴らがいるっていうのが、俺の頭の中にくる電波で全部わかるんだ。まあ電波の言うことだから話半分なんだけどさ。そうするとサザンとやユーミンってのは、そういう電波犯罪の共犯者どころか首謀者なんだよね。俺の妄想かもしんないけどさ。〝因果〟ってあるじゃない。なにが結びついてどこへ行くかわかんない。おそらくね、ユーミンやサザンの音楽はそうとう暴力障害事件の元凶になってるぜ。まあこれは彼らに限ったことじゃなくて、北島三郎だって細川たかしだって、天童よしみにだって歌手全般にいえる問題（妄想）なんだけどさ。

俺、発作的にさ、サザンやユーミンの曲聴いて横にいる奴殴りつけたことあってさ。後で考えると気ィ狂ってると思うよね。ただ俺の場合はほら、気ィ狂ってるのが24時間みっちりじゃない。その部分で多少救われてるっていうかさ。ほかの皆もそうなんだけど、狂○と正常を隔てるものってのはあんまりなくてさ、要はたまたま近くに包丁があったかないかで、事件が起きるか起きないかなんだと思うのよ。例えばそういう電波系……電波来たりとかさ、シャブとかでテンパってる連中にとってはねえ、他人のなにげない言動がものすごい暴力を触発する契機になっちゃうの。例えばたまたま入った定食屋で、水持ってくんのを店員の姉ちゃんが忘れただけで、もう町中が俺を憎んでるような気分になるんだ。それでいたたまれなくなって帰りがけに通行人に殴りかかるの。信じられないかもし

れないけどテンパっててしばしばそういう妄想を持っちゃうんだよねえ。何が傷害事件を起こすトリガーになってるかなんて他人にはわかんねえから怖いんだよ。

ノイズだってそうだろ。音楽とノイズの明確な区別ってさ、もちろんそんなもの定義ないでしょ。俺にとってはもっの凄いノイズだもんね、サザンとかユーミンとかさぁ。なんつうのか……、思い出したよ小室！　小室だよ小室。小室。小室聞くとコギャル無性に殴りたくなるよね。あーゅーのはセットになってるよね、小室と宮台真司と女子高生って。まあ誰がどう考えても論理的に俺の方が絶対に正しくないってのはわかってんだけど、暴力ってそういうもんじゃないもんね。俺には増長しまくってる女子高生がノイズだよ『なまこじょしこうせい』って、こういう事態を予見して作られたんじゃねえのかな、どーでもいいけど。まあ、だからノイズって言われてる音楽ってさ、必ずしも俺にとってはノイズじゃなかったりするわけよ。むしろ不快だったり耳障りだったりっていう意味でノイズって言うとさ、サザンとかユーミンとか谷村とか、ああいうのがね、俺にとってのノイズだよなあ。オフコースとかねぇ、名前聞くだけで寒気してくるよね、はははは。ほんとにそういう意味で、ノイズ音楽ってジャンル分けすること自体、なんか違うよね。個人の内面世界ってのは、どれも全く全部違うんだから。そうそう、今まで歌聴いてマジでホントにムカついて殺意覚えたのが一曲だけあって、それが南佳孝の「スローなブギにしてくれ」なんだ。出だしの声聞くと今でもいても立ってもいられねえよ。南佳孝だけは機会があったらマジで○してえ。マサカリで思い切り脳天カチ割って、きん玉蹴り潰して死体の尻○

に大根ぶち込んでやりてえよ。あんなにムカつく歌、歌ってんだから当然だよな。俺ん中じゃ関東大震災級の地震があったらドサクサで○したい奴のベスト5位に入ってるよ。残念ながら顔も住所も知らねえんだけどよ、案外そのへんの道ですれ違ってたりしてなー（笑）。おい、これをたかが歌一曲ぐらいで冗談だろ？　なんて思うなよ。そもそも俺らキ○ガイ犯罪者の発想や犯行動機ってのは理不尽なモンなんだからな。動機がなけりゃ犯罪ができねえと思ったら大間違いだぞ。

◇

村崎　最近あんまり音楽聴かない。ちなみにね、今パチンコものの漫画の原作もやってるんだけど、タイトルが『S.P.K』っていうね（笑）、こじつけでスーパー・パチンコ・キングの略ってことにしてるけど、これはわかる連中しかわかんないよね（笑）。別の女性漫画誌で断続的に原作やってる『フィータス』っていうシリーズもジム・フィータスから取ってるんだけど古いかなあ（笑）。

あそうそう、もう一人すごい好きなアーチストがいてさ。原マスミがけっこう好きだったた。なんかすごいね、あの謙虚さっていうの、同時期にねカート・ヴォネガットの小説よく読んでたんだけどさ、俺の中じゃ両者が渾然一体となって「うーん」っていろいろ考えたけどね。ちょっと殊勝な気持ちになるっていうか。俺の解釈じゃ原マスミって優しい歌なんかちっとも歌ってないんだ。原マスミのどこが好きかっていうと、冷たいところがもの凄く好きなのよ。アレを優しい歌だとと思うのは個人の自由だけど、俺には歌詞の一つ

一つが心臓をえぐるナイフの刃先の冷たさだった。気色悪い優しい歌が多い中でそういう冷たさが気持ち良かったんだと思う。

当時（80年代中期）の原マスミはライブでもあんまり新曲歌わないで昔からの曲をくり返しいろんな歌い方で歌ってて、それが新鮮だった。それ見て既成のレディーメイドの商品音楽みたいなのに対して、疑問って言うかさ、ああ、〝音楽〟って定期的に新曲作ってレコードにして売って儲けるだけのものじゃないんだよなってしみじみ思ったね。ネイティヴ・アメリカンみたいにホラ、一人一人が自分で作った自分の歌を持っててさ、これから死んでく時に大声で歌う歌とか、いろんな状況に合わせて歌う歌をいろいろ持ってるって、いいなあと思うよ。

小さい頃読んだ『ファーブル昆虫記』のセミの項の話がね、すごい面白くてずっと心に残ってんだ。セミがなんで歌うのか、鳴くのかって。ファーブル一所懸命模索して実験とかするんだけど、結局わかんなくて、最後に、我々人間も嬉しい時に手たたいて喜んだり歌ったりするのと同じように、大した意味はないんだけど、セミは歌うことで生の喜びを謳歌しているんだろう、みたいな、ファーブルにしちゃあ全然明快じゃない結論だったのよ。でもそういうのって無意味にいいじゃん。金儲けるために作られた歌というのとは、違うじゃない。何でライブハウス通うようになったのか考えると、インディーズの連中ってさ、言いたいことがあって、歌いたいことがあって、これだけは命にかえても歌っておきたいことをマジで歌ってるような気ィしてさぁ。まあ純粋だってところに惚れたんじゃ

ないけれど、なんかフッと聴いてみたくなったんじゃないのかなあ。別にメッセージってロックのリズムの大音響で歌われなければダメだとかいうことじゃなくて、原マスミみたいに静かに淡々と歌われても入ってるものは入ってくるんだよね。別に新曲作らなくても同じ歌何百通り歌ったっていいんだし、ミュージシャンであり続ける必然性なんてのもないわけだからさ。でも今は原マスミほとんど聞かない。吉本ばななとセットになってから全く聞いてない（笑）。それはいいとか悪いとかそういうことじゃなくて、いまの俺が原マスミを聞いていたときの俺と別のところにいるからだと思う。同じ音楽を一生聞き続ける人生もあれば、そうじゃない人生もあるわけだよ（笑）。でも原マスミはいいよ。昔どこかのエロ本のコラムで誰かが「原マスミの歌は、乗り遅れてしまった銀河鉄道のようだ」と書いてたけど、いまからでも全然遅くないって（笑）。

そういうわけで、常に心にひっかかる音楽に興味があったわけよ。どっかでノイズみたいなもんを感じて。そうそう、自分にとってね、逆にノイバウテンよりも新鮮でノイジーだなあと思ったのがドゥルッティ・コラムだった。静かな中に物凄い激しさ感じたんだよね。俺にはあれは全然静かじゃない。ある意味でハードコア・パンク以上に激しいの。電波でくるのよ、あれ（笑）。ガーッと。何が静かで何が静かでないかっていうのも、俺の内部ではずいぶん違っててさ。もちろんパンクもいいセン行ってるのは行ってる。ガーゼとか好きで消毒ギグにも行ってたなあ。ああいう激しさとは別な激しさが、ドゥルッティ・コラムにはあるんだよね。あとロバート・ワイアットの詩なんかもすごい好きだ

よ。訳詩でしか読んでないけど、考えるよね。なんかすげー政治的な詩でさ、自分はカストロのために戦ってるんじゃない、自分等が勝ちたくて戦ってるんじゃない、今戦ってる敵ともみんなでいっしょに幸せになりたくて戦ってるんだ、みたいなさ。ひたすら人を害することしか考えない俺の鬼畜思考では考えられないすげーぇ歌だよね。単純に敵を憎んだりすんじゃなくてねぇ。ああいう気持ちってのはホントは大切なもんなんだろうと思うけど、鬼畜の俺には別に何の関係ないからね。でもまあ、善良な人々を不愉快にさせるためにはその正反対の情報も深く学ばなければならないワケよ。だから俺はガンジーやマザー・テレサのやったことに興味があって奴らについての本を読んでるんだ。

◇

村崎　今メディアで立ち回ってる村崎ってのはやっぱノイズはノイズだと思うよ。それは意図的にやってるし、超下品なのはホントだから。メディア上のオピニオンの連中ってみんなテメーだけは良く見られようってカッコつけてるじゃない。でもさ、「俺が最低だ」って威張る馬鹿は一人もいないじゃない。俺はとにかく偉そうにしてる奴と威張る奴が大嫌いで、そういう連中を馬鹿にするために、「へへへ、俺が一番馬鹿で下品なんだぜぇ」ってわざと威張って見せてるんだけどさぁ。何かの権威に寄りかかって威張る連中って、ホントはカラッポで自信がねえだけなんだろうと思うし、威張る奴見ると無性に殴りたくなるよ。とにかく何の分野でも威張る奴は全部偽物だと思って間違いない。自分への尊敬を強制する奴はハエの糞以下のクズだと思って間違いねえよ。

俺がキ○ガイなのにわりと冷静さ（？）を保ってられるのは、やっぱ自分は完全に正しくねえっていう自覚があるからだろ。そして俺がそのことに対して何の不安もない厚顔無恥なだけなんだよ。人間って動物の弱さは、ヘタに意識なんか持ってるから自分で正しいと信じてることしかできねえところだろう。特に今の日本てのはさ、戦後民主主義教育で、やっぱ人間は正しいことすんのが正しいってなことをみんなして思い込まされてるじゃない。俺はそういう悪性の洗脳から早いうちに抜けたんだよ。だから自分の信じてる正しいことしかできないなんていうのはバカの一つ覚えの弱さでしかねえよ。俺は思ってもいないことや信じてもいないことを平気で言ったり書いたりできるから鬼畜なんだ。そういう悪質な強さを持ってるのさ。

なんかね、電波いっぱい来てさ、頭おかしくなってると、時々俺、自分で自分の身体から離れるんだ。そうすると離人症っていうのかねえ、自分のことも他人ごとに思えてなーんかもうどうでもよくなるのよ。根底じゃ何でもどーだっていいんだって思ってると思うよ。俺は電波がうるさくやって来るから人には喜怒哀楽の感情のパターンは無数にあるんだなってわかってても、自分じゃほとんど実感できない。いろんな人間の感情がね頭の中に入ってくるんだけど、自分自身はやっぱ凄く冷静なんだ。感情があるフリはなんとかこれまでの人生経験でわかってて演じられるんだけど、実際なんにも感じないんだよホントは。俺、今まで目にゴミが入った以外さ、涙出たことないのよ。親父が死にかけた時に電車で帰る時も、悲しくもなんともなくてさぁ、ああ、めんどくせえなあ、どういう顔して

行けばいいのかなってそればかり考えてんの。やっぱさ、ちょっとどっか壊れてると思うよ。快、不快の感情は多少にはあるんだけどさ、どっかその奥でどうでもいいなと思ってるんだよね。リアリティ喪失してんのかもしんない。

でも人間てさ、そんな御大層なもんじゃないと思ってるのよ。人間ってそんな大事なもんかよとかさ、人権って何様だよとかさ。俺はとにかく命という点じゃ、虫けらも人間も同じだと思ってるからさ。虫コ○スのも人コロ○のも同じだよなって感じで。そういう意味でね、どっか深いところですごい不感症なのよ。何でもどうでもいいって思ってるだから、思ってないことも平気で書けるんだよ。その部分でね、俺は鬼畜ライターなんだよね。一つの刺激に対する反応がね、連鎖妄想っていうのかな、広すぎるくらいバーッと起きちゃうから、何かの事象に対しての感想が一つっていうことは全然ないのよ。いろんな奴のいろんな意見が一気にアタマの中でバーッと出るからさ。どれもそれなりに当ってそうでさ、だけどどうだっていいっていうのがある。どっか根底で全てをナメてかかってるんだと思うよ。ふざけきった現実的無立場ってやつ。

頭ん中でいろんな電波で聞こえて、日本全国とか世界中でこう思ってるヤツがいるとか、こういう事故があったとか、こんなふうに死んでいく人がいるとかさ、そういうのがバーッとわかるのよ。全部妄想だとは思うんだけど、俺はそういう電波で人が死ぬのも生まれるのも傷つくのも、もの凄くいっぱい見てきたし感じてきた。そういうのがもの凄くでたらめに大量にやって来るんだよ。聞きたくもないことや感じたくもないことをいつも

妄想で無数に体験してしてんのよ。そしたらやっぱり無感動になるよな。だから映画見て泣けるやつとか不思議なんだよねえ。俺は他人の痛みなんかまるで分からないし、分かりたいとも思わない誰よりも冷たい人間だよ。いや、人間っていうか鬼畜だよね。でも俺、基本的に人間嫌いだからそれでいいんだよ。ガキの頃から「早く人間をやめたい！」とかいっつも思ってたからなあ（笑）。

◇

村崎　世の中どんどん悪くなりゃあいいなあと思ってんだよね。ていうか、もうここまで酷くなったらさ、皆で努力したって良くなりっこないんだからさ、逆に時代を加速させて腐敗するならとことん腐敗するべきだと思う。その方向に向けて俺は加速剤の役割を果たしたい。この世の腐敗を進めるために活動してるんだ。「日本の文化を下品のどん底に叩き墜としてやる！」ってね。そのあとで何が生まれてくるかなんて知らないし知りたくもない。きっと子孫たちがうまくやってくれるだろう。

真実なんて一つじゃない。俺の中の電波世界では真実なんていくつも同時に存在するし、別に自分のやってることが正しくなくてもいいのよ。俺は自分の行為に正当性を求めなくても、なんの不安もない鬼畜なんだから。間違ったことでも、その時やりたきゃ絶対にやるよ。清く正しく生きようなんて微塵も考えたこともないからね。みんなもそのぐらい開き直ればもうちょっと世の中スッキリすんじゃないかと思うぜ。

和歌山に端を発した毒物混入事件、今全国で起こるでしょ。あれ全然不思議じゃないよ

ね。みんな周りに殺してやりたい奴なんかいくらでもいるんだよ。別にヒ素じゃなくったって、そのへんの洗剤とかそういうのでもいいんだ。確実に俺のこの行為でこいつの寿命縮んでるなと思えればそれで満足でね、毎日の生活にもハリができるのさ。

あとは依存心が嫌いだねえ。ことさら自分以外の何かに依存しようとする奴らも。宗教でもそうなんだけど、とにかく全面依存って態度が大嫌いなんだよね。例えば最近ニュース見てて不快に思うのはさ、Ｊリーグの横浜フリューゲルスの合併騒ぎでさ、サポーターとかいう連中が「俺の人生のすべてだったのに」って気○いみたいにワメいてるでしょう。アレ見てるとホントに何だこいつらはと思うのよ。よくもまあ自分以外の人やモノにそんなに自分の人生入れ込んだり賭けられるよなって、あきれちゃうね。ああ、よっぽどこいつら自分の人生つまんねえんだろうな、だったら今すぐシねよ○野郎と思うもんね。別にそんな連中どうでもいいけどよ、どうせ応援すんなら、自分の人生応援しろよとか思わない？　そんなに簡単に他者を尊敬したり期待したりするなって言いたくなるよ。

音楽のファンでもそういうのよくいるじゃない。お気に入りのミュージシャンがちょっと方向性を変えただけで「裏切りだ」とか言い出す奴とかさ。そういう連中には馬鹿いってんじゃねえよ、そんなに他者に期待すんなって言いたいよ。他人に期待したって、ロクなことなんかないじゃない。だから宗教もそうだけどさ、電波聞いてると分かるんだよ。宗教家なんかホントに皆ね、もっともらしいこと言うけど、全部嘘だって。霊だの霊言だのを電波でしょっちゅう見たり聞いたりしてる俺が言うんだから間違いねえけど、霊だの

死後の世界だのなんてものはどこにもねえって！　アレは単なる自意識過剰なキ○ガイどもの妄想だって！　いい加減、目ェ醒ませよ馬○。

簡単に他人なんかに依存するなよ。何かに依存してさ、それに自分の全人生かぶせて期待したりすんのやめろって。そういうの見てるとホントに嫌なのよ。そのＪリーグもさ、好きで入れ込むのわかるけど自分の人生まで賭けるなよな。自分の人生はやっぱり自分に賭けろよって。ていうか、もうちょっと利己的に、ちゃんと利己的になれよって思うよ。まあ、余計なお世話なんだけどさ。

教祖だの宗教家だのってのはみんな電波なんだよな。いい加減に付き合った方がいいんだよ。人なんか簡単に尊敬するなって言いたいよ。誰かを尊敬しかけたらさ、とりあえずそいつをブン殴ってしまえと。それで怒るような奴はそれまでっていうか、そんな偉いヤツっていないって。若い奴らに言いたいのは、やっぱさ、そう簡単に人に影響されるなってことなんだけど、世界の偉人伝とか、小さいうちにああいうの読んじゃうと、人間には偉い人間と偉くない人間といるように思うけどさ、そんなことねぇんだって。本性にたいした違いなんかねえって。だからそういう意味でさ、小学生ぐらいの早いうちに『噂の眞相』とか読んどくとさ、世の汚さってのがわかっていいと思うんだよね。アレ読んでると、生きてる人間なんかどいつもこいつもロクな奴がいねえってのが良くわかる。それでいいんだよ。今の学校教育の欠陥は、現実社会がどれだけ腐敗していて汚い奴らが偉そうにでかい面してるかっていう現実をまるで教えないで社会に放り出してるところだよな。

それはフェアじゃない。
　高尚だとか一流だとかって言葉が大っ嫌いなんだ、俺。人を一流とか二流とかに色分けする奴にロクなのはいねえよ。だからギャグで「俺こそが超一流のゲス人間である」とか言ってんの。こないだ逮捕された大蔵官僚のツラとか見たら、物凄い偉そうなゲス面だったじゃない。凄げえよなあ。どうやったら人間ああいう下卑たゲス面になれるのかなって思うもの。官僚連中って、ホントにどいつもこいつも人見下してすげえ自分が偉いんだって妄想持ってる馬鹿ばかりなんだな。「謙虚」って言葉知らねえんだろ。マスコミでもなんでも、権力周辺の連中ってのはやたら勘違いするんだよな、自分が一段も二段も偉くなったような妄想持っちゃうの。ちょっと思想書や哲学書読んで、自分がそういう本読まない連中よりも人間の質が上がったように勘違いして偉そうにするのと同じで、傍目にみるとホントに情けなくなるよ。
　ざけんなよ、たかが人間にヒエラルキーなんてあるわけねえだろ。もちろん努力する奴、してない奴の違いはあると思うけどな。高等だとか下等だとかそんなものねえって。だから威張る奴って嫌いなんだよな。一流大学だとかなんだとかって、そういうのにこだわり過ぎて、気ィ狂った奴とかいっぱい見てるんで、なら俺は最低でいいなと思ってる。
　俺はどっちかっていうと、好きなことやってるだけだよ。単に根が下品なだけ。だって俺は10歳の頃から下着泥棒を始めてアナ○オナ○ー歴27年目の、チ○ポが他人より太すぎるのが悩みの単なるドスケベで、初対面の女性に「趣味は？」って聞かれたら店中に響き

わたるような大声で「お〇んこです！」って言える痴性持った鬼畜だからね。だいたい恥ずかしいって感覚が俺あんまりないのよ。だってそんなに、他人のこと愛してないもの。他人のこと愛してないからさ、他人にどう思われようが気にならない。いちいち誰かの為に気ィ使うっていうのがさ、そいつ等の下僕に成り下がるような気がして嫌なのよ。だから俺はちょっと金貰ったらさ、そのへんチ〇ポ出して平気で歩けるよ。だってこの街の奴らなんか誰一人愛してないもん。俺は好きでも何でもない連中に何思われても全く気にならねえよ。なんでみんな他人の目気にすんだろ、ホントに。

やっぱ人に対しても物に対しても期待しないことだよね。裏切られて文句言うくらいだったらさ、最初から期待するなって。俺はどっかで、何も信じてないし、誰にも何にも期待していない。多分、全面的に何かを信仰しちゃうとか誰かを尊敬しちゃうってのはやっぱり思考停止だと思う。俺はアーチストとかミュージシャンとか好きな奴は好きなんだけど、そいつらにはそれ以上何も期待しない。たとえば好きなミュージシャンの場合は、そいつの歌聞いてりゃそれで充分で、会って話をしたいなんて全く思わない。裏切られるのが嫌だからとかそういうんじゃなくて、そもそも人間に興味がないだけなんだよ。

俺にとっては俺自身も充分他人でさ、自分の中に無数に存在する人格だけでも手に負えないくらい無数にいるんだよ。何人かの村崎は俺の知らないとこで知らない文書いてるし。実際書き上げた原稿でもさ、できあがって読んでみると、あきらかに俺が書いてないことが書いてあんだよ。覚えてねえんだよ。だからどーもね、自分自身に対しても信頼な

んかしてねえよ、俺は。自分が信じられないのに他人なんか信じられるかよってな気持ちはある。なんかなるようになるだろうみたいなのがあるんだけどさ。根拠なんかまるでねえよ。そもそも根拠なんか求めちゃいけないんだよな。好きにやれるときまで好きにやるだけだよ。そういう生き方もこの世では充分ノイズになるだろう。そう、俺は単に嫌がらせやってるだけだから（笑）。

おわり

１９９８年11月７日　江古田フライング・ティーポットで収録
完成原稿は「イーター６号」（１９９６年３月10日）＆「ＥＡＴＥＲ　９０ｓ　オルタナティブ・ロック・カルチャーの時代」（２０１２年９月28日）テレグラフ・ファクトリー発行に掲載

第3章　対談

第3章



対談

京極夏彦

特集＝怪談

対話　近代という膜が破れる時

京極夏彦＋村崎百郎

民話に潜む恐怖

村崎　京極さんが最初に心惹かれた怪談っていったい何ですか？　妖怪や民俗学へ傾倒していくきっかけになった「物語」というのがあるんだったら、それは怪談だろうという気がするんだけど。

京極　創作系の怪談も嫌いではなかったんですが、子供の頃からやはりフォークロア系というか、民話が好きだったもので。でも、子供向けの本に書かれている民話って、骨抜きになってますでしょ。

村崎　確かに今の「カチカチ山」には残酷さがない。

京極　お婆さんも食われないし（笑）。しかし再話形式の民話っていうのがあるんですよ。古老から採集した話をある程度忠実に再現する形式ですね。僕はそっちに食いついた。これはどこが違うのかというと、「心暖まる」部分というのは変わらないわけです。違いが出るのは「残酷さ」とか「不条理性」ですよね。そこではお婆さんが殺されて食われて、となる。まあ、緩い話に浸ってた子供にはショッキングですよ。そこから僕は民俗学に流れてしまったんだけど（笑）。中でもとりわけ僕は「座頭殺し」とか「六部殺し」

とかいう忌まわしい名の、差別と富の配分に関わる陰惨な語に心魅かれましてね。来訪者を殺害して富を強奪し、結果富貴を手に入れるという話ですね。まあ子供ですから、そうした話の背後にどのような民俗社会の意志があるのかまではわからないわけだけど、土俗的な匂いというか、胡散臭さというか、そうしたものを嗅ぎ取ったんですね。それは厳密には怪談ではないんだけれど、怪異志向のとば口にはなっていて。

村崎　それはいくつ位の頃ですか？

京極　それは小学校の低学年ですよ。そのあと、四年生くらいで柳田國男に移るんですね。

村崎　じゃあ、『遠野物語』に登場する断片的なエピソードの数々を一個ずつ読み味わって背後にあるものをいつまでもあれこれ考えたりしたんじゃないですか？　その物語の過去や未来まであれこれと。

京極　さあ、それは（笑）。ただ、例えば漱石なんか読んでても「夢十夜」の子供背負って歩く話ね。あれなんか好きなわけです。あれも六部殺しのヴァリエーションでしょ。あまり怖がらない子供だったんで、お化けが怖とかはまったくなかったんだけど、そう、その子供を背負ってて、いきなり昔の悪事を囁かれたりしたらと思うとね。ううん、怖いというより……変態なんですかね、僕は（笑）。

村崎　怖いんだけど、おそらくそれは快感でもあるんだろうな。月の煌々と照る夜に、背後から子供に「こんな夜だったね……」なんて言われると……（笑）。

京極　言われてみたい気もする（笑）。自分もガキのくせにね（笑）。そういうのが原点にあるんですよ。その系統の怪談話は、無類に好きでしたね。

近代という膜

村崎　でも、京極さんの心惹かれた話が「六部殺し」ってのは実に興味深いな。こじつけかもしれないけど、それは京極さんや俺の育った北海道という地域の環境や歴史に由来しているんじゃないかな。たとえば俺達の住んでいた土地には、そこかしこに日本語では全く意味の通じない、わけの分からない「シャコタン」や「ニセコ」なんていうアイヌ語の地名があったじゃない。子供だって馬鹿じゃないんだから、親や教科書に教えられなくたって、そういう環境にいれば、うすうす気がつくよ。「開拓者」なんて言うと聞こえはいいけど、俺達はみんな「アイヌから無理やり土地を奪った略奪者の子孫」なんだってね。だからいま北海道に住んでいる奴は全員が「六部殺し」のようなもんで、幼い京極さんはそういうことを敏感に嗅ぎ取っていたのかも知れないな。

京極　僕は土地に執着のないたちなんですが、それでも土地の呪力というのは感じますね。こういうと「オカルト系」の話として受け取られがちですが、血液型性格判断とか、そういう愚かで差別的な人間分類と違って、例えば村崎さんのおっしゃるような県民性というのはあると思う。親の代、そのまた親の代と、無意識領域での情報伝達は行われているる。知らないうちに経験学習しているわけで、俺は違うといっても始まらないようなとこ

ろはある。

村崎　「侵略」なんだからだろうけど、祖先はアイヌ民族に対して相当に酷いことをやっている。そういう「六部殺し」の恩恵に預かってのうのうとして暮らしている俺達は、ある意味で生まれながらの鬼畜なんだろうな。俺は鬼畜だから罪悪感のカケラも持ってないけど。

京極　その昔はね、アイヌは野蛮だという、偏見差別を植え付けるような酷い時代というのがあったわけですよ。文字がない、法律が残酷だ、熊を殺したりするなんて。それは文化でしょう。文化が違うというだけです。アイヌの人達にしてみれば「倭人は首狩り族だ」ということになる。事実、当時日本人は打ち首を平気でしてた部族なわけだから。倭人みたいに残酷なことはできないと、アイヌ側は思ったはずですよ。それがある時期を境に、人権を認めてやろうとかいい出すわけですね。何だか不遜な話ですよ。で、ぺろんと人権主義の皮を一枚被せて、それだけで済ませようとするわけ。僕らが子供の頃は、もうアイヌは蛮族だとかいってはいなかったけれども、皮一枚めくるとそういう歴史があったわけです。僕らの安穏とした暮らしは、実に薄皮一枚の上に乗っかってたんですね。ちょっと皮が破けると、そこに落ちちゃうわけです。落ちないように落ちないように、バランスをとって生きている。見えなくたって、そうしたことはわかっちゃうわけですよ。

村崎　俺もアイヌ語の地名に囲まれて育ちながら思ってましたよ。別の意味がこの自然の背後に横たわっているんじゃないかってね。

京極　決して絵空事ではない。でも、北海道は分かりやすい図式があるけれど、それ以外の場所もじつは同じなんですよ。

村崎　今生きていて安穏としているのは、結局勝った奴等の子孫だからなあ。

京極　近代以前と近代の間に、膜が張ってて、その膜を破るまいとしてみんな生きていたわけで、実際破れなかったわけだけど、破るまいという気持は足の裏からひしひしと伝わって来ていると思うんですね。破れた時は怖いときですよ。

村崎　そう、心のささえが崩れてしまう。

京極　破れた時は本当に怖い。近代人にとって怖いのは、自分の出自を知ることですよね。でもそれは、知ってしまえばそれまでで、本当は別に怖いことではない。

村崎　そう、別にどうってことないんだよね。「自分はこの世界にとって特別でもご大層な存在でもない」ってのを素直にわかればいいだけの話でしょう。

京極　まさにその通りでしょうね。しかし、見えないわからないというのは、不安でもある。不安は回避したい。だから理屈をいろいろと考えるわけです。つまり、薄皮の中を覗かずに想像することはする。これが皮の下を覗きたい欲求になる。確かめたいんですね。それで、確かめると駄目になっちゃったりして（笑）。先程の六部殺しだって、異人である六部を殺害して金品を奪い富貴を得る、という部分は、その後の祟り、つまり没落や死の理由づけとして用意された部分なんですね。六部なり座頭なり、被害者は酷い目に遭うんだけど、その結果としてもたらされる加害者の幸福は長く続かない。あるいは続かないん

じゃないか、という不安の下に続いているわけです。あまり幸福じゃないな（笑）。

村崎　別に被害者の救済にはならないんだけど、その話を聞く第三者が「ああ、正義は守られるんだ」って納得してちょっと救われたような気になる話だね。

「因」の欠けた「果」

京極　でもですね、これを因果応報の話として捉えちゃうと、たいして面白くないんですよ。昔悪いことをした、だから酷い目に遭った、じゃ、バランスシートみたいに釣り合いが取れているでしょう。それでは現実的ではない。寓話ですね。現実にはそんな釣り合いのとれたことはないわけで（笑）。僕が思うに六部殺しの怪しい魅力というのはですね、そういうところにはない。これね、例えば濡れ衣だったらどうでしょう。金持ちは六部なんか殺してない。でも、今の裕福の理由はそういう、誰にもいえない悪事があったからなんだと、周りが信じるメンタリティね。加害者が個人じゃない場合は共同体がそういう忌まわしい秘密を共有するメンタリティ。これがいいのね。一方で、そうなると没落の理由というのもなくなっちゃうわけでしょう。因果関係の「因」がなかったとしたら、「果」がいきなり訪れる。これが恐怖です。幸福も不幸も人の手では自由にならないと知らされたときに恐怖は来ますね。だからここでは「異人殺し」というのはあったかなかったか実はわからないこと、つまり薄皮の下のことなんですね。で、それを「遭った」としてしまうネガティヴなメンタリティというのが、不安の正体を詮索する行為ですよ。で、そうし

たことと実は無関係に。幸福や不幸、「死」というものが訪れるというのが現実の恐怖。因果は多く逆転してるものなんです。「四谷怪談」だって伊右衛門がお岩を苛め殺して報いで死んだという図式で見れば、単なる勧善懲悪でしょう。悪いことしたから死んだ——じゃねえ。

村崎　人間は、ほっときゃいつかは必ず死ぬからね。

京極　いい人も死ぬし（笑）。南北の戯曲はそうした図式が怖いわけじゃないんですね。一方でその原型のひとつである「四谷雑言集」なんてのは結構とんでもない話で、伊右衛門はいい人でもないけど、それ程悪くもないんですね。酷い女房を貰ったおかげで子々孫々まで酷い目に遭う話で。これ、読みようによっては因果の「因」が欠落してるんです。そのせいか実話として語られて、当時の江戸の人達は面白がって巷でわいわいと噂した。まあ実話ではないんだけれども、「実話として」というところが肝心ですよ。ワイドショー的人気ですよね。

村崎　なるほど、自分に関係のない祟り話は、大きくて怖ければ怖い程、無責任に楽しいですよねえ。

京極　そうそう。だから僕の中では怪談の基準というのは確固としてあるわけです。因果関係を説明することに執心している作品は、幽霊が出ようが何が出ようが怪談ではない。「因」をすぱっと切っちゃってるものは怪談なんですね。世の中なんでも原因求めるでしょう。「因」が欠けてるって現代人には不安なんでしょうね。

村崎　理由付けが必要なんだな。例の神戸の猟奇殺人事件に起こったメディアを上げての「動機探し」を見てても、いかに皆が「人間の行動には全て残らず絶対に明確な理由がある。なければ嘘だ！」って思い込んでいるかが良くわかるよ。何かそれらしい理由がないと納得できない。これも近代の病というか。

京極　酷い目に合ったやつがいたとしても、そいつが昔悪いことをしていたとなると、みんな安心しますね。

村崎　いい人じゃダメなんだな。

京極　いい人であれば「悲劇」にしちゃうんですね。悲劇的なテイストで固めるれば納得する。別に何でもない普通の人が犯罪を犯したり、殺されちゃったりする不条理を受け入れたくないという土壌があるんでしょう。文学作品だって、最近はその辺を意識してわかり易く書かないと駄作だといわれる（笑）。「怪談」というジャンルだけは、唯一放りっぱなしでいいんですよ。というか放ってくれないと怪談と呼びたくない（笑）。例えば「牡丹灯篭」ってあるでしょう。あれは中国伝来の古典怪談ですが、最近のやつは駄目なんですね。あれは幽霊に好かれた男が生気吸い取られて死んじゃうだけの話なんだけど、最近のものはお露と新三郎の「生死を越えた純愛」ね（笑）。そういう枠組みを作る。それで隣に悪人夫婦が住んでいるんだけど、まあこれは小悪党なんですが、これがお札を剥がす役なんですね。それをやっつけちゃうんですね。コロス。札を剥がすのは幽霊にとっちゃ味方じゃないか（笑）。でも悪人は殺しちゃう。で、新三郎は愛のために死ぬ。こん

なの怪談じゃないですよ。まあお露新三郎が恋仲だったというのは円朝の頃からそうなんですが。これはいくらいとしい女でも死んでしまえば理屈なんか通じない、という怖さですよ。新三郎は悪いことしてないのに殺されちゃうわけでしょう。好きだというだけで殺されちゃかなわない。だから怖いのね。その点、ラフカディオ・ハーンの「牡丹灯籠」は上手いんですね。悪人はのうのうと生き延びるし、最後に高僧が、「こりゃ悪い因果だったんだ」と斬って捨てる（笑）。原因に基づいた事件が起きて、万人が納得するような結末があったんじゃ怪談じゃないでしょう。

村崎　共同体内部の倫理や道徳を安定させるための話になっちゃってるのは、ちょっと、イヤだな。語り伝えられる話ってもっと血生臭かったり、理不尽だったり、意味不明だったりするんじゃないのかね。

京極　そうなんですよね。グラグラっとさせてもらわないとねえ（笑）。

人間は何をやってもいい

村崎　人間も二〇年ぐらい生きてりゃ、世の中のことなんてだいたいわかってくるじゃない。因果応報っていうけど、良いことをしたからといって、必ずしも良いことがかえってくるわけでもないし、悪いことをしてもそのままのうのうと富を築いて長生きする奴もいる。この世は実は結構理不尽で、運がいい時は何をやってもいいし、悪い時は悪いんだと。だけど、そういう考えを野放しにしてはいけないという思想が、日本は特に太平洋戦

争に負けてから妙に根付いてる。「我々は正義と平和と民主主義を愛し、常に正しく生きなければならない」っていう思考的足かせがはめられてるのを感じるけど、そんなのどこにも根拠無いでしょ、はっきり言って。敗戦してなきゃ絶対に反省なんかしてないぜ。

京極　善悪の基準だってその頃できてますよね。少女売〇や犯罪の低年齢化が問題視されてるけど、日本は元々低年齢層の性交渉は当たり前だった国です。婚姻制度だって道徳観念だって武家の作法でしょ。今や一億総中流じゃなくて、総武家ですよ（笑）。昔そうじゃなかったから今もいいだろうなんて馬鹿なことはいいませんが、少なくとも今引かれている基準が絶対的なものではないということはわかる。人間、基準がないと生きていけないのも事実だけれど、誰かが引いた基準から逸脱するかどうかを絶対的価値判断として採用するのはいかがなものか。だから基準を疑うような、自分の根幹を揺るがすような大変は必要ですよね。優れた怪談や幻想文学は、時に社会と切れてそこを疑わせてくれるでしょう。

村崎　やっぱり、今は「正義は必ず勝つ」的な、倫理や道徳心を育てるような物語にあふれ過ぎてるよね。そんな中で、怪談だけはそういうのを意図していないという部分で興味深い。異界との接点というか、この世の裂け目を見るような思いにさせてくれるから。

京極　そうですね。多分道徳や倫理って水やって育つものではないんですよね。打ち壊してみせて、どうだっていったときに、俺はそれは嫌だから倫理観を持とう、と思うのはわかるんだけど、こうするべきだ、これが正しいと、栄養剤を与えたり水を与えたりして

も、絶対育たない。
村崎　説得力もない。
京極　何にもないんですよ。それだと何が悪いの、ということになってしまう。人間なんか何やったっていいんですよ。本当は。
村崎　それに気づくと、クラっとくるでしょ。
京極　本当は何やったっていいんだけど、できないんです。何かの理由でできない。その理由をちゃんと考えれば、バランスは保てるんだけど、ただ「しちゃいけない」、としか思ってないと、駄目なんですね。
村崎　俺みたいに裏でコソコソやるっていう手もあるしな（笑）。
京極　まずいなあ（笑）。でもラディカルに考えればそれは正しい。誰にも知られなくて、誰にも迷惑かけなければ、何やったっていいはずよ。迷惑かけても、相手が納得していれば構わないわけだし。
村崎　強者が勝って弱者が負ける残酷な倫理みたいなもの、残酷な真実があるじゃないですか。それを考えると何が正義だ、っていう感じだよ。命ってレヴェルで考えれば、俺らが食ってるのは魚も野菜も米の一粒一粒もみんな命なんだし、それを奪ってのうのうと生きてんだから正義もクソもあったもんじゃない。容れ物が違うだけで、命って点で考えれば一緒なんだ、俺らはみんな殺戮者なんだよ。生きることはコロスことなんだから、きれいごとなんか言えやしないぜ。

京極　そう、言えない。でもきれいごとを言っていてもらわないといけない人も、中にはいるんですけどね。でもきれいごとだけで世の中全部済ませるのはいけない。怪談が今骨抜きになっているのは、怪談すらもきれいごとでおさめようとする風潮が出てきているからのような気がする。そこが僕はどうも納得いかない。

「噂」の真相

村崎　最近巷に流通している都市の怪談というか「トイレの花子さん」、ああいうのはどうですか?

京極　「花子さん」は、僕が子供の頃からありましたよね。「赤マント」とか……。

村崎　便所にいると、後ろから「赤いマントを着せましょか、青いマントを着せましょか」と声がして、「赤いマント」ならナイフが飛んできてグッサリ刺されて、血が流れて赤いマントを着ているような状態になって死んじゃうという話ね。

京極　子供の頃に小樽に住んでいた時、近所の公園のトイレの周りを三回まわって「花子さん」と呼ぶと、「はーい」と誰もいないのに返事が返ってくるという噂があった。三〇年近く前から「花子さん」の話はあるんですね。「花子さん」は実は伝統妖怪なんですよ。

「口裂け女」の話も伝わって来ましたね、マスメディアで騒がれるずっと前に。当時は情報の伝播が今ほどクリアじゃないから、田舎の高校にいると、どこでいつ発生した

話かなんて知らないから、いきなり事実としてポンと来るわけです。高校一年の頃だったかなあ、どこどこの橋に口が裂けた女がいて、なんて噂が流れてくる。「ええーっ⁈」なんて驚いて。だから、マスメディアを経由する前の、リアルタイムの口裂け女の話ですよね。時速何キロなんて、そんな速い女はいないだろう、なんて真面目に考えてたというか(笑)。

村崎　口裂け女の話は不思議なことに、かなり僻地だった俺の村にもちゃんと来たよ。俺ら田舎のガキはニュースや新聞や週刊誌なんてほとんど見ないのにね。

京極　マスコミで取り上げられたのはだいぶ後のことでしょう。そうなってしまうと、もうギャグです。実話として語られることはないですね。でも生だとね。札幌の病院から逃げたなんてまことしやかな話になる。

村崎　「小樽の××病院」とか具体的な名前をあげて。

京極　そうそう、手術に失敗して口が裂けたんだ、とかね。でも、実話として語られているから、怖さとしては、そんな無頼な人がうろうろしてて、包丁で切りつけられたらいやだなあくらいの怖さなのね。

村崎　物理的な怖さね。

京極　暴行を受けたくない、的な怖さ。やっぱり都市伝説って、「妖怪」的な不条理を抱えこんでいるものなんです。無意識領域を意識領域で理解する方法として妖怪はあるわけで、絶対にわからないところがあるべきなんです。何でそんなものがいるのかまでは踏み

込めない。ところが「花子さん」を含めて最近のやつは、同じ現象なのに、幽霊だとか、かわいそうな目にあった女の子だ、とか、そういう話がくっついてしまう。

村崎　いじめで死んだ、とか。物語がついちゃうんだな。

京極　お母さんが気がふれてコロしちゃった、とかね。最近の子供達はそういわないと納得しない、と、大人達が思っているんです。これは大人が悪い！　理由なんかつけなくたって全然平気なんです。トイレに紫ババアがでるぞ、怖いぞ、それだけで充分子供は怖がるはずだし実際その方が怖いんです。紫ババアは亡くなった校長先生で……とやっちゃうのは、大人の理屈なんです。「紫ババア」は本来、中国のかわや神「紫婆紙（しこしん）」の系譜なんです。何千年と伝わって今に到るわけですが、そんなこと説明する必要はないわけで、紫ババアが便所にいた、怖い、って話が生きていることが大事なんです。それに変な意味付けをしちゃうのが大人なんですね。その意味付けは、不思議な現象を解明しようという意図ではなくて、大人としての「道徳」なんですね。理由のわからないことを喧伝することはよろしくないことである、という。

村崎　ガキに聞かせる話には道徳入れないとイカン、という意識が働くのかね。

京極　そういう押し付けが容易にわかる。それは本当に余計なお世話です。子供達から闇の領域を奪おうとする行為に他ならない。最近の都市伝説、学校の怪談とか、流行るのはかまわないけれど、大人が口出すな、と言いたいんです。大人が口出してマスメディアに載せて、それで広めている。その際まったく手を入れないならいいんですけど、かなりね

じ曲げられちゃってるでしょ。子供は馬鹿じゃないからわかるんですよ。「つくりだな」って。つくりがわかっちゃったら怖くないでしょ。単に、さっきの口裂け女みたいに「いるんだぞ」という話だけだったら、信じざるをえない状況ってあるから、怖いんですね。

村崎　俺の田舎の方でもそういう理不尽な話が出回ってましたね。俺は電波系だから、見えたり聞こえたりはあるんだけど、それは自分自身の妄想だというのは小さい時からうすうすわかっているわけ。いろんな宗教者やオカルト関係者も、全ては妄想なんだって気づいているはずだけど、多分商売上黙ってるんだろうな。

口にしてはいけない名前

村崎　俺はガキの頃に、もの凄く殺伐とした海沿いの寒村に住んでいたんですよ。そこは子供が面白半分に小猫をスキーのストックで、グサグサ串刺しにして振り回して遊ぶのが日常茶飯事というナイスな土地柄で常に気が抜けなかった（笑）。そしてこれは、俺がよそ者だったからあまり核心に触れる話はしてもらえなかったんだけど、小学校五年生位の時に、ある日川の上流で遊んでいると、ふいに場の雰囲気がさあっと変わったんだ。それとともに誰ともなく「あれが出るから帰ろう」というの。夕暮れの黄昏時なんだけど、明らかにみんなの様子が尋常じゃないから気になって、しつこく聞いたんですよ。そしたらようやく話してくれたけど、「あれ」は物理的な生物ではなく、超自然的な存在らしく、

その名前を口に出しても駄目、人に話しても駄目。話すと、話をした者にも聞いた者にも祟るんだって言うんですよ。そして、誰誰の父さんがポックリ死んだり、どこどこの家の誰それがこの間病気で死んだのはみんな「あれ」の祟りのせいだったんだ、ってボソボソと言うんです。それはこういう名前なんですけどね（と、村崎氏、紙にひらがなで字を書き出す）。京極さん、聞いたことあります？

京極　ほおおーっ。

村崎　これを畏れているんですよ。口伝えで聞いたのでこの言葉にどういう漢字があはまるかはわからなかったんだけど、後年、土地柄からこれじゃないかと思って（と言って漢字を書き出す）。多分、意味は×××の×だと思います。その村ではその頃実際、毎年×で人が死ぬことが多くて、同級生で、親が家の裏庭で襲われて死んだ奴もいましたね。

京極　これは貴重な……。

村崎　一〇年近くその土地にいて、地元の連中からその話を聞いたことはそれ一度きりなんだけど、夕暮れに一瞬でさあっと場の雰囲気が変わって、みんな何かに憑かれたようになってしまったのが印象的で、俺を怖がらせようとみんなで申し合わせたとは、とても思えなかった……そして、それ以後はそういう雰囲気になったこともないんですよ。何だったんだろう、あれは……。

京極　それは、……怖い、ですよね。

村崎　これを信じなかったり悪口を言ったりするのは当然いけないないし、誰もいない所で

一人で口に出すのもいけないというんですよ。
村崎　書くのはいいの？
京極　さあ、どうなんでしょう、これで何か祟りがあったらごめんなさいです（笑）。
割とあるんですね。
京極　似た話はあるんですよ。要するに、語ることが禁忌になっている祟りというのは、
村崎　我々人間にしても、そもそもこいつらがいるところに勝手にやってきて住んでいるんだからしようがないですよね。不思議なことに土地の連中も、ずーっと彼らを恨んだり憎んだりということは無いんですよ。やっぱり彼らがいる所に近づいて行く方が悪いっていう感じで、事故ってわけじゃないけど……普通同胞が殺されたらもっと恨むハズなんだけど……。
京極　でもそれはね、怖いんです。怨みを遺した人の幽霊が出るとか、そんな他人事よりずっと怖いのね。これは最初の「六部殺し」と同根なんですよ。共同体がうしろめたさを共有していて、それが禁忌という像で表現されてる。共同体の外の人には全くわからないのね。何で祟られるのかわからないけど、口にすると来るわけでしょ。厄災は意識の外側に押し出されていて、不可知なところから来るわでしょう。恐怖の対象物を隠蔽する不安ですね。「因」が伏せられている。薄皮の下に何があるのか、語っちゃ駄目なんです。情念では測り得ない怖さですよね。
村崎　祟る理由がわからないのが怖いなあ。

京極　オレは毎日いいことして生きているからそんな目に会わないよ、とは言えなくなる。そういう人でも、口にしちゃったら死んじゃうかも知れない。聞きたくないわけです。聞きたくないから聞かないし、よけい語られない。ただ怖い。
戦後は、死を隠蔽する方向で来ているでしょ、死体を隠せ、見せるな。死んだらすぐに隠しちゃう。だから子供達は死ぬことの意味がよく分からない。そんな中でみんな生きている。猫に残虐なことをすると、それこそ神戸の事件みたいにね、騒がれちゃうわけですよ。その昔は、当たり前の所では当たり前だったはずですよ。小さい猫を小さい子供がコ○ス、大きい熊を大人が撃つ、行為として何が違うのかきちんと説明できる識者はいないですよ。食うか食わないかの問題はありますけど。そういう中で死と直面して生きている人たちというのは、ずっといて、今はそれがまったく隠されている。まったく分からないわけで、それで結局、猫の首を絞めたら死ぬってことがわからなくなっちゃう。
村崎　「壊れちゃった」って、まるで玩具が壊れたみたいに言うんですよね。
京極　神戸の事件でも、「壊した」って言い方しているわけですよね。「実験だ」という言い方もしている。人は首を絞めたら死ぬってことは、当然知ってるはずなんだけど、概念として知ってるだけで「わかってる」わけではない。だから、やってみなければわからない、という話になる。
村崎　リアリティを感じないんですよね。
京極　リアリズムはないですね。自分達の食ってるモノが元生き物で、殺して捌いてとい

うリアリズムは失われている。ただ、そういう人達も、自分がやられたら痛いというのはわかるわけだし、死んだら生き返らないというのもわかっているはずですよ。人は利口ですから、それくらいはわかる。でも、じゃあ殺して何が悪いの、自分だって死んでもいいし、となるともう一般の倫理なんかじゃカバーできないでしょ。人間死んだらおしまいだ、というような台詞に、もう説得力はない。何が欠けてるのか。倫理や道徳ではないですよね。恐怖心でしょう。死と直面した時のまがまがしさ、それを忌避したい気持ちね。奇麗事ですまない、そうした不可知で不可避なものへの畏怖心が欠けている。それはね、怪談の中にはまだあるわけですよ。

身近に忍び寄る差別

京極　僕が最近厭なのは、あのプロファイリングね（笑）。昔は犯罪の動機なんて、金が欲しいとかね、卑俗なものだっただけれども、あれ以降サイコな傾向がでてきた。で、例えば幼児期に虐待を受けたことに犯罪の根を求めたりするでしょう。そういう例はあるんだけど、全部がそうじゃない。でも、今は一般的にそうだと思われてるでしょう。心理学者が、幼児期に受けたトラウマが人格形成に影響を与えてとか、尤もらしいことを並べるから、みんな納得してしまうわけ。じゃあ幼児虐待ってなんなんだと。何が虐待に相当するのか、そんなのケースバイケースですよね。無根拠な能力開発幼児教育だって虐待のうちですよ。そもそも人格とはなんだと規定できないのに、知った顔でそういうことというで

しょ。今や深刻な差別ですよね。

村崎　キ○ガイに対する差別や勘違いは、幻聴幻視という明確な症状がある電波系の俺も常々感じるね。奴らは正常人の発想と基準で犯罪を見るから分からなくなる。よく「ホラービデオを観て人が殺したくなる」なんていうけど、それは大きな間違いだって。俺達キ○ガイ犯罪者は、「そもそも人が殺したいんだけど、いろいろ障害もあっておいそれとできないから、その代償としてホラービデオを見て我慢している」んだよ。別にホラービデオなんか一本もなくたって、やるときはやるんだよ。

京極　異常と正常の線って、絶対引けないわけですよね。線を引くとしたら、ものすごく太い線を引かなきゃいけない。

村崎　あと、キ○ガイっていうのは皆が恒常的に異常なわけじゃないんですよ。俺も時々発作を起こして夜中に絶叫して付近の住民に警察に通報されるレヴェルのキ○ガイなんだけど、頭の中に響く声に我慢がならないとか、何か別のものに操られているようなキ○ガイ状態が二四時間ずっと続くわけじゃなくて、俺の場合は幸運なことに、一瞬ポンと現れたりとか、二、三分続くだけだとか、二時間ぐらい続くけど暴れ出さない程度のものだとか、発作を起こしている時間の方が少ない方なんですよ。だから文章も書けるんと思うんですけど。

京極　でもそれ、一般の人もそうなんですよね。その瞬間を自分で認めたくないというだけなんですね。

村崎　いわば長さの問題だけでさ、殺人鬼だって、一日二四時間一秒残らず人を殺し続けているわけではないんだものね。

京極　殺人淫楽症ってあるでしょう。これは一番深刻な性的倒錯ですよね。でも性的倒錯というのは程度の差があるだけで、人間であれば誰にでもある。愛がなければ性行為ができないというのが、まず動物の生殖行為としては倒錯してるわけだから（笑）。で、例えばそうした深刻な症状の人でも、二四時間発情しているわけではない。発情していないときは普通の人ですよね。

村崎　京極さんが『魍魎の匣』で書いていた「通り物」じゃないんだけど、俺は今から一五年以上前の若い頃、たまに夜道で通り魔になってたんですよ。まるで江戸川乱歩の「目羅博士の犯罪」みたいな話なんだけど、月がぽっかり頭上に浮かんで静まりかえった夜の住宅地の路地に、ぽんと一本、蛍光灯の光があって、そのあたりの光景が何ともいえずいい雰囲気なんです。それをぼんやりと見ていると、通りの向こうから酔っぱらいがひょこひょこ歩いてくる。すると、俺にはそいつが何かそこにある調和をもの凄く乱しているような気がして、一瞬不快な気分になる。その瞬間に、そいつが俺に殴り倒されていて、街灯の下に転がってる姿が一枚の絵画のようにバシッと見えちゃうんです。同時にこいつは俺に殴り倒されて血だらけで路上に転がるのが自然で、そのためにわざわざ歩いてきたんだって……根拠もないのにごく自然にそう思えるんです。それで気がついたら、本当にそういう光景になっているんですよ。若い頃にはそういうことが良くありましたねえ。暴力

衝動を正当化する幻想だったんでしょうけど。

京極　それはでも、実は頻繁に起きていることでもあるんですね。するしないというのはもう、紙一重なわけです。例えばですね、今ナンパするという言葉は別に一般的に通用する言葉だけれども、考えてみれば路上で見ず知らずの異性に性交しましょうと持ちかける恥知らずな行為なわけですよ（笑）。社会がある程度容認しているからみんな平気でするわけでしょう。暴行傷害が罪になるのは法律があるからです。ナンパ防止法ができれば声をかけても有罪。内部的な動機としてはそう差がない。道を歩いている人間に性的衝動を覚えるのだって異常といえば異常でしょう。よく冗談で下半身は人格が別だとかいう人がいるけれど、これが一緒だったら大変なことになる（笑）。どんな人だって人格スイッチして暮らしてるんだし。

村崎　でも、そういう衝動を我慢しないで、積極的に壊れちゃう快楽ってあるじゃないですか。不謹慎な話ですけどね。

京極　だからどこでスイッチするかの差なんですね。会議中の会社重役と性行為中の脂ぎった親父はどこかでスイッチしてる。品行方正な紳士だってしかるべき状況になれば切り替わる。しかるべき状況というのがどういう状況なのか、条件が違うだけです。条件は人それぞれですから。一概に悪いとはいえないですよ。社会と折り合いがつけられるのかどうかというだけの問題で、それ以上の内面にまで誹謗する権利は誰にもありませんよね。

村崎　京極さんが書いていたように、やはり条件が揃うとスイッチは切り替わり易くなりますね。

夏は怪談？

村崎　この蒸し暑い日本の夏で涼をとるのには、怪談ってやっぱり優れたシステムって言えば優れたシステムですよね。お金もかからないし（笑）。

本来「恐怖」というのは、外敵から身の危険を感じたときに、危険信号として認識する感情じゃないですか。石器時代には、それを感じないと命に関わる感情だったのに、人間が進歩して文明を築き社会を作り、一日生き抜くことがそんなに難しくない時代になると、今度は余裕で「恐怖」することに「快感」を感じる。命を繋ぐための危険信号だった感情を、ひまつぶしの娯楽に利用して怪談話が流行りはじめるというのは、安定したってことなんですかね。

京極　確かに、怪談は安定期に流行りますね。まあ、「談」ですから、あくまで伝聞、人の話でね。さっきの村崎さんの話、あれは直接おのれの身に厄災が降りかかる、ダイレクトな恐怖でしょう。それと所謂「談」は違いますよ。村崎さんの話を僕は怪談として聞くわけだけれど、当事者である当時の村崎さんにとっては怪談じゃなかったわけでしょう。だから怪談のツボというのは根源的な、生物としての恐怖とは少しシフトしたところにあるんですね。例えば、死の恐怖というのはあるんだけど、怪談を聞く側は「死なない」が

基本ですよ。殺してやると刃物を振り翳されれば怖いけど、怪談じゃないでしょう（笑）。生死と少し離れてね、おのれの存在が危うくなるというか、自意識とか自我とか、そういうものが怪しくなる、脅かされるのが怪談の恐怖ですよ。実際に死と直面させることなく、そうした思いをさせてくれるという高度な文化ですね。それから夏ね。夏流行るというのは、これは演出ですよ。皮膚感覚なんだと思う。夏は肌を露出するでしょう。視覚聴覚以外のね、言語情報以外に、怪談の皮膚感覚ってあるように思うなあ。

村崎　なるほど。

京極　意味のレヴェルで覆えない何かですね。風がふっと吹いてひゅっと冷える感じ。バンジー・ジャンプとかジェットコースターとかね、あれだって何が面白いのかわからんでしょう（笑）。でも面白いんですよ。概念的ならぬ肉体的な死を、無意識のうちに感じてる。ああ俺は概念のお化けではなく肉のある動物だと感じる瞬間があるんですね。だから怪談の皮膚感覚というのはそれなんですよ。無防備に下界に皮膚を晒す、そこから感じる意味ではなく、肉体レヴェルの不安ね。夏は怪談です（笑）。

村崎　あらゆる生命が躍動して燃焼している季節だものね。おそらく関ヶ原の合戦前夜に野営地で怪談話はされなかったろうな。大阪城落城前夜に、しんみりと「そこで打ち首になった奴が……」なんて言ってもねえ、明日死ぬかもしれないのに（笑）。だから怪談って、死から遠ざかった平和な場所と安定した意識のもとで初めて成り立つものなんですね。

京極　何もいないはずのところから声がする、というのは、俺はここにいるのにいないのかも知れない、というのとすぐに裏返しになる。自分では理解不能な現象がダイレクトに、ただ現象として現れ、それをそのまま受け取るというのは、自分の存在にガンと当たってくるわけですね。それを防御しようという気持ちがあると、理由をつけたり合理化するわけですよね。

村崎　そういうのは、慣れると怖くないどころか、だんだん頭に来るよ（笑）。俺は常時聞こえているでしょ、妄想だってわかってるからこそだんだん腹立ってくるんです。これを前世の因果のせいにされるとやっぱりたまらなく腹が立つよ。

京極　そうですね。安易な意味づけはまず恐怖を殺してしまう。もう一方では文化を殺してしまう。さっきの「六部殺し」と根を同じくするものに「座敷わらし」があって、座敷わらしは今では可愛らしい妖怪ですよね。でも実は差別用語なんですよ。「あいつは座敷わらしや」って。村八分や、もっとひどい蔑みの言葉だったんだそうです。それがいまやアイドル妖怪みたいになっている。しかも子供の姿をしていることになって、随分前に亡くなった家の守り神のお子さんです、という。

村崎　嘘つくなよ！

京極　そう、バカヤローなんですね。何で死んだ子供が富の配分をするんだ（笑）。座敷わらしは、出ていくことで初めて存在がわかるわけです。つまりその家が傾いた時に機能する。裏返しの貧乏神なんですね。富をもたらすものじゃないんです。没落の象徴だった

んです。それがアイドル妖怪になっちゃうと、そこから先に考えが行かないんですね。「あれは子供の霊なんでしょ」でおしまい。こっちは説明のしようがないんですよ。そこで怖さが剥奪されるのと同じように、文化的な装置が破壊されちゃうんですね。座敷わらしという装置を導入することによって、共同体バランスをとっていた。差別する方とされる方に、約款があったんです。「没落したのは座敷わらしのせいで俺のせいじゃない」と言えるし、「あいつが昔儲かっていたのは座敷わらしがいたせいだ」と納得もできる。うまくやっていくための知恵でもあったんですね。

それは犯罪などの行為の抑止力にもなるし、救済装置にもなる。今は糾弾するだけですけれど、許してやることもできるわけですよ。つまり「そいつのせいではない」という癒しや許しも含んでいた。逆に懲罰を与えたり、「それは村の中ではまずいだろう」という掟みたいなものでもあったわけですね。そういうものを全部捨てて「幽霊だ」というのは、救済や懲罰を含めて有機的に絡み合っていた共同体のシステムを全部捨てることになる。これが各地で行われてしまっている。

誰のための人権?

村崎　俺が一〇年前に工場で出会ったある同僚は、同年代で地方の旧家の出身だったそうなんだけど、彼の母親は彼の一つ上の長男を産むまで馬小屋で寝泊まりさせられてたんだって。これは江戸時代の話じゃなくて、昭和三〇年代中期の話だよ。

京極　はああーそれは……。

村崎　その家は、大平洋戦争の終戦に喜んだ婆さんが、爺さんに日本刀で切り殺されそうになったという家なんだけど、凄いよね。長男を産むまでの嫁は人間とは認めず、馬と同等の家畜扱い……京極さんの『姑獲鳥の夏』に出てくる女性差別は、遠い昔の話じゃないんだよね。

京極　そういうことが日常茶飯事だった時代は、つい目の前なんですよね。そういうことを踏まえてこの平和な時代があるんだとみんな知っているはずなんだけど、なかったことにしちゃうんですよ。パチンと切っちゃう。なかったことにして、空いた空間に変な倫理に基づいた因果の因をはめるのは、腹が立ちますね。

村崎　正義や人権が守られるなら、あとは誰の何がどう傷つこうがかまわないというのは本末転倒だよ。

京極　人権は確かに護られるべきものなんでしょう。ただ、その権利を持っている主体について、外部の者が画一的な規制まで加えられるものかどうか。例えば人権派の人はどんな人間の権利も護ってくれるわけではないですよね。他人の権利を侵害する権利まではもちろん護らないわけで。まあ、線は引かれてる。でもですね、それは「人格」は恒久的なものであるという幻想や、「個人」は確固としたものであるという願望、そうしたものが前提となって線引きされている場合が多い。尊重されるべき「個人」はそれ程確固としたものではないし、「人格」は秒刻みで変わるものですよ。護って欲しければ立派な人間に

なれという脅迫になっちゃ本末転倒ですね。

村崎　やっぱり人権自体が目標になるのは、おかしいと思うな。持ってる権利がみんな同じならそれで幸せだろうってのは、何だか人間の幸せをナメてるような感じがする。

京極　ほんとそうですよ。高飛車に出て、「お前は少し劣ってるから俺が助けてやろう」と。それを「余計なお世話だ」という奴の気持ちが分からないのかというのはある。

村崎　暇潰しに人権に燃える奴らや趣味で正義に燃える奴らには、頼むから黙っててくれって言いたいよ。

京極　線引きも含めて疑問はたくさんあるんです。でも人権を掲げられると、そんな疑問は中々言えないんですよね。

村崎　異議をとなえた方が悪者になるだけだしね。俺みたいに、己自身の行為に何の正当性も求めない鬼畜には、ことさら他人の人権話に首をつっ込む人権派の連中は「自分は真に公正で公平な正しいモラルを持った人間なんだ」ということを他人に認めさせたくて、それを声高に主張してるとしか思えない。他人の不幸をダシに、自己満足のために自分のいい子ちゃん度をアピールするなんて、何てさもしい連中だ。

妄想に取り憑かれた人々

村崎　怪談噺やホラー小説を読んでいると、恐怖もいろいろあるよね。自分の命が自分以外の別のものに脅かされる「生命にかかわる恐怖」を基本的な「第一次恐怖」だとする

と、自分の愛する恋人や家族が不慮の事故や突然の病気で死んだり、誰かに殺されたりしたらどうしようという怖れや、自分が長年かけて築いた富が天災で失われたり、誰かの陰謀で自分の社会的的な地位がいつか突然損なわれてしまうかもしれないなどという恐怖は、文明が発達して社会が複雑化していく過程で生じる新たな恐怖といえるじゃないかな。たとえばスティーヴン・キングの『ペット・セメタリー』は主人公が家族への強い愛を持っているがゆえに崩壊してしまう姿が描かれているし、『痩せゆく男』のラストもそうですよね。あれは愛という不可解な感情を持ってしまったがゆえにはまってしまう恐怖であって、ある意味では贅沢な恐怖といえると思う。

京極　二次的、三次的な恐怖ですよね。

村崎　恐怖にも工業や商業に匹敵する第二次恐怖や第三次恐怖があると（笑）。

京極　恐怖の一つに、コミュニケーション不全というのがありますね。

村崎　以前、たまたま気の〇った風俗嬢とつきあった時に、そういう恐怖が明確に見えたことがありましたよ。彼女は見栄と体裁が死ぬよりも大事で、そのためならどんな嘘でも平気でつくし、自分が嘘をついていることも忘れてしまう。彼女は別の誰かにカッコつける為に、「こういう嘘にしておいてね」と共謀したはずの俺にまで、最終的にはその嘘を真実だってムキになって言い張るんですよ。その娘は三〇歳近くになっても、東大に入ってその後アイドルデビューして人気者にならなければ自分の人生はないという妄想に取り憑かれていて、毎年受験をくり返すんだけど、その割に試験の勉強も歌の勉強もほとんど

していない。何をしていたかというと、東大に入ってアイドルデビューが実現したら、芸能マスコミの連中はきっと自分が風俗嬢をしていた過去をほじくり出して書き立てるだろう、その釈明記者会見でどうやって言い訳をするか、それぱっかりを考えているんですよ。そういうのを傍から見ると……。

京極　まあ……恐怖ですねえ。

村崎　とにかく可哀相すぎるんだ。別の夢を持てばいいんだけど、本人はそれ以外の幸せは一切考えられない。想像力の欠如と言ってしまえばそれまでなんだけど……。

京極　でもそれは極端な例だというだけで、日常茶飯事、誰の中でも行われていることですよね。

村崎　レヴェルが違うだけで、学歴や地位や名誉や出世にこだわる奴はとことんこだわっているよね。

京極　そう。そういう不安はみんな抱えているし、だから自分で自分に嘘をつくし、ひとに対して嘘つくし、記憶を書き換えてもいる。小さいところではいくらでもやっているんですよね。大きくなってくると目立っちゃうだけの話で。だからその方が異常とはいえませんね。

村崎　彼女の場合は、分裂病とかではなく人格障害だったみたいで、電話で誰かに自分の身の上を相談している時は安定しているんだけど、それが終わるとすぐまた別の誰かに相談して、さっぱり問題を解決しようとしない。常に誰かと会話していないと我慢

できないんですよ。それも「今の私はこれこれこういう境遇だけど本当は……」と、一方的に自分の説明に終始する。環境のせいだか何だか知らないけど、学歴にもやたらこだわって「大学に行かない人の中にも立派な方がいるというのは頭では理解できるんです。でも、実際問題として世間はそうは見ませんものね」ってマジな顔して言うんですよ。彼女にとっては学歴というのも富の一つなんでしょうかね。

京極　自分というものが確固としたものであるという証明が欲しいんでしょうね。

村崎　近代的な自我なんて昔の日本では別に必要じゃなかったですよね。個々の人間なんてそんなご大層なもんじゃないでしょう。たとえばガキが死んだって、七歳くらいまでだと戒名もつかなかったし。

京極　昔は、子供は人間とは見なされなかったんですよ。徳川時代は。

村崎　赤子や子どもの死亡率も高かったからね。戸籍を持つようになったのも明治以降でしょ。

京極　七歳以下の子供に霊性を認めたのは、祐天上人なんですね。彼は子供を失った母親を救済するためにそのシステムを考えたんです。それで大奥の女性の人気を得て、大本山のトップまで昇ったんです。慧眼だったと思いますよ。水子だって祐天上人が発明したんです。

村崎　発明した人まで分かっているのに、みんな水子供養に何万円って払ってるんだ（笑）。

京極　それは一概に指弾できないですね。何万円も払うのは払いたいという人の気持ちの問題だから。

村崎　完全に商売になってるね。

京極　ううん。やってる方の意識がね、違うんですよね。神社でお金が高いと、余計に祓ってくれるのかと聞く奴いるけど、あれは安くても高くてもやることは同じなんですよ。

村崎　葬式だって生きてる人間のためにやるものだものね。

京極　死んだ人間には関係ないですからね。

村崎　ところで、あの世の話、してもいい（笑）？　俺はこの妄想、大嫌いなんだ。怪談に限らず、あらゆる霊感商法や宗教サギや宗教そのものでも、それを成立させるためにある最も根本的な共通了解事項は「死後の世界はある」という妄想だよね。祟りや呪いもこれなしには説得力を持たない。だけどね、これは俺だけの感覚かも知れないけれど、長年電波系やって幻聴や幻視を体験して感じるのは、やっぱり「死後の世界はない」ってことなんだ。人は死んだらそれまでで、その先には永遠に続く虚無しかない、というのが真に根源的な恐怖であって、「死後の世界や霊の祟り」なんてのは、それを認識するのに耐えられない脆弱な人間の捏造した、偽の恐怖でしかないと思う。

死後の世界はない！

理由のわからない漠然とした不安というのは、ものすごく不安なんだけど、そこに「全てはフリーメーソンの陰謀」なんていえば説明をつけると、「ああ、そうだったのか！」と納得できる。

京極　「フリーメーソンの陰謀」っていうのは、あれは出来の悪い妖怪と同じですよね。

村崎　ありもしないものは、忘れない限りそれ以上消しようがない。安心して不安になれるわけだ（笑）。

京極　名づけて形を与えて、こいつのせいだ、と言えばまあ安心するって、これは妖怪の仕組みと同じね。で、死後の世界となると、まあ、ある無いでいえば無いに決まってる。けど、これは二重底になってると思うんですね。それは「無い」という形で「ある」。あるとか無いとかいう理屈の「外側」にあるんだという。理屈の内側にあっちゃ嘘なんです。無いんだから。ところがですね、近代以降自我に対する固執が異様に高まったでしょう。個人の尊厳、個人の主張、個人主義、私が望む、私が決める。私が、私が……っていう時代になって、その「私」が死んだ後に無くなっちゃうのは嫌だと、こうなった。死後も意識は保存されるとどうしても思いたいのね。そう思ってないと個が保てないというか、そういう風潮が、死後の世界を理屈の内側に作り上げちゃうのね。

村崎　なんか、人間ってそこまで特別で御大層なものかよって思うんですけどね。

京極　人間は結局毛の薄いケダモノですけど、妙な個人主義の徹底みたいなものがあって、それがかえって前時代的な死後の世界観の形式の確定に拍車をかけたんじゃないか

な。漠然と、「死んだ後に俺はどっかに行っちゃうんだよ」と思っているのはいいんですよね。でもそれが「私は死んだらどうなる」と「私は」になっちゃうでしょ。浄土宗が地獄の概念を恐ろしげなものとして見せた時も、その「地獄絵図」に描かれた地獄の様相って、当時の最下層レヴェルあるいは社会の外側の人々の生活の姿なんですよ。釜で煮てふいごで吹いて。生皮剥いでというのはそういう姿をバアーっと見せるわけね。お前はそれより下になるんだぞーっと怖がらせるわけです。それはすごい怖いわけですよ。これは、自尊心も含めた第一級レヴェルも二級三級レヴェルもまとめて含めた恐怖だったんですよね。これは怖い、ものすごい倫理規制になったと思いますよ。それが寓話化されて、どんどんわけわからなくなって行って、一方で儒教的な倫理観が人を締め付け始めるでしょ、少しずつ狂ってきてしまった。

宗教者の責任もあるでしょうね。死後の世界なんて無いんだけど、無いのを承知で「あるんだぞ、お前ら」と言える自信、言って説得力が持てる宗教者がいなくなっちゃった。既成宗教が近代化する際に、合理主義と寄り添う形で、そうした部分をオカルトとして切り捨てざるを得なかったんですね。結局、自信を持って言えることは何かというと、その辺のお婆さんでも言えるような「そんなことしちゃいかんぞ」みたいな、道徳的指導ね（笑）。これは弱体化しますよ。

村崎　お金集めのためのシステムにしかなってないよね。

京極　やっぱりみんな、気持ちのどこかでそういうのを求めているわけね。そこにバチッ

とはまっちゃうと、倫理規制みたいなものは働かなくなっちゃって、でも結果エゴイズムの発露として機能しているから、なんだかなーと。

村崎　そういえばこの間、『怪』でカスタネダの記事が出ていたけど、俺がカスタネダのシリーズで一番好きなのは、六巻目か七巻目で、呪術師のドンファンがカスタネダに、「まさかと思うけどお前、神がいるなんてマジで信じてるんじゃないだろうな？」って言うところなんだよね。文明人が呪術師にあいうことを言われるのは痛快だよな。俺はあれが一番好きでさ（笑）。案外と彼らの方が冷静で、どこかでわかっていながら夢を見ているところがあるのかもしれない。スウェーデンボルグなんかは膨大なエネルギーそそいで壮大なヒエラルキーを持った霊界の構造作ったりしてさ、あれ見るとよっぽどさみしかったんだろうなって思うよ（笑）。

京極　そうそう、一生懸命考えたんでしょうね（笑）。

村崎　友達少なかったんだろうなーってね（笑）。やっぱり、どういう妄想であっても本人がどこかで妄想だって気づきながら持ってるうちはいいと思うんだけど、結果的に人を不幸にする妄想はロクなもんじゃないと思う。何が一番嫌かというと、俺の知人で幼い頃からすごく不幸だった女の子が、その不幸につけ込まれて仏教系の某巨大宗教団体に入信して、持たなくてもいい罪悪感まで持ったのを見たことだったね。「親が首吊って自殺したりお前を見捨てて逃げたりしたのは、お前が前世で悪いことをしたからだ」とか、「だからお前は教団にお金を沢山持ってきて、正しい教えを布教しなければいけない」とか言

われて納得するのは個人の勝手かもしれない。だけどその子が電話で俺に布教をしながら、明るい声で「キ○ガイとか、不具の人、不治の病に苦しむ人たちに同情しなくてもいいのよ、あの人たちは前世で悪いことをしたからああいう姿になって当然なの。ああいう人たちの福祉団体に寄付するよりは、うちの教団に寄付して、正しい教えが広まるようにした方が、ずっと世の中のためになるんだから」て言うのを聞いたときには返す言葉を失いましたよ。

京極　それは真の意味で鬼畜だ。

村崎　何でたまたま不幸になった人が、わざわざ持たなくてもいい罪悪感まで持たなくちゃいけないんですか。そういう妄想を、俺は潰したいんですよ。別にお釈迦様だって、弱者差別したくて仏教を作ったわけじゃないでしょう。それを最も醜い形で平気で利用してしまえる所に、人間や宗教の怖さがある。俺はそっちの方がよっぽど恐怖ですね。

京極　それはまあ恐怖ですね。信じさせるテクニックだけはちゃんと持っている所がね。

村崎　すごいよね、あらかじめ「この教えは正しいからこそ腐敗した世の中では迫害されることになっているんだ」とか言って批判を封じてしまう。そういうのを見てると、京極さんが小説で「この世には起こりうることしか起こらないんだよ」とくり返し語るのが、みんなに「目ェ覚せよ馬鹿！」って一喝してくれているようで、ものすごくいいなあと思うんですよ。

京極　やっぱり両刃の剣で、地獄図絵みたいなものがいい世の中を作る為に貢献するケー

スもあるんですね。一方では金儲けの為の手段にしかならない。どちらも同じ理屈なんですね。両方に機能する。どこで、誰がどうやって決めるのかと言えば、それは行う方が決めるしかないんですよ。騙す奴はいい方に騙してくれないと、誰も救われないわけでね。考えればわかることも多いと思うけど。

村崎　でもコリン・ウィルソンだって、著作で死後について研究して一生懸命考えた末にさ、「やっぱりある！」って結論に達して（笑）、本を書く前は信じてなかったのに書き終わった時にはあるって確信しちゃってた。あれは読み終って相当頭に来たね、コリンだから許すけどさ（笑）。

京極　それは自分で考えて到った道だからなあ（笑）。でも他人の考えを鵜呑みにしちゃねえ。簡単に洗脳されますから、人間なんて（笑）。

村崎　同じ死後の世界でも、丹波哲郎とキューブラー＝ロスでは全然違いますからねえ。キューブラー＝ロスのだと救われるじゃないですか、あれだったらあってもいいなあって。だけど丹波のはねえ……せめて、死後の世界にまでヒエラルキーなんてあって欲しくないよね（笑）。

京極　そんなのがあるってことがおかしいと思わなくっちゃ（笑）。たとえば善悪って何だろうとか、人の善し悪しって何で決まるんだろうとか、そういうことこそ、考えればわかることなんですよね。こっちが良くてこっちは悪いと言い切れるものなんてそうそうないぞということがわかれば、善行を積むということがどういうことなのかわかるわけで

しょ。結局自分が生きている社会の環境とうまく自分をそぐわせていくということだけでしょう？　社会なんてのは何年ももたないわけですよ。すぐ変わっちゃう。つまり永遠の善なんて有り得ない。ヒエラルキーなんて作れっこない。

村崎　正義なんて常に勝った者の言いぐさでさ。

京極　そう、正義とか美とか善とかいうのはもう、その時その時の為政者の作るものじゃないですか。

村崎　人間に殺されて食われてる豚に言わせれば、人間の正義なんて何だ、と（笑）。

京極　大槻教授っているでしょ。僕は科学は正しいと思うからあの方にはもっと頑張ってもらいたいんだけど（笑）、ただ大槻教授は科学で踏み込めないところは語っちゃ駄目ですね。例えば鬼火が燃える。それは霊じゃないプラズマだと、そこまではいいんです。だってそりゃきっとそれはプラズマだろう（笑）。そうでなくとも自然現象は物理学で解ける。でも、どうしてその場所、その時間、そこにプラズマが「でなければならなかった」のかは、科学の説明できる範囲を越えてるでしょ。そこは沈黙しないと。

村崎　教授は誠実だから物理的な現象としてとらえようとしてるよね。でもキ○ガイの俺はそういうのよく見かけるからわかるけど、別にそこに何もなくたって見えるときは見えるんだよ。人間の感覚器ってそれほどいい加減なものなんだから。

京極　それは生理学的、あるいは心理学的説明ですよね。それは一応科学の範疇で説明可能なわけです。問題はその外側ですよ。不可知な部分に科学は言及できない。物質は素粒

子でできている、そこまではいいけど。じゃあどうして素粒子はあるの、というのは、「わかりません」でしょう。そこ説明しちゃ嘘になる。そこをね、ありきたりな精神主義で埋めちゃうと、「お前は悪いことしたから酷い目に遭う」と同じレヴェルになっちゃうでしょう。触れることも見ることも聞くこともできない領域は、無いのと同じですね。でもそれは「無い」という形で「ある」んですよね。死後の世界と同じですよ。わかるものはわかれ、わからないものに勝手な意味付けをするなと。わからんものに対しては敬虔になる。畏れることですよ。

不可知の部分を感じること

村崎　さっき皮膚感覚ということを言われたけれど、やっぱりガキのころ、ある海辺の町に行ったことがあってね。まだ電気もロクに通っていないような僻地で、夜散歩していて岬の先の街灯の無い所へ行って、そこで月が雲に隠れたら、本当に、全てがすっぽりと漆黒の闇に包まれて、目を開けても閉じてもまったく変わらない、何も見えない状態になったんです。そういう時って、通常よりもずっと身近に「神」の存在を感じられるんですよ。もちろん妄想なんだけど、人間とは全く別のものの気配を感じて、ああ、神はいるんだなって気分になるんですよ。そして、そのあとしばらくしてぱっと雲が開いて月の光が射すと、一瞬で世界が生まれたように見えるんです。ああ、聖書の創世記の「光あれ」ってのは、まさにこれだって思いましたよ。漆黒の闇ってのは体験すると怪談なみに面白い

ですよ。

京極　そういう、視覚とか臭覚、聴覚は、獲得された、発生学的には後からできた感覚で、皮膚っていうのは外界と個体を遮る唯一のものですから、皮膚感覚は一番古い感覚ですよね。そこに「来る」んだと思いますね。

村崎　昔の人はそういう中で生きていて、そこで生まれる怪談っていうのは、あざとい「作り」のない自然なものなんでしょうね。

京極　そこは、語っちゃいけない、まさにアンタッチャブルな領域ですよ。僕が最初に言った、因果関係の「因」を切れ、というのはまさにそういうことで。アンタッチャブルなところには触れない。現象として起こったことだけを語る。そこでその不可知の部分をひしひしと感じることが恐怖である、そういう作品がいい怪談だと僕は思うのね。そこについてガタガタ語るのは野暮なんです。

村崎　同じ怪談でも、西洋のモダン・ホラーだと、血だらけの怪物が具象物としてあからさまに出てくるじゃないですか、あれは野暮ですよね。日本はやっぱり気配だと思うんですよ。ひしひしと背中にくる怪しい気配というのが粋だと思います。月見といっても月を直接見ないで部屋の奥から縁側にさしこむ月の光を見て怖がるなんて、西洋人には理解できないかもしれないでしょう。

京極　怪異の実態を見るときというのは、必ず覗きなんですね。「牡丹灯籠」も隙間から覗いた時に初めて骸骨に見える。一枚フィルターを通さないとものは見えない、という

ね。後は五里霧中の気配だけ。その感覚を、文章なり何なりでちゃんと書ければいいんですけど、難しいんですよね（笑）。

村崎　もう充分書いてるじゃないですか（笑）。

京極　行間を読ませて、紙背を読ませていく作業ですよね。書かないことによって書く、と……（笑）。

村崎　俺も忙しくて京極さんの新作は買ったけど実はまだ読んでいないんです。本棚に置いて、気配を感じながら読まないことによって読む、って……それじゃただの怠慢か（笑）。

（きょうごく　なつひこ・小説家）（むらさき　ひゃくろう・工員）

「ユリイカ8月増刊号　特集＝怪談」　１９９8年8月　青土社発行

第４章　村崎百郎書き下ろし小説

ゲス

第4章



村崎百郎書き下ろし小説

メリオ

メリオ　　**村崎百郎**

メリオの本名は栗山典夫。高校三年の春にバイクの事故で頭から田んぼに落ちて、首の骨が胴体にめり込んだので、俺達はみんなメリオと呼んでいた。

奴が俺達の工場へやってきたのは一九八六年の春先だった。当時、俺達の工場はちょっとした好景気で新しく機械を仕入れて業務拡張をはかり、そのために数名の新入社員を求人雑誌で募集したのだ。雑誌に募集広告が載ると事務所には何本もの問い合わせの電話があり、二三日で数十人が面接にやってきた。毎度のことだが、応募してきた奴らの大半は、面接の後に俺達が粉まみれで働く工場の様子を見て顔をしかめ、その日の夕方には「僕には向かないようです」とか「ちょっと今回は遠慮しておきます」などと丁重にお断わりの電話をかけてきた。

「あれじゃ完全に詐欺だ。募集広告に〝篠宮製薬〟って書いてりゃあ、誰でも清潔な工場をイメージするだろ。面接に来てこの現場を見たら、誰でも〝騙された！〟って思うさ」

「だけど、正直に〝東京でも一二を争う薄汚い工場です、頭から粉まみれになって働きませんか〟って書いてみろよ、問い合わせなんか一本も来ないぞ」

騙すつもりでついている嘘ではないので許されるだろう、と同僚の後藤は言う。

それでも他に行く当てのない食い詰めた連中が何人かいたらしく、工場がある北区在住の族あがりでフラフラしていた二十前の若者三人と、埼玉県与野市在住のメリオが採用さ

れた。
　メリオ達が初出勤する前日、朝のミーティングで社長がみんなを前に照れくさそうな顔をしながらメリオのことを説明した。
「今度ウチに来るやつの中に一人、交通事故の後遺症で身体の調子があまり良くないのがいるんで、みんなにも面倒をかけるかも知れないけど宜しく頼むよ。親まで一緒にやってきて頭を下げられちゃって、断われなくてね」
　ケチでセコいくせに、つまんねえ人情ばかりは捨てきれないんだから、こいつは所詮町工場の親父止まりなんだろう、と俺はたかだかバイト工員の分際で思う。
「でも、言葉の通じないパアじゃないんでしょう？」
「それは大丈夫のようだ。ただ、手際が悪いせいか、前の職場でも怠けているように誤解されてイジメられたらしい。ウチではそんなことのないように注意してやってくれ」
「じゃあ、事故や怪我のないように気をつけてあげましょう」
　俺はいつものように、善人ぶって思ってもいないことを口に出す。他のみんなもそれはそうだねと首を振る。実際は殺伐としたド最低の職場だが、体裁だけは〝友愛に満ちた明るい職場〟をとりつくろっているのが篠宮製薬の現状なのだ。
「みんな、自分がクソの中にいることを認めたくないのさ」ロッカールームで着替えながら後藤が言う。「もっとも、クソは自分のクサさが気にならないだろうがな」
　こいつの言うことは理屈っぽくてときどき意味不明だが、言いたいことは分かる気がす

る。「暑いし、汚いし、粉袋は重い……今どきこんな職場は探したって、そうそう簡単に見つからねえよ。そんな所でわざわざ働きたいなんて、そもそも健全な発想じゃないよな」

「まあ、どうだっていいさ。きっちり仕事こなしてみんなの足を引っぱらなけりゃあ、俺はどんな奴が来たってかまわねえよ」

それが〝工場の倫理〟ってもんだ。しかし、翌日やってきたメリオは、そんな俺達の予想をはるかに越えた何十年かに一人の〝逸材〟だったのだ。

「よろしくお願いします」と言ってミーティングで頭を下げたメリオは、身長が一七〇センチあまりのガッシリとした体格で、彫りの深い顔をしていて、それほど様子がおかしいようには思えなかった。残りの族あがりグループの三人も「須藤です！」「岸です！」「青野です！」と元気良く挨拶をした。みんな十九歳で若くて体力がありそうだった。

そのあと社長から発表があって、族グループは新事業の殺菌プラントの方へ配属された。従来の製粉チームの補強メンバーはメリオ一人だという。事故の後遺症が残るメリオには複雑な機械いじりは無理ではないかという配慮からなのだろう。

「じゃあ栗山君、きみはこの村崎君について仕事を覚えてくれ」

工場長にそう言われて、俺はメリオの教育係に任命されてしまった。

「村崎君はバイトだけど、もう四年もいるから何でも聞くといい」

メリオはお願いします、ともう一度俺に向けて丁寧に頭を下げた。確かに身体の動きがほんの少し硬くて、これはちょっとニブそうな奴だ。でもまあ、事故の後遺症なんだから仕方がないだろう。悪気があってトロいわけではないのだ。

俺はメリオに工場の中の案内をしながら仕事の概要をひととおり説明してやった。

「面接で聞いたと思うけど、〝製薬会社〟ってのは名ばかりでここは基本的には製粉工場なんだよ、わかるだろう？」

「はあ」

メリオは表情を変えずに返事をした。

「原料の粉をそこの製粉機の中にぶち込んで細かく砕いて、こっち側の撹拌タンクの中に溜める。それをこの機械が吸い上げて二十キロずつ袋に詰めるんだ。単純だろう？　袋の内側にはもう一つビニール袋が入っていて、粉を入れたら内側のビニール袋の口をゴムで止めて、外側をミシン掛けして袋を閉じる。そしてその袋をパレットの上に四十袋ずつ積み込むんだ。わかるかい？」

「はあ」

とても本当に分かっているとは思えない返事だが、最初はそれでもいいだろう。仕事は一つずつ体験しながら覚えていけばいい。

「だから作業は、製粉機に原料を入れる係、機械の口に袋をあてがって粉を詰める係、粉がちゃんと二十キロ入ったか秤にかけて確かめる係、内側の袋を輪ゴムで止める係、袋に

ミシンを掛ける係、できた袋をパレットに積み上げる係に分かれるんだよ」
「はあ」
「ここまでで何か質問はないかな?」
俺はそう言いながら、表情のほとんど変わらないメリオの虚ろな目の中を覗き込んだ。敵意はないが知性も教養も感じられない。閉店直前のスーパーの魚貝類売り場で、よくこんな目をした辛気臭い魚が売れ残ってるものだ。
「ぼくは何をすればいいんですか」
いい質問だ。何よりも仕事への意欲とやる気が感じられる。
「最初は完成した粉袋をパレットの上に積みながら、みんなの仕事を見てりゃいいさ」
何もかも一遍に覚える必要はないんだと言い聞かせて、俺はメリオに粉袋の積み方を教えてやった。メリオはあい変わらず、はあ、はあ、と生返事をしながら、いちいちうなずいた。
「それじゃあ、一回目の製粉をやるぞ。今日は最初にこの組み合わせで5トンだ」
工場長からメモを手渡されて俺は製粉機の台座の上に昇った。現場の作業分担は公平に持ち回りなのだが、俺はいつも一番仕事がきつい〝製粉機への原料の投入〟を選んでいた。理由はそれが〝みんなから離れた場所でたった一人で黙々と行える作業〟だからだ。少々きつい作業でも、作業中に人と会話しなくてもいいのは気楽で良い。原料の袋を大型のカッターで次々にスッパリと切り裂くという暴力的な作業があるのも、この作業を好き

な理由のひとつだった。嫌な連中の首をナイフで切り裂くことを夢想しながら仕事ができるのはストレス解消にもなる。

「単調な作業の中に、目も眩むような喜びを見いだせなけりゃあ工員はつとまらねえよな。俺は今日一日で六本木あたりにたむろするヤンエグサラリーマンの首を三六〇人かき切ってやったぜ」いつだったか、後藤にそんな話をしたら「ろくな趣味じゃないな。思いはどこかで形になるぞ、気をつけろよ」とたしなめられた。こいつはいつも休憩時間になると一人で難しそうな本を読んでいる奴で、ときどき変なことをいう。

それでも、同僚のみんなも自分に一番きつい仕事が回ってこないことには何の異存もないようで、俺はいつでも好きなだけ〝製粉係〟をやっていられた。

何も考えずに仕事に没頭し、歯車になりきれれば就業時間なんてあっというまに過ぎてしまう。それには余計なことを考える暇のない重労働の方が都合がいいのだ。深く物事を考えるようではこんな汚穢工場の工員はつとまらないだろう。

その日一回目の製粉をしながら、俺はときどき振り返ってメリオがちゃんと粉袋を積み上げられるかどうかをチェックした。案の定、パレットに積まれた粉袋が5段目あたりから左に大きく傾いている。よく見ると、袋を持ち上げるメリオの身体の動きが変だ。おそらく、粉袋の重心を捕えずに持ち上げてるんだろう。経験不足の新人がよくやる間違いだ。

俺は袋のミシン掛けをしている同僚の三上に目で合図をして、メリオに助け船を出して

やった。まわりにいた数人が傾いた粉袋の山を崩して一気に積み直す。簡単な作業のようだが、いいかげんな積み方をすると、フォークリフトでパレットを運ぶときに簡単に崩れてしまうので〝積み上げ係〟は重要なのだ。メリオは自分の不手際におろおろあせって、ギクシャクとした身体の動きが一層機械じみたものになった。

「真面目でノロマ。あれじゃあ、気の短い連中がいる職場ならいじめられるでしょうね」

一回目の作業が終わった小休止タイムに三上が俺の側に来て言った。

「まあ、そのうち慣れてくれるんだろ、いつまでもあれじゃ困るけど」

額の汗を防塵マスクでぬぐいながら床に腰掛けて、俺は無表情でつっ立っているメリオに声をかけた。

「タンクの中で粉が混ざるまでちょっと休憩だぞ、そのへんに座ってろよ！」

後年、社員に昇格して営業部に行った三上から「実はウチの製品は、表向きには原料を一切混合していないことになってるんですよ！」と聞いてしみじみ感心したものだ。こういうのを〝零細企業の営業努力〟というんだろう。「信じて買ってる奴らがバカなだけですよねえ」と三上が言うように、所詮パッケージの成分表示なんて気分的なものだし、会社が不正に混ぜ物をしているおかげで俺達はこうして休憩時間外にも休憩ができるのだ。

最低の工場で働く工員は、そのぐらい意識が低くなくてはつとまらない。

「おい！　何やってるんだ！」

突然、工場長の怒鳴り声が聞こえたので驚いて顔をあげると、床にどっかりと腰を降ろ

したメリオが口にくわえた煙草にライターで火をつけようとしていた。

メリオは一瞬誰が怒鳴られたのか分からなかったようだが、みんなが自分の方を向いているので注意されたのが自分だと気づき、煙草を口にくわえたまま「禁煙なんですか、ここ?」と少し間延びした口調でひとりごとのようにつぶやいた。

「駄目に決まってるだろう! 灰を落としていい場所かどうかわかんねえのか!」

「禁煙って書いていないので、吸ってもいいのかと思いました」

メリオはどこを見ているんだかわからない目をしながら、抑揚のない声で子供じみた言い訳を言う。その態度にカチンときた工場長はムッとして、思わず「ここで扱ってる粉は薬になって人様の口に入ったりする代物なんだよ、常識でわかんねえか! この……」と声を荒げた。しかし、社長からの注意を思い出したのか、「まあ、最初だからしょうがねえな、今後は気をつけろよ」と、軽い舌打ちをしてフォークリフトの方へ歩いて行った。

些細なことだが、メリオの異様さをみんなに印象付けるにはこれで充分だった。どうやら一般常識がところどころ完全に欠けているようだ。これも事故の後遺症なんだろうか?

「真面目でノロマ。それに生意気か……間違っても好かれるタイプじゃないですねえ」

「いい味出してんなあ、工場長に〝すいません〟の一言も言わなかったぞ」

同僚たちはてんで無責任にこの事態を楽しんでいた。俺も教育係として何か言ってやらなければなるまい。しかしメリオは俺が声をかける前に無表情のままこっちを向いて「あのう、ぼくは工場長に嫌われたんでしょうか?」とトンチンカンなことを聞いてきた。

「あのなあ栗山君、好きとか嫌いとかそういうんじゃなくてね、どんな場所でもそれぞれ〝やっちゃいけないこと〟ってのはあるだろう？　確かにこきたねえ工場だけど、ウチは一応〝製薬会社〟だしさあ、別に何処にも書いてないけど、中で煙草を吸うのはマズイんだよ。わかる？」

何せ相手はマトモじゃない。俺は最大限に優しい口調で諭してやった。しかしメリオには全く聞こえちゃいないようで、「嫌われたんじゃないんですかねぇ」と繰り返す。

気の短かい俺だが、腹を立てても無駄な奴には怒鳴らない主義だ。

「なあ、栗山君よぉ、ここは学校じゃないから人の好き嫌いなんか関係ないんだ。俺達に問われるのは〝仕事ができるかできないか〟ってことだけなんだよ。君がどんなにバカで生意気でも、ちゃんと仕事を覚えてしっかり働いていれば工場長だって何も言わないさ」

メリオは煙草を指にはさんだまま静かに窓の外を見ていた。とことん人の言うことが聞こえないタイプらしい。しかも、何やらボソボソつぶやいている。

「煙草ぐらいで怒鳴るなんて、肝っ玉の小さい人ですねえ……」

それを聞いて一瞬、「てめえのそういう態度が問題なんだよ！」と怒鳴りたくもなったが、これ以上は時間の無駄だ。俺は次の仕事の準備をしに製粉台へ戻った。

すると驚いたことに、メリオは煙草を指にはさんだまま工場の外へ出ていこうとした。

三上があわてて止めに入る。

「待てよ栗山君、どこ行くんだ？」

「煙草吸いに休憩所に行ってきます」
「駄目だよ、もう二回目の製粉が始まるんだから」
三上はメリオを押しとどめて、俺に向かって眉をひそめて「話になりませんね」という顔をしてみせた。
その日のメリオはそれ以後の作業も万事がこれだった。何をやっても不慣れなのは新人だからいいとしても、メリオはその態度が真面目とか不真面目とかいう以前に何かか完全にズレているのだ。夕方になる頃には工場中の全員が「栗山は使えねえな」という結論に達していた。今にして思えば、「使えなくても頭数にはなるだろうから、いないよりはマシだろう」などと呑気なことを考えていた俺達の認識は本当に甘かった。
メリオは俺達の常識をはるかに超えたとんでもねえ野郎だったのだ。

時計が午前5時を回ってその日の作業が終わり、俺は三上とメリオと三人で風呂場へ向かった。
「風呂は交代で順番に入るんだけど、ウチではバイトや新人が先に入ることになってるんだ。工場長はキレイ好きだから湯舟は汚さないように気をつけろよ、中でクソなんかもらすんじゃねえぞ」俺は手短に説明して三上と一緒にさっさと先に風呂に入った。
メリオも後に続いたが、タオルでしっかり前を隠している。
「誰がおまえのチ○ポなんか気にするかよ！」

俺はだんだんいらついてきた。頭では普通ではない奴と分かっていても、腹が立つものは仕方がない。「いかんな、俺もカルシュウム分の不足かなあ……もっと牛乳飲もうか」などと殊勝な気持ちで頭を洗っていると、身体を洗い終えてのんびり湯舟につかっているメリオが唐突にしゃべりだした。

「村崎さん、僕に空手教えてくれませんかね」

「はあっ？」

「昼休みに工場の隅で練習してたでしょう」

違う。もの覚えの悪いバカに仕事教えて、溜まったストレスを壁に回し蹴りを叩き込むことで解消してただけだ、別に練習していたわけじゃない。

「人に教える程の腕でもねえよ。だけど何で空手を習いたいんだ？」

「シメたい奴がいるんです。前の職場でオレを馬鹿にした奴がいて……」

メリオは俺の方を見もせず抑揚のない声で淡々と語った。いかん、目がマジだ。俺は隣にいた三上と顔を見合わせて呆れた。

「本当に腹が立ちますよ。あの野郎、人のことを馬鹿だ役立たずだって……」

「どこの職場にも嫌な奴はいるよなあ。でも、そんな奴は相手にするだけ時間の無駄だじゃないか？　シメて半殺しにしても警察にチクられりゃ捕まるんだぜ。せっかく〝篠宮製薬〟に就職できたんだから、以前のことは忘れて頑張りゃいいじゃないか」

「そうだよ栗山君、ここの人はみんないい人ばかりだよ。社長はちょっとケチだけどな」

入社初日で新しい職場の同僚に、前の職場の仇討ちを真剣に相談する奴も珍しい。後日、俺達は、メリオがこの話を工場長以外の職場の同僚全員に一人ずつ相談していたことを知り、工場内のメリオの評価は「使えない奴」から「ちょっと危ない奴」に変わっていった。「何を考えているかわからない」など、単調で苛酷な工場労働に退屈していた俺達は、極めて無責任に「そのうちいつか、こいつは何かとんでもない事件を起こすだろう」という期待と不安の入り交じった眼でメリオの動向に注目しはじめた。

「こうなったら、栗山が何をやらかしても俺達はみんな共犯者だな。誰もそれを止めようなんて考えてちゃいないし」

休憩時間に一人で本ばかり読んでいて普段は俺達の無駄話に滅多に加わらないインテリの後藤までもが、珍しく面白がって頻繁に「今日はもう何か面白いことがあったか?」と、メリオのことを聞いてまわった。どうやら本を読むよりも楽しいらしい。そんなわけで、ひと月と経たないうちにメリオを除く工場中がまるごと「メリオ研究会」になっていた。

楽しい〝研究〟は主に仕事の合間の休憩時間に行われた。

俺達はひと休みする度に、親しげにメリオをとり囲んで奴の話を根掘り葉掘りじっくりと聞いた。中でもメリオの運命を変えたというバイク事故の話は、かなり早い段階で細部に至るまで徹底的に質問責めにした。

「いつ事故ったの？」
「高校の頃なんですけど、何年生だったか……」
聞くとわりと名の通った県立高校だという。事故前は頭が良かったのかもしれなかった。
「何に乗ってたの？」
「四〇〇ＣＣのやつです。メーカーはどこの何だったか……」
「じゃあ中免取ってたんだ？」
「免許取ってすぐの事故だったってお母さんが言ってました」
「どうやって事故ったの？」
「スピード出し過ぎてカーブが曲がれなかったらしいです」
「覚えてないの？」
「それから三年くらい記憶が……ないんです」
「じゃあ、ガードレールにぶつかったのかな？」
「バイクから投げ出されて田んぼに頭から落ちたみたいです」
「それで助かったんだ、良かったねえ」
〝良かったねえ〟は社交辞令だ。俺達は何とかメリオを調子に乗せてできるだけ多くをしゃべらせようとした。
「落ちたときに首の骨がめり込んで……それから記憶がないんです」

聞いていたみんなはそこで、はぁあ、なるほどねえ、と顔を見合わせた。俺はメリオの首の骨がメリメリと音を立ててゆっくりと胴体にめり込んでいくさまを想像した。それと同時にメリオが全くの別人になり変わっていくさまも想像した。

俺達工員は仕事の内容上、事故に合う危険はいつでもある。実際にこの工場でも数年前に、床下に埋めこまれた原料の投入口に足を滑らせて、高速で回転する機械に足をはさまれ右の足首から先を失った工員がいた。一瞬の油断で永遠に失われる身体パーツ――人の身体は柔らかく、機械に比べれば情けないぐらい脆いものだのだ。俺の十本の指にしても、明日も俺の手についている保障はどこにもない。誰も好き好んで身体の一部を失いたくはないけれど、その可能性は常にあるというわけだ。メリオの話を聞きながら、俺は自分の置かれている立場や状況を思い出していた。

「でも記憶がないって、どんな感じなんだ?」

「……」

「良くわからないんだな」

「……」

「分かった、分かった、もういいよ。考え過ぎて智恵熱が出て会社を休まれちゃ困るからな」

メリオはどう答えていいか分からない質問には、ぼんやりとひと事のような顔をしてただ黙っていた。その表情には答えたくないとか思いだしたくないといった不快感は全くな

く、過去の自分をまるでひと事のように思っているようだ。
メリオが知人から聞いた話によれば、何でもメリオは事故に合うまではバレーボール部に在籍するなどしていた活発な高校生だったという。今のメリオからは想像もつかない。
「事故って奴は本当に恐ろしいね。青春を謳歌していた平和な高校生の可能性をまるごと奪っちまうんだから」
「でも、物は考えようだぜ。そうやって事故にあって頭が胴体にめり込んだおかげで、栗山君はこうしてこの〝篠宮製薬〟にやってきて、俺達のような素晴らしい仲間とも巡り合えたんだからな」お調子者の三上が皮肉をこめて言う。
「そうだぞ栗山君、そのまま事故に合わずに適当に楽しく遊んで、さほど理由もなく大学に行っていれば、今頃はもっと怠惰な生活を送っていて、授業にもろくに行かずバイトで儲いだ金をみんな麻雀ですったり、性悪女にだまされて貢いであげくの果てにやっと一発お情けでやらせてもらったはいいが性病を移されて、病院のベッドの上で股間を押さえてひいひい泣いていたかも知れないんだぞ。そう考えると今の君は本当に良かったなあ」
俺も思いつくままにいかげんなことを適当に並べた。
メリオは微笑みながら「さあ、どうですかねえ。まだわかりませんねえ」と偉そうにふんぞり返って煙草をふかした。この男、何だか知らないが態度だけは異様にでかいのだ。
「栗山さん、ちなみにこの工場はどうですか」
「そうね、まあね、だいたいあいやねえ……」

メリオはここで突然、テレビでも有名な経済評論家の物真似をしはじめた。
「君らがボクをだよお、ちゃんと一人前になるまで教えてくれるっていうんなら、いてやってもいいんだよお。どーしてもっていうんならなんだけどねえ」
内容が生意気なのと、あまりにも似ていないので全員があっけにとられた。
それは、後にみんなをさんざん悩ませることになったメリオの幼稚さが初めて現われた瞬間だった。

「馬鹿で生意気。ノロマな上に幼稚！　この先奴にどんな要素が加わるのか、考えただけでも楽しみですね」
話し合いの後にロッカールームで三上が俺に話しかけた。それを聞いていた後藤も目を輝かせて言う。
「栗山は面白いよ。普通、ああいう身の上話を聞いたら、それなりに可哀相に感じたり、同情したりするもんだけど、俺は栗山にかんしては一切そんな気が起きないんだ」
「俺もだよ」
「これは〝弱者や被害者がつねに善なるものとは限らない。そんなイメージを押しつけて勝手に同情すること自体が、自らを棚上げして人を見下した傲慢で不遜な行為である〟っていうのが良くわかる例だな。いやあ勉強になるぜ！」
理屈はわからないが、たぶん後藤が言いたいのは〝いくら可哀相でもムカつく奴はとこ

とん、ムカつく〟ってことなんだろう。
「俺達は聖人君主じゃねえからな」俺はそう言いながら、粉と汗にまみれたシャツを抜いでロッカーの中から着替えを取り出した。
そのとき、休憩室の方で激しい物音と怒鳴り声が聞こえた。椅子が倒れ、ガラスの割れる音がする。
「どうした！　喧嘩か！」
「誰と誰だ！」
驚いて廊下を走って休憩室のドアをあけた瞬間、俺達が見たものは、顔をまっ赤にしてもの凄い形相で族あがりの青野につかみかかるメリオの姿だった。
「程々にしとけよ！」
こういう場合は適当に殴り合わせてから引き離すのが筋というものだ。正義感に燃えてタイミングを間違えて争う二人の間に割って入ると、とばっちりで両者から殴られかねない。二人が鼻血を出してないのを確かめてから、俺はメリオの背後に回って腰のベルトに手をかけ、思いきり引き上げて床に叩きつけた。後からやってきた格闘技マニアの平山さんが倒れたメリオに覆いかぶさって動けないように寝技をかける。
メリオは往生際が悪く、「放せ！　放せよ！　この野郎！」と悪態をつきまくった。
青野はメリオを引きはがすとそれ以上は暴れようとせず、黙って乱れた服装をととのえた。

「何だっていうんだよ、この騒ぎは？」
「栗山君が突然殴りかかってきたんスよ」青野が迷惑そうに言った。
すると、押さえこまれたメリオが身体を激しくゆさぶりながら叫んだ。
「お前が俺の顔が変だなんて言うからじゃねえかよ！　年下のくせに！」
青野によれば、話はこうだった。
入浴待ちのために青野と雑談をしていたメリオは、話の中で〝青野が早生まれで実はメリオの方が一年先輩〟だということを聞くや、突然偉そうに口調を変えて「じゃあ俺の方が年上だな。今後は口のきき方に気をつけろよ」などと言い出すので、青野はあきれてしまい、「何言ってんだよ学校じゃあるまいし、面白い顔して変なこと言うなよ」と言ったら、突然椅子を蹴って殴りかかってきたのだという。
俺達は、話を聞いてあまりの情けなさに言葉を失った。
こういう事にはあまり首を突っ込みたがらない後藤が、やれやれという顔をしながら、メリオに話しかけた。
「なあ栗山君、もっと自分に自信を持てよ。客観的に見ても君は彫りも深いし、鼻筋も通っていてなかなか二枚目だぞ」
「はあ？」
「それとも誰かに悪口を言われたら、君の顔の造りが変わるとでもいうのか？　そんなことはないだろう。誰が何を言おうが君の顔は変わらないんだよ」

「はあ……」
　メリオは黙って後藤の言うことを聞きはじめた。
「君が自分の顔に相当のプライドを持っているのは分かった。それは君の勝手だし、俺達の知ったこっちゃない。また、君がそれについて悪口を言われて腹を立てるのもわかる」
「はあ」
「でも悪口を言われたぐらいでは君のステキな顔は少しも変わらないじゃないか。だから腹なんか立てる必要はないんだよ」
「はあ。でも……」
　後藤は年の離れたガキでもあやすように一言、一言、確かめるようにゆっくりしゃべった。
「だけど、〝年上だから偉い〟なんてのは問題が別だぞ。今どき、そんな身分制度は学校の運動部ぐらいでしか流行らない。社会に出て就職したら、問われるのは〝誰が年上か〟じゃなくて、〝どれだけ仕事ができるか〟という個人の実力なんだからな、コネも含めて」
「はあ……」
「もし、本当に年の差だけが偉さの基準なら、総理大臣は百歳以上のじいさんがやってなけりゃ変だろう。年さえ上なら何をやってもいいのか？　そんなことはないだろう」
「はあ……」

「だから年上だなんてことで威張っちゃ駄目だよ。大のオトコがそんなことに寄りかかってしか威張れないなんて情けないだろう？」

「……そうですね」

なるほど、後藤はいつも本を読んでいるだけあって口が上手い。

「まあ、この騒ぎで、もう君の顔の悪口を言う奴はいないだろう。そうだよな、青野君」

ここで後藤は青野の方を向いて、ほんの一瞬のあいだに〝見てわかる通りこいつはマトモじゃないし、実社会の基本的なルールも常識も知らないパアなんだから、当然腹は立つだろうけど、ここはひとつ寛大な心を持ってこの馬鹿を許してやってくれよ〟という合図を送った。青野も察しの良い子で〝了解です。栗山がこれほどの馬鹿とは思いませんでした〟という視線を返して、メリオに謝罪した。

「ごめんよ栗山君、本気で馬鹿にして言ったんじゃないんだ。気に障ったら謝るよ」

メリオはしばらく黙っていたが、気をとりなおして「顔のことを言われると本当に頭に腹が立つんだよ。俺はこれでもアイドルを目指していた男だからな」と大真面目な顔をして偉そうに言った。

みんなは吹き出すのを必死でこらえて、まあまあ、仲良くやろうぜとメリオの肩を叩き、散らかった部屋を片付けた。

駅までの帰り道で、歩きながら後藤に「お前には珍しく、ずいぶんと親切だったな」と

言うと、後藤は「違うよ、その逆だ。長期的に馬鹿にして楽しみたかったからさ」と意外なことを言いだした。
「どういう意味だよ？」
後藤は意地悪そうに笑いながら説明した。
「なあ、あのつかみ合いの理由を聞いてどう思った？　俺はあまりの情けなさに頭がクラクラしたぞ。働いてる自分が言うのも何だけど、こんなにくせえ町のクソ工場の片隅で、どう考えてたってこの国のＧＮＰにはさしたる影響も及ぼしそうになくて、生きていても糞以外は生み出せそうにもない一人前以下のどうしようもなくノロマなクズ野郎が、自分の顔の悪口に怒って同僚に殴りかかるってんだから、これはもう笑うしかないだろう？　あいつは顔なんか気にする前に、気にしなきゃならねえことはいくらでもあるだろうに」
なるほど、言われてみればその通りだ。
「いかにもクズ工場のカス工員が引き起こしそうな、低レベルの取るに足らないモメ事だろう。あんまりハマりすぎて震えがきたよ」
「そう言われりゃそうだな、お安い話すぎてナミダも出ねえよ」
「どうせウチの工場は風が吹く度に粉が飛んで、ご近所中の洗濯物を汚しまくる迷惑このうえない〝汚穢工場〟さ。商店街の連中が粉まみれの俺達をうとましく思ってることも知ってるだろう。俺はこの前、昼休みに道を歩いてたら、子供を連れた母親に〝よく見るのよ、ちゃんと勉強しないとあいう仕事にしかつけない駄目な大人になるのよ〟なんて

言われたよ、もう全くその通りだと思ったね。そういう工場のバカでうすぎたない工員にはふさわしすぎる低俗なモメ事さ」
そういえば、隣の電気機器の工場のお姉ちゃん達は、道であっても俺達を完全無視するし、転がってきたテニスボールを取ってやっても、ありがとうの一言も言わずにふんだくって逃げるように帰ってしまう。あたりまえだが人は汚いものは嫌いなのだ。
後藤は薄笑いをうかべながらしゃべり続けた。
「でも、全東京レベルで考えてみろよ。港区や世田谷区の高級住宅街に比べれば、〝北区の工場街〟っていうだけで、もう完全にアウトだろう。お洒落でもトレンディでもなくて、住んでる住民ぐるみ死んだほうがマシのダサい連中って感じで蔑まれてもおかしくないのに、その工場街の中にさえ、あそこは汚いの何のってヒエラルキーが作られちゃうんだから笑わせてくれるよ」
これだけ大量の粉と騒音をまき散らしては、人気がないのもあたりまえだろう。
「そんな構造なんだから、俺達クズ工員がクソ工場の中で、事故で半分壊れた栗山を玩具のようにして馬鹿にしながら楽しむのも当然だよな。惨めな者が自分より更に惨めな者を馬鹿にしながら自分の境遇を忘れる、弱者差別は最低のクズにはお似合いの最低の娯楽なんだよ」
なるほど、そういうことか。
「おれは〝今の自分はほんとうの自分じゃない。本当にやりたいことは他にあるからこれ

は仮の姿だ〟なんて言い訳がましく考えるのまっぴらだ。せめてクズはクズらしく、自分が最低のクズであることは自覚していたいんだ。栗山の存在は俺にそのことを思いださせてくれるから見ていて面白いのさ。あいつに接していると自分がどれだけ最低なのかが手に取るように分かるんだ。だから奴には簡単に辞めてもらっちゃ困るのさ」

後藤はそう言って唇を歪めて笑った。

「しかし、ずいぶんと自虐的な趣味だな」

「〝自分を深く知る〟というのが俺の知的欲求の基本なんだよ。他者への愛情なんかこれっぽちもないね」

俺は〝でも、それだけじゃあないんだろう？〟と言いたかったが、何となく声に出すのは止めておいた。

駅で後藤と別れて電車に揺られながら、俺は俺にとってのメリオは何なのだろうと考えてみた。確かに俺もメリオのことを〝自分よりずっと惨めなクズ野郎〟と見下していた。だけど、何の関係もない赤の他人、たとえばこの電車に乗っているセビロを着たサラリーマンの連中中から見れば、俺もメリオもおんなじように見えるんだろう。

そうは思っても〝メリオもクズ工員なら俺もクズ工員だ……だけど、どうして同じクズ同士、仲良くできないんだろう？〟——そんな自己憐憫じみた偽善的な言葉さえも口に出したくないぐらい、俺はメリオを嫌悪していた。

どうやら俺の心にはまだ〝あんな馬鹿とは一緒にされたくない〟というつまらないプラ

イドが残っているようだ。そのプライドがあるうちは、俺も立派なクズである。
俺はそんなクズな自分がとても可愛く感じられて、電車の中で小さく笑った。

「文藝第36巻第3号」　１９９７年8月1日　河出書房新社発行

ゲ

第5章



ス

コメント

第5章 コメント（五十音順／敬称略）

◆ア行

有光沙織（編集者／小学館元担当）

第2弾の村崎百郎電子本の刊行、おめでとうございます。
森園みるくさんの担当編集者として村崎さんにお会いしてから、打ち合わせやイベントなどでお会いする機会が多くありました。
村崎さんといえば世間では「鬼畜」「電波」「悪趣味」なんだと思いますが、私にとってはひたすらに「優しい」人でした。
仕事の場で私のＳＭ話や拾い癖のある夫のエピソードをしたときに、バカにしたりも笑いものにしたりもせず当事者の目線で聞いてくださったのは、後にも先にも村崎さん（と森園さん）だけです。
社会的にずれていたり蔑まれている人たちを見る目線の優しさが、ずっと心に残っています。
そんな村崎さんの原稿が埋もれたまま忘れ去られずに、こうして世に出ることがとても嬉しいです。
第3弾も楽しみにしております！

石丸元章（ライター）

「鬼畜降臨の夜。

――そうして一夜は続き、朝が来ないまま新しい時代が始まった」

10回忌になるのですね――。

自分が村崎さんとお会いしたのは、ご命日から遡ることさらに10年以上前だから、もういろいろなことを忘れているのだけど、あの夜のことは忘れようがない――。

新宿の厚生年金会館がちかくの富久町の靖国通り沿いの2階に、昔のロフトプラスワンがあって。そこで〝鬼畜ナイト〟と名付けられたイベントが開かれて、その夜、村崎さんと初対面したわけです。

イベントといっても入場料は取らないし、会場は業界関係者で満席だから、パーティといった方がイメージは近い。凄い熱気だった。超満員で。わんわんとあっちもこっちも知られた有名人ばっかり。

パーティでの自分の役目は、村崎さん×青山正明さんと鼎談すること。ちょうどその頃、青山さんはMDMAで逮捕されて〝シャバ〟へ戻ったばかりで、自分もクスリはちがえど同じような境遇で、それで声をかけてもらったんだと思う。

その夜は――のちに気づくのだが、ドラッグとかゴミ収集とか奇形愛とか少女売○のような、世間のモラル基準から外れた悪趣味で露悪的な感覚や行動を肯定するバッドテイストカルチャー＝〝鬼畜系〟の大決起パーティのような勢いで、そのことを今の感覚で批判

されるのもうんざりなのだが、その夜は、村崎百郎がその異形を生で人前へ披露するデビューパーティなのでした（記憶では）。そして、その夜をきっかけに、次の時代を代表する前衛表現者として燦然と地の底をさらに下へ下へと駆けはじめる。

●時代を象徴するパーティ

鼎談といったけれど、村崎さんの独壇場というかね。隻眼の三角頭巾の異様な風体で語りだす常軌を逸したエピソードの数々。数奇なプロフィール。こわいでしょ、あれ。自分もまたほかの大勢と同じく、〈頭巾の下の素顔が見たい！〉と反射的に思ったけれど、同時に――〈いやいやいや見てはいけない。見ると地獄に堕ちるぞ〉とも直感した。

見沢知錬さんやねこぢるさんが会場にいて、むせ返るようで、サブカル界隈のライターや編集者やイラストレイターや、当時のカルチャー界のスターたちが、もう死んでしまった人もいるけれど、その夜の記憶をたどるときに大切なのは、そこにいた全員が燦然と夜に光る黒色矮星のようだったの。村崎百郎の皆既日食に照らされて黒く光っていた。

いつの時代にも、「その時代を象徴するパーティ」として思い出されるパーティというのがあると思って、あの夜がまさにそれ。

次々といろんな人が登壇して唖然とするエピソードを誇らしげに語り、新しい価値観を提示する。会場は大いに盛り上がって、お客さんたちそれぞれの顔も、笑っているんだか陶酔しているんだか判別できないほどで、照明もテーブルの上のグラスのすべてがエレクトリックに輝いて視えて、本当に全員がLSDの幻想の中に漂っているようだったんだか

ら。

思うに、富久町のプラスワンは2階にあったのだけど、その夜のパーティは本当は暗黒の地下で開かれていて、あんまり凄くて楽しいパーティだったから、途中で地下と地上をつないでいた梯子が外れてしまっていたことに、誰も気がつかなかったんだな。

村崎百郎さん10回忌おめでとうございます。記憶に自信がない所があり、ちがっていたらすみません。地獄の居心地はどうですか。いずれ後先、そのうち行きます。また。

ウズマキマキオ（映画作家）

村崎さんとの出会いは、30年近く前に『ガロ』誌上で根本敬氏のコラムを読んだのが初見でした。「シベリアから転校してきた、中卒、乱暴魔、ゴミ漁り」などの情報を得て、世の中にはすごい人がいるもんだなと、その時は思いました。

その数年後、ロフトプラスワンにて『ガロ』関係のトークイベントを見に行った時に、初めて村崎さんの実物を拝見することとなりました。ただし、トークイベントのゲストですので、もちろん素顔を確認することは出来ませんでした。まあ、自分としては謎は謎のままにしておくのはあまり気にしない性分なので、さほど気にはなりませんでしたが。

とはいえ、紫色の三角頭巾を被って「例の姿」で登場したので、その奇妙な姿にはかな

りのインパクトがありました。その時のイベントでは、以前の『ガロ』での内容を、さらに詳細に熱く語っていたような記憶があります。

細かい箇所は失念しましたが、そのイベントの中で村崎さんが「変態であればあるほど品行方正じゃなきゃいけないんだよ」と熱く語っていたことはしっかりと覚えています。本物の変態は自分自身の変態性を外に漏らさないように、日常生活は極めて良識的、常識的に行動しなければいけない、という意味だとその時は理解しました。

そのイベントで、「俺はゴミ漁りはするけど、ゴミ出しのときに近所の人と出会ったら、必ず笑顔で挨拶してるんだよ」とか「ゴミ出しのルールはしっかり守る」というようなことも語っていた記憶があります。

さらに数年後。自分が今でも続けている映画イベントの会場にもなっている江古田のフライングティーポットという喫茶店で、コーヒーを飲みつつマスターと雑談していた時に、思いもしない形で村崎さんとお会いすることとなりました。カウンターに座りコーヒーを飲んでいたところ、隣に座っていた恰幅の良い男性をフライングティーポットのマスターから「この人、村崎百郎さんだよ」と紹介されました。当たり前なのですが、紫色の三角頭巾は被っておらず、口髭をはやした気さくなおじさんといった印象でした。

その後、江古田で自分の活動などをしていくうちに、森園さん村崎さんとも仲良くさせていただき、お二人のお宅にもたまに伺うようにもなりました。

顔がわかってきたように、北海道出身、空手の達人、元雑誌編集者などなどと、だんだんと正体もわかってきました。

江古田のブックオフやフライングティーポット、森園さん村崎さんが仲良くママチャリで買い物途中など、江古田界隈で度々お会いすることもあり、最初に抱いていた「覆面を被った究極の変態」から「近所の気さくなおじさん」に自身の印象が変わっていったような気がします。

村崎さんが亡くなってから随分と経ちますが、自分の周囲に稀に出没する「自称変態」や「私変わってるんです」というような人物と会うたびに、今でも例の言葉を思い出します。

そして、そういったちょっと変わった人たち（というか、自分は人とは違う、自分は変わっているんだぞと思い込んでいたい人たち）を見かけるたびに、心の中で「自分は究極の変態と仲が良かったんだぞ」と、思ったりもします。

「変態ほど品行方正であるべし」

この言葉には、いろいろと影響を受けたような気がします。

座右の銘というわけではないですが、しっかりと自分自身の心に刻まれた言葉となりました。

宇田川岳夫（著述家／フリンジカルチャー研究家）

村崎百郎氏とはじめて出会ったのは１９９６年の年末に開催された太田出版の忘年会（一次会）の立食パーティだったと思う。スマートフォンやＳＮＳもなかった90年代半ばには自らの行動をＳＮＳにあげたりすることもなかったので、25年近く前の記憶は定かではない。村崎氏はその当時すでに『危ない１号』などのエクストリームなメディアで有名であり、黒いマスクから片方だけ除く邪眼が印象的な、まさに「文は人なり」といった、既存の道徳律を破壊し続ける魔人という印象が強かったが、会場で出会った村崎氏は大柄な肉体に反した穏やかな語り口で豊かな知性がうかがえた。私は、『危ない１号』の編集者であった青山正明氏とは80年代から交流があって、青山氏については作家と作品が一致していた印象を持っていたが、同じ『危ない１号』に寄稿している村崎氏に初めて出会って「作家と作品は別物」という全く正反対の印象を持った。村崎氏とはイギリスの秘教的アポカリプティック・フォーク・グループCurrent93や、日本の陰鬱なフィメール・デス・フォークと言える森田童子が好きだということで音楽の興味も一致したのを覚えている。さて当日は初対面でさほど突っ込んだ話もできず、結局それが村崎氏とは後にも先にも最後の出会いとなった。あいさつ程度の会話の後、村崎氏は別の会話の輪に入り、私は太田

出版の編集者の赤田氏・北尾氏・H氏、同じく太田出版で書いていた竹熊健太郎氏や大泉光成氏などと会話しているうちにパーティは散会となり、二次会へと流れていった。今となってはもっと村崎氏と会話しておけばよかったと思うのだが、穏やかな物腰の中にもときおり光る邪眼とでもいうか、何かすべてを見通すような村崎氏の眼光が私に躊躇させたのかもしれない。後になって村崎氏の文章や黒田一郎名義の文章を読み返してみると、黒田一郎という知性あふれる人物が、自らの中にいる大いなる獣としての村崎百郎をギリギリのところでコントロールしていたようにも思えたのだ。それは村崎氏の夫人であった森園みるく氏から、彼の蔵書の一部を見せていただいたとき、その思いは強くなった。（特に感じたのはアントナン・アルトーの影響を強く受けていたのではないかということを私見だが付け加えておく。）さて、思い返してみると、あの忘年会やそれにまつわる人々は2020年の今日、すでに故人であったり、出版社を退職していたり、全く別の分野で活動していたりしている。今となっては、90年代後半の「サブカル・バブル」とか「悪趣味ブーム」とか「ニュージャーナリズム」といった一部の雑誌メディアによる高揚らしきものは雲散霧消し、メディアにおいてはポリティカルコレクトネスが求められ、表現の自由度は制約されている印象を強く感じる。読者の皆様は、この電子書籍を読んで、制限のない想像力（妄想力）を奔放に奔らせ、自由な表現を求め続けた人物がいたことを、コロナ禍で閉塞し、口を閉ざすことを余儀なくされ、行動の自由を奪われた世相の中で、一人一人の無意識に刻印（シジル）として刻み込んでほしい。

鵜野義嗣（データハウス社長）

〈データハウス鵜野義嗣社長が語る「鬼畜のススメ」の誕生と悪趣味ブーム〉

～いかにして「鬼畜のススメ」は誕生したのか

「鬼畜・悪趣味ブーム」を生み出したデータハウスの鵜野義嗣社長インタビュー～

村崎百郎の処女作にして唯一の単著である「鬼畜のススメ」は1996年7月にデータハウスから出版された。同社で伝説のムック「危ない1号」シリーズなどを手掛けた天才編集者・青山正明と村崎を中心にして、世に「鬼畜ブーム」「悪趣味ブーム」が巻き起こった。この過激なブームはデータハウスなくして生まれなかったといえる。

「鬼畜のススメ」はどのように誕生したのか。90年代の「鬼畜ブーム」「悪趣味ブーム」とは何だったのか。

村崎の妻である漫画家・森園みるくが、データハウスの社長としてブームを支えた鵜野義嗣社長に聞いた。（佐藤勇馬）

森園みるく（以下、森園）　村崎百郎がデータハウスで「鬼畜のススメ」を書くことになったのはどのような経緯があったのでしょうか。

鵜野義嗣（以下、鵜野）　随分と昔のことですけども、そのころはサブカル系のかなり特

異な……強烈な人たちがデータハウスに集まりだしていて。

森園　青山正明さんをはじめとした？

鵜野　そうですね。僕自身が興味あったのかは別にして、そういう人たちの考えることって面白いので。その中から出てきた企画ですよね。とにかくどこか突き抜けていれば面白いかなということで、そういう企画をどんどん本にしていた時期でした。

森園　なるほど。本を出すにあたって村崎と打ち合わせとかもされたのでしょうか。

鵜野　いや、彼とは企画のことで話したことってあまりないんですよ。

森園　企画を見てからOK出すか決めたりするんじゃないんですか？

鵜野　もちろん、最後にざっとは内容をチェックしますけども、誰かが仕切ってしまったら、きっと面白くなくなってしまうんですよ。まずは放っておいて、好きなことをやってもらって、問題があるところだけ僕が修正すればいいわけで。最終的にどうするかは僕が決めればいいことだから、それまでは自由にやってもらうというやり方でしたね。

森園　サブタイトルの「すかしきった日本の文化を下品のどん底に叩き堕とす」というフレーズも過激ですけど、問題なかった？

鵜野　そうですね。いいんじゃないですか。別に犯罪でも何でもないし。人間が頭の中で考えることって、何を考えてもいいわけです。もし極端なヘイトとかだったら僕個人としては出したくないけど、そういう内容でもないし。思想なんてすべて自由だと思いますよ。

森園　「鬼畜のススメ」はゴミ漁りが大きなテーマでしたけど、それも法律的に問題ないと解釈されたんでしょうか。

鵜野　もちろんね、ゴミの集め方によってとか、書き方によってはプライバシーもあるだろうし。ゴミの内容を発表されたら嫌な人もいるだろうから、そこに配慮すればね。別に盗むわけじゃないいんだし。

森園　確かに、集積所に出されたゴミを持っていくだけですからね。

鵜野　まあ、占有離脱物横領罪と判断される場合もあるかもしれないけど、それも結構あいまいな話なんでね。

森園　村崎と会って話した時の印象とかはありますか？

鵜野　どう言ったらいいのかな……僕としては「大人しい感じ」という印象しか受けてないんですよ。

森園　青山さんからの紹介だったんですかね。

鵜野　確か、そうでしょうね。青山君は……切れるんだけど繊細で弱い（笑）。青山君なんか「頑張ります！」と目を輝かせて言ってきても、3日経ったら連絡なくなったりして。そんなのが何年も続いていたから。それに比べたら、村崎さんはもうちょっとしっかりされていましたよね（笑）。

森園　「危ない1号」に係わったライターさんや編集者さんはたくさんいらっしゃったと思うんですけど、皆さん本当に「鬼畜」というわけではなかったですよね。

鵜野　違いますよね。ただ、どう言ったらいいのかな。ああいう本に載っているのは普通あまり出てこない情報で、本当に必要かどうかといえば世の中にとってあまり必要じゃない。だけど、そういう不必要なものから日常の中で遊びを見つけるというか、一般的な価値観とは面白いと思うものの対象が違っているだけですよね。「鬼畜」というのも曖昧だけど、村崎さんなりの「鬼畜」があったんだろうし。普通の人からすれば「鬼畜」って単に酷いってことですけど、それも彼には一般と違った「鬼畜」があったんでしょうね。

森園　村崎は事件に巻き込まれて亡くなったわけですけど、それについては鵜野社長としてはどうお感じになりましたか。

鵜野　テーマが「究極」のところまで行っちゃって。それに興味を持つ人も「究極」のところに行っちゃう、もっと期待も出てくるだろうし。本を作っている側は抑制もできるし、もちろん社会的な影響も計算してやっているわけですけども……ただ受け取る側って、宗教もそうなんですけど、自分の思いと違った時のものが大きくなる。まあ、結構付き合うのは危険なところですよね。ギリギリのところで。ただ、危ないものをやるならギリギリのところをやらないといけないから、危険は付きまといますね。

森園　当時は別冊宝島、太田出版やコアマガジンの過激なムックなどが続々と発売されて「悪趣味ブーム」「鬼畜ブーム」になっていました。その中でも私は個人的に「危ない1号」が内容で最先端を行っていたと思います。

鵜野　「サブカル」って定義するのはあまり好きじゃないんですけど、もともとは80年代

初期に宝島社さんが始めたのが「サブカル」といわれたんですね。80年代のサブカルって結構明るい感じがあったんですけど、どんどん先鋭化していって過激になっていったのが90年代だと思うんですよ。ただ、他社と同じ事やっても仕方ないし。他がやっていることはやりたくないし。ブームになっても、そこは距離を取っていた感じですね。

森園　当時と比べると、今の出版業界は全体的に最初からブレーキをかけて、危ない方に行かないようにしている感じがしますね。

鵜野　多分まあ、今はみんなそういうことに興味を持ってないんだと思いますよ。ネットなんかでも、誰でも発信できるんだけど個人の発信力はあまりなくて、大手企業とか政府とかの発信力が強烈に以前よりも強くなってきているので。今の受け取る側って、広告と同じようなものを読まされているわけでしょ。大手以外の出版社が昔のような突出した内容の本を出したとしても、世の中の人たちはそれに触れなくなってきているんでしょうね。

森園　今はネット主導だから、以前よりも面白いものが作れる可能性が低くなっているということでしょうか？

鵜野　僕はキツイと思いますね。ネットって発信は平等だし、昔よりも気軽にできるわけですけど、情報を受け取る場合は一方的に大量に流されるものを見ているだけで。多分、人がものを考えることができなくなっていきますよ。まともな情報がこなくなっているから。

森園　以前、鵜野社長は「〝すねた本〟がうけるのって実は貴族文化なんですよ」とも発言されていましたが……。

鵜野　もちろん、庶民だって文化はあるんですよ。農耕だって文化ですから。ただ、それはあまり残らない。文化って結局は、お金持ちが労働しなくなって暇になると生まれるんですよね。で、頭の中で考えることって過激になっていくし、現実とは離れちゃうんだけど、そこから文化がどんどん生み出されていくと。世の中に余裕がないと、日常生活から離れた貴族文化って生まれにくいんじゃないですか。

森園　資料を整理していたら村崎が「鬼畜のススメ２」という企画を用意していたことがわかったのですが、鵜野社長はご存知でしたか？

鵜野　そういう企画があったような、なかったような……。彼って現実をどう変えようというよりは、自分の世界を作っていくタイプ。文学に近い世界ですよね。そういう、人に影響を与えて読まれていくものが世の中にいっぱい出るのは良いことで、それ以外に出版社の価値なんてないんですよ。けど、それもなかなか難しい時代になっていますね。ただ、過激な本って「危ない１号」も１巻と２巻は売れたけど、３巻は売り上げが半分になって、４巻はもうダメ。だから経験上、強烈な本ってせいぜい２冊か３冊くらいまでです。

森園　「鬼畜のススメ」の新作を刊行するにあたって心に刻んでおきます。ありがとうございました。

榎本由美（漫画家）
「村崎先生へ……」

２０１０年のこと

村崎先生といえば
鬼畜というパフォーマンスに
そぐわない
『赤ちゃん泥棒』
（赤ちゃん題材のエッセイ）
の取材をしていただいたことが
思い出されますが

２０１０年初頭
某喫茶店でお会いしたとき
的確なアドバイスして
いただいたことが印象深いです

その頃自分は
ネット上の評判や攻撃に
ナーバスになっていました

「何か行動おこして
攻撃されるかもしれない
と思うと怖いんです.」
と話すと

「それは
攻撃されるかも、
と思った時点でもう
攻撃されてるのと一緒だよ

怖いとか
攻撃されるんじゃないかとか
思い込まない方がいい」

と
当たり前といえば
当たり前ですが
大事なご意見をいただきました。

ネガティブになってると
ネガティブな思考にしか
ならない

それを指摘して
くださったんだと思います

あまり鬼畜ぽくない思い出話で
失礼致しました、村崎先生……

◆カ行
鏡リュウジ（占星術家／翻訳家）

「村崎百郎さん、また怒ってください」
村崎百郎さんとはいったい何度、お酒を酌み交わしたことだろう。若い頃から僕を可愛がってくださった森園みるくさんもふくめ、よくお食事をご一緒させていただいた。
何を勘違いされたか、僕を魔術や秘教の「専門家」と見てくださって、本当はご自身のほうが詳しいだろうに、グラスを傾けながらずっと僕を褒め、立ててくださったことが思い出される。
なのに、僕は、村崎さんを何度も「怒らせて」いる。ご存知のように、村崎さんはご自身、「鬼畜」を名乗っておられて、規範から逸脱している「悪い」人であるというペルソナを付けておられた。けれど、僕にはとてもそんなふうには見えない。僕の知る限り、村崎さんはどんなにお酒が進んでもいつも礼儀正しく、変わらず周囲に気を遣い、そしてどんなときも優しい人だった。だから僕は、よく言っていたのだ。「村崎さんてほんとはいい人なんですよね」。
その度、村崎さんは半ば本気で怒っておられた
「違いますよ、僕は鬼畜で電波なんです！　本当に」と。
それが商業用のペルソナを守る「営業用」の態度であったとは思えない。
きっと村崎さんは目を逸らさず見ていたのだ。世の多くの人が目をふさいでいる、誰の魂の奥にある悪や邪や闇を。巨漢には似つかわしくない、あの純粋な瞳で人の心にひそむいやらしさを、忌むべきものを勇敢に見据えておられたのだ。

だから、村崎さん、また怒られてもいいです。もう一度言わせてください。やはりあなたはいい人なのです。清濁を併せ呑む、あの両義的なダイモーン、アブラクサスのような魂の持ち主だったのです。

いつかまた、僕はあなたに「いい人だ」と言って、怒られるでしょう。そのときを、僕は僕の仕事をしながら、焦らずに待っています。

きょん（エロ漫画家）

「掌の思い出」

初めて会ったのは、ロフトプラスワンだったのには間違いない。みなみ先生が原作を書いている森園みるくさんが、あの村崎百郎と付き合い始めたと聞いて、二人で「えーっ⁉」と驚き、兎にも角にも祝福を！　と出かけて行ったのだ。すると三角頭巾から隻眼だけを出した、自称中卒の工員村崎百郎が近づいてきて「あなたが南智子さんと一緒になられたきょんさんですか～いやあ羨ましい。実に羨ましい」と、ボクの手を握りながら愛想よくいったのだ。三角頭巾をかぶっていても分かる愛想の良さというものは、そうあるものではない。なによりもフワフワとした掌や指が、決して中卒の工員ではないと告げていた。ある夜、森園さんに届け物があって、ボクが伺うとスッピンの森園みるくさんに続いて素顔の村崎さんが出てきて、また「いや～羨ましい！　実に羨ましい」とフワフワとした掌と指で握手を求めてきた。ボクはそれ以降村崎百郎という人を、ずっとフワ

フワとした柔らかい人、血の通った暖かい人だと思っている。衝撃的にこの世を去ろうとも、ボクがそう記憶している限り、ボクにとってはそうなのだ。

クーロン黒沢（ライター）

なんでもありの90年代。鬼畜を気取るライターは掃いて捨てるほどいたが、そのなかにいて段違いの狂○をばらまき、ひとり気炎を吐いていたのが村崎さんだった。

愛読者のひとりだった私は、村崎さんの「アナ○はいいぜえ……」という書き出しで始まるコラムに衝撃を受け、畏敬の念を抱いていたが、そんなある日、共通の知人である編集者・木村重樹さんの計らいで、憧れの村崎さんとアフタヌーンティーをすることになった。

今はなき新宿の純喫茶。入ると、正面でニコニコと手を振る木村さんの傍らで、黒装束でザンバラ髪の不気味な巨漢が、大きな目をカッッと見開き、身体を揺すってケタケタ笑いながら、凄まじくよく通るドスの効いた声でこんなことを叫んだ。

「黒沢さん？　いやァーッ、ゴルゴダの丘でお会いして以来、本当に久しぶりですね。私のこと、覚えてますかッ！」

怪物めいた外見と想定外のセリフに、私はひどく戸惑った。周りにいた何人かの客も、

ギョッとした顔でこちらを振り返り、二度見、三度見していたのを覚えている。
そんな周りの反応など意に介さず、村崎さんは途切れのない独特の語り口で、前回（たぶん、数千年前）エルサレムで会ったときの状況をこと細かく説明してくれた。
青二才だった私は村崎ワールドにのまれ、口も挟めず、流れは自然と村崎さんの独演会となって、彼がこれまで行ってきた奇行のエピソードをこれでもかと聞かされたのは覚えているが、残念ながら詳細な内容は覚えていない。
そんなことより驚いたのは、マシンガントーク中の村崎さんが、口を動かすのと平行して頭やら脇の下をボリボリ掻きむしっては、採取したカスを指先で弾き飛ばしたり、傍らの観葉植物にそっとふりかけたりを、ひたすら繰り返していたことだった。
しばらく黙って眺めていたが不思議でたまらず、勇気を出してわけを訊ねると――。

「ああ？　遺伝子を撒いてるんですよ」

と、事も無げにわけを説明してくれた。
己のフケ、鼻くそ等を外出先でばら撒くことによって、霊的な縄張りを少しずつ拡大しているのだという。ネタと思いきや、その後2時間近くも遺伝子をばら撒き続ける村崎さんの姿を眺め、この人は本物なんだと確信した。

これが村崎さんと（前世を除けば）最初で最後の出会いとなってしまったが、それから四半世紀が経ち、何もかも忘れかけた7月のある週末。暇つぶしに出かけた伊豆の「まぼろし展覧会」で「村崎百郎館」を目の当たりにし、久々、村崎さんのことを思い出した。

このとき、なんとなく気になって村崎さんの命日を調べると、奇しくもその日が十回忌の翌日だったことに驚き、もっと言うとその日の晩、（詳細は書けないが）私の人生を変える重大な出来事があった。

さらにそれから何日もしないうち、今まで交流の無かった森園さんから突然の依頼が舞い込み、この原稿を書いているわけだが、もしかするとあれもそれもこれも、あのとき村崎さんが遺伝子マーキングした領域にうっかり足を踏み入れたことと、何らかの因果関係があるのではないか。と、密かに思っている次第である。

ケロッピー前田（身体改造ジャーナリスト）

「僕らのなかには鬼畜の血が流れている
〜『バースト・ジェネレーション』が継いだ血統」

2018年前の夏、僕は90年代後半からゼロ年代にかけて時代を疾走した伝説の雑誌『BURST』（白夜書房／コアマガジン）を復刊するべく、「90年代サブカル」の全盛期に思いを馳せていた。現在、それは『バースト・ジェネレーション』（東京キララ社）として、創刊号と第2号が刊行されている。

過去を振り返るほど、「90年代サブカル」における村崎百郎の影響力の大きさを感じずにはおれない。実際、鬼畜・悪趣味・世紀末といった「90年代サブカル」の属性をキャラクターとしても体現していたのは彼である。そんな村崎百郎に対する最大限のリスペクトの表明が、創刊号の表紙モデルである姫乃たまを「まぼろし博覧会」に展示されている彼の遺品の前で撮影することであった。

「まぼろし博覧会」とは、2011年7月、静岡県伊東市にデータハウスの鵜野社長がオープンしたキモかわいいテーマパーク。昭和的なものを中心に、蝋人形やマネキン、古本、中古レコード、ポスター、さらには潰れた秘宝館から持ってきた奇妙なエロ造形物まで、ありとあらゆるものが収集され、〝セーラちゃん〟こと鵜野社長の独自のセンスによって陳列され、インスタレーションに仕上げられている。

その様子は世界のアウトサイダーアートもびっくりのトンデモ空間で、根本敬氏曰く、「日本のガウディ、すでにシュヴァルは超えている」という。近年はネット上でも大いに話題となっており、珍奇で不思議で怪しいものが好きなマニアたちの絶好の観光スポットとなっている。東京ドーム並みの敷地面積を誇る「まぼろし博覧会」のなかでもかなり奥まったところに「村崎百郎館」がある。

ひとつの部屋には、パソコンを置いたデスクがあり、背面の壁いっぱいに資料のコピーや雑誌の切り抜き、チラシ、ハガキなどが貼り付けてあり、まるで彼の仕事場を再現しているかのようだ。デスクの上には無造作に数冊のエロ本が置かれ、本棚にも猥褻な雑誌が

溢れている。周囲を見渡すと、壁や柱にも村崎百郎の手書きのメモや誰だかわからないモノクロ写真などが貼り付けられてる。

森園みるくさんによれば、アーティストのマンタム氏の協力により、一年がかりで部屋3つとギャラリースペースを作ったものだという。

そこにあるものは限りなくゴミのようだが（彼のゴミ漁りの成果）、村崎百郎の感性によって選びとられたものでもある。「村崎百郎館」は他の空間とは違う〝何かを感じる場〟となっていた。

『バースト・ジェネレーション』は、村崎百郎の遺品に触れたことで、「90年代サブカル」に連なる血統の証を確かに受け取ったのだ。

「90年代サブカル」の全盛期（１９９６年）は、日本の出版業界全体のピークでもあったという。

『BURST』を作っていた頃、毎号雑誌が出るたびに全国読者からの反響は凄まじく、取材現場に行くたびにトンデモない出来事が起こり、それを〝時代の記録〟として誌面にすることに追われていた。

僕はカルチャーの生まれる現場を目指し、国際規模のタトゥーコンベンションや身体改造の最前線を追って海外に赴くことが多かった。世界で最も過激な現場を目指したのは、死体写真家の釣崎清隆も同じである。僕らは、世界の最前線に立ち会うことから日本の新しいカルチャーが生まれると信じていたし、いまもその気持ちは変わらない。

当時、村崎百郎といっしょに仕事をするチャンスはなかったが、『危ない1号』を立ち上げた青山正明は、白夜書房界隈の名物ライターであり、ボディピアスの記事をいっしょにやらせてもらった。また、村崎百郎が企画したトークイベント『鬼畜ナイト』には、釣崎清隆や石丸元章も登壇している。そのイベントの記録が印刷物として残されていることはいまとなっては貴重である。

青山正明が『危ない1号』の創刊号で「妄想にタブーなし」と宣言したことは有名だが、僕ら『BURST』はリアルを極めることでタブーを超えることを目指していた。そういう意味でも、僕らのなかには鬼畜の血が流れている。

現在、『BURST』は『バースト・ジェネレーション』として復刊し、日本からカルチャーを発信するメディアとして活動を続けている。鬼畜の血を未来にまで届けるためにも。

◆サ行

さかもと未明（アーティスト）

「村崎百郎さんへのオマージュ〜現代の神話になった男」

「彼ができたのよ。今度の彼はね、すっごく頭がよくって、優しくってね。原作まで書いてくれて、アタシ、今最高に幸せなの！」

森園みるくさんが、初めて村崎百郎さんとの交際について教えてくれた日のことは、忘

れられない。
森園さんは、当時「レディコミの女王」の名を欲しいままにしていた。華のある絵柄、都会の匂いのするエロス描写で時の人となり、本人も美人で「女版YOSHIKI」といったビジュアル。一目見たら忘れられない存在感だった。
お洒落も大好きで、家は集めたボンデージやら着物やらで溢れ、それらのコスチュームを活かして、ベルリンで撮影した退廃美あふれる写真集まで出した。そんな漫画家、今までいなかった！　みるくさんは間違いなく当時の女たちの憧れの的だった。

けれど、「好きなことしかしない」「好きな服しか着ない」「したいことは全部する」そういう強さと信念、素直な欲望を持った森園さんは、女から見たらもう憧れのスーパースターだったけれど、男の手には余る女だったと思う。
一体どんな男が、「美人で、才能に溢れ、それをお金にする方法も持っている」女に立ち向かうことができるだろう。森園さんから恋の話をいくつか聞いた事があるけれど、どれも情けない男たちの残念なエピソードばかりだった。
「ものすごいお金持ちの男と付き合ったこともあるけれど、自慢しかしない嫌な奴だったわ」とか、「年下のハンサムで優しい彼もいたけど、あんまり貧乏で頭が少し足りないの

も、イマイチ燃えないのよねえ」と、どの男も帯に短し、たすきに長し、といった感じ。

そもそも男というのは、欲望のダブルスタンダードを持つ生きもので、遊ぶ女なら「派手で美人がいい」けれど、結婚するなら、「ほどほどの楚々とした、何事も中くらいの女がいい」。自分より収入も知能も低ければ、自分は家でふんぞり返っていられるものね。でも、森園さんや私は作家でもあるので、たちまちそんな男のダブルスタンダードを見破ってしまう。

「一発やりたいだけなら、ごめんよ。本気になれるの？　あたしと結婚できるの？」

そんな風に迫る女に、たいていの男は退散してしまう。

でも私たちは、別に一人で生きていたいわけじゃなかった。いつだって、自分を受け止めてくれる男を求めていた。ただ正直すぎただけだと思う。私たちは、男の「射程範囲」に収まるために、『Classy』なファッションに身を包んだり、仕事はそこそこにして男のために味噌汁を作って待ったりできなかった。要するに、私たちはおマタも心も全開過ぎたのだ。男を呼び寄せるための擬態もできない女たち。

「私たちっていつも、『あなたがいないと生きていけない』とか言って、ガス栓ひねったり手首切っちゃう、フツーのつまんない女に負けちゃうのよね」と、私たちはよく笑って話したものだ。

ところがそのみるくさんがある日、「運命の男に会ったのよ！」という。「素晴らしいの。頭が良くて、優しくてね。あんな男に会ったことがない、絶対に私を束縛しようとしたりしないいし、セックスをいくら求めても怒ったりしないし、女の正直な姿をそのまま受け入れてくれる人なの、とにかく頭がいいの、それどころか原作も一緒にすることにしたのよ。彼といるとね、いくらでも創作意欲かわいてくるの‼」

あの森園みるくさんをこんなにトロットロにしてしまうなんて？　そんな男がいるの？　羨ましすぎる‼　いったいそれはどんなかた？？

私は期待と羨望と好奇心と、色んな気持ちをないまぜにして、その「彼氏」と森園さんが一緒に出演しているイベント会場に向かった。当時（１９９０年代）も新宿ロフトワンは、80年代から続くサブカルの殿堂。いかにも森園さんが好みそうなトークショーの会場だ。彼女は彼とそこでトークショーをしているから見てね。といった。私の隣にいる人がその人だから、と。

けれど……その隣に座っている男性を見て私は絶句した。「……あの人は……なにもの？？？」

私は混乱の中に突き落とされた。言葉を失ったと言っていい。
「あの、KKK団が被るような形の、青い三角のごみ袋を被った人は一体？？？」
そう、それが当時「電波系・鬼畜の村崎百郎」として売り出していた森園さんの意中の人だったのだ。本名は黒田一郎さん。

正直初めの印象は、「どんな男だって選り好みできる森園さんがなぜ「ゴミ漁りと下着集めが趣味です」なんて（キャラだとはいえ）いう男性と？？？」という感じ。
そのロフトのイベントでは、村崎さんの奇天烈さにただ仰天したが、一方で喋る言葉は、露悪的ではあったけど、惹かれた。当時問題になっていた言葉狩りとしての差別用語の使用禁止への知的な批判などは至極、まっとうだった。言葉は汚かったけどね（笑）。要するに批判の為のメタファーとしての「鬼畜キャラなのかも？」と、思わせるに十分な知性とレトリックが感じられた。

後日、森園みるくさんと村崎さんがすでに同居していたアトリエを訪ねると、そこに座っていたのは、あのごみ袋を被って奇声を発していた人とは思えない、知的でハンサムかつ温厚な、大人の男性だった。体格はしっかりしていて、ちょっとプロレスラーのよう

な逞しさがある。こんな人に抱かれたら、さすがの森園さんも安心するだろうなと思った。

そして、少し話せば半端でない読書量の歴史があることが分かった。正統的な古典から、学術書、バタイユやバロウズ、クローネンバーグみたいないわゆる暗黒文学や幻想文学、はてはゾッキ本、エロ本まであらゆる書物を縦横無尽に読んできた方だ。だけどとてもバランスの取れた人格、優しさを持っていた。すなわち、逆説的だがとても常識的な方。だから、世の中の非常識を一刀両断できるのだろう。

「彼はね、編集者をしていたの」

と、みるくさんが幸せそうに紹介してくれた。今はみるくさんの漫画の原作も手伝いながら、「村崎百郎」という鬼畜キャラで、舌鋒鋭く現代日本への批評をしているのだと教えてくれた。話せば政治にも日本の歴史にも詳しく、今の日本が抱える様々な問題、精神的な病理について。明確な意見をお持ちだった。その視点には強く肯（がえんじ）ることができた。さらに村崎さんのほうも、私がそのころに始めていた批評家としての文章を評価してくれた。

「未明さんは、ただ本で読んで書くのでなく、ご自身の体験を通し、自分に引き寄せて描くので、とても説得力があります」と言って下さった。森園さんから聞いたのか、私が生

家でいろいろ苦労したこと、親との問題と確執を抱えていることなども知っていてくださり、「私たちは親は選べませんが、友達は選べますから、これからはいくらでも人生をよくしていけますよ」と、言って下さった。

そのあと森園さんがちょっとお使いに行っている間に、私は村崎さんと二人でゆっくり話せる30分ほどの時間を得た。幼いころの親の暴力やなんかの恐ろしい記憶や、鬱やいじめに苦しんだ青春期の話なんかを聞いていただいた。そういうことを、聞いてほしくなる人だった。あとから知ったけれど、村崎さんも凄絶ないじめを体験している。彼はそういう弱い立場の人に寄り添う視線を持っている人だった。また、人を虐めて平気でいたりする人たちの卑劣さや卑怯さに対する激しい怒りを持っていた。それが彼のことを「鬼畜系」にしたのだと思う。

彼が演じる「卑劣で卑怯な」電波系ライターの姿はそのまま、彼が批判したい人々への痛烈な批判になっている。その人たちの卑劣な姿を演じることで。「おい、気づけよ。俺はお前なんだよ。笑ったり、忌々しそうに見ているけど、俺はお前の心の中を映しているんだよ」と言っていたと思う。

今彼が生きていたとしたら、加計・森友問題などには、どれだけの名著が生まれたことだろうか。今の政治や官僚世界は、子供たちに到底見せられない、見せるべきでない卑怯

なふるまいばかりをメディアで垂れ流している。村崎さんは、そういう日本に対して、20年前の当時からすでに、レトリックの効いた、痛烈な批評をしていたわけだ。

私は初めて会った時、村崎さん（本当の名前は黒田さん）の前で、身の上話をしながら、涙を流したと思う。そのときに森園さんがお使いから帰られて「どしたの？」と聞いてきた。村崎さんは「家の話とかを聞いていたんだよ。ほら、君と一緒だよ、彼女も色々あったみたいで」といい、森園さんもすぐ理解してくれて、「ああ、そうよね。でもだからあたしたちは何か表現したいパワーを身に着けたし、結局のとこ今思い通りに生きているし、オッケーよ。アタシも親とはまるでだめだから！」と。森園さんは言ってくれた。そんなところも、私たちの距離を近づけてくれたのだと思う。私たちは傷を抱えた子供の魂のままに大人になった、「アンファン・テリブル」だった。

「子供の時にかなわなかったことを、大人になったんだからみんな叶えてやろう」と、そして、「私たちを苛めたり、今世の中で卑怯なことをしている大人たちをやっつけてしまう」ため、奴らへの復讐のためにも書き続けるんだという、そういう部分が共通していたと思う。

その時村崎さんが私に紹介してくれたのは「異形の愛」（キャサリン・ダン著　河出書房新社）。その後映画にもなったようだけれど、あるフリークスの巡業サーカスの一家の物語で、子供が奇形なほど、客が入るからということで、親がありとあらゆる方法で子供

を奇形にしようとし、その奇形の子供たちをとことん愛し抜くという物語。色んな読み方ができる作品で、村崎さんらしいセレクトだった。

要するに村崎さんは、「どんな子供でも愛されていいんだ」と言いたかったんだと思う。でも実際は「普通」でないといじめられてしまうのが世の中だ。特に日本において。でも、親の血筋が総理大臣だとか、小さい頃から名門の学校にいるとか、ブランド物を一杯持っているとか、そんなことで自意識を増長させている人たちの心こそよっぽどフリークスではないのか。

正直な役人が一人自殺してしまい、その奥さんが「再調査を」と命がけで告発しても、国家権力はそれをなかったものにしてしまう、私たちも、そんなニュースをただ見て文句を言ったり「気の毒」というだけで、デモ一つするわけではない。悪事を見て見逃しているのは、私たちも同じくらい罪深い。

村崎さんが生きていらしたら、どれだけ舌鋒鋭く私たちを、この世の中を批判してくれたろうか。そんなことを思うと、彼の志を何らかの形で私たちも引き継いでいかなくてはと思わずにいられない。

でも、何よりも私にとって村崎さんは、あの森園みるくさんを、「ありえないくらい幸

せにした素晴らしい男の人」として記憶されている。私たちのような、お◯んこ丸出しで本音を語り、男に向かって、血を流しているむき出しの心を「抱いて」と迫る。そんな怖くて飢えた女の代表格でもあり、また最も美しく才能に溢れた森園みるくさんという怪物を抱き留め、癒し、幸福にした。そんな偉大な男が村崎さんこと、黒田さんなのだ。

私だって彼の前で泣いてしまった。彼は、ゴルゴンのような女の首を切るのでなく、癒し、もっと素直だった娘の姿に戻してくれる魔法使いだったのだ。ペルセウスのような逞しさと強さを持っていたけれど、神話の中で例えれば、ディオニュソスのような人だった。

彼の前で女たちは陶然となり、その毒気（酒）に酔って自己を開放することができる……。そう、彼の言葉は刃物のように私たちの心に突き刺さる。さらにその刃物には毒が塗られていて、その毒が私たちの身体に回ると、私たちは躍りだしてしまうのだ。踊りながらあるものは過去の色んな楔から解放され、あるいは己の浅ましいさを恥じ。卑劣なものは恥ずかしさのあまり崖から身を投げてしまう。でもまた生き直せるよう導いてくれる……そんな死と再生を司る力を、彼と彼の言葉はもっていたのだと思う。

まさかの突然の暴力に襲われ、彼は殺されてしまった。ディオニュソスさながらの影響

力で人々を陶酔させ、躍らせた彼は、その言葉の力で魔法にかかったかのような読者の一人に殺されてしまったのだ。まさにそれ自体が神話のような結末。

でも、そのあとの私たちの悲しみは言葉にすることはできない。

村崎さん……すなわち黒田さんの素顔を知る人で彼を悪く言う人など一人もいなかった。彼はそれほどに優しい人だった。森園さんはそのあと何年も人前に出ることができなかった。私たちも、彼女の張り裂けた心を思い、声をかけることができなかった。あれほどに愛し合い求めあった運命の二人。やっと魂を分かち合う喜びを知り、女性として男性として互いに本当に幸福を与えあっていた、あんな理想的なカップルを私たちは他に知らない、その『半身』を奪われてしまった森園さんに、私たちは何もすることができなかった。

しかし、10年以上の沈黙を経て、森園さんは再び立ち上がっている。漫画も描き始め、村崎さんの記念館を作り、その著作の再販などに力を尽くしている。今なお変わらない愛が彼女を支えているのだと思う。私は確信する。村崎百郎は、灰の中から再生したディオニュソスのごとく、いずれまた私たちの前に姿を現すだろう。彼の活動や著作。その活動は、永遠に忘れられることなく、引き継がれなくてはいけない。ずっと秘儀として継承されてきたディオニュソス信仰のように。

私たちは心の中に、だれもが闇を持っている。それを引きずり出し、瞠目してみなくてはだめなのだ。見つめて、それを食らう、あるいはコントロールする意思を身につけなくては、鬼畜道を生きるしかない。自分の心の中にある暗黒を「ない」ものとして隠すほどに、私たちの世界では卑劣な振る舞いが跋扈する百鬼夜行の闇となる。

それではならぬと彼は警鐘を鳴らし続けたのだ。踊り狂え、尻を出し、卑劣なるふるまいを、性的なる欲望のままにそれを吐き出してしまえと。さもなくば自分の臓物を引きずり出すようにして己の卑劣さと向き合えと。

私たちはこれからも彼の言葉から陶酔と自己批判と解放の恩恵を受け続けよう。そしてこの世界を彼が見たようにして、ごみ袋を被り、そこに空けた穴から、暗闇から見つめてみよう。そこから見える私たちの住む日常のなんと歪（いびつ）なことだろう。

「不正」を決して許さず、卑劣なる権力者におもねることなく、私たちは暗闇を生きていこう。異形の弱者であり続けよう。

其れが、私たちの誇りだ。村崎百郎の説いた「鬼畜系」の裏街道を歩き、表通りで裸の王様とパレードをする人々を笑おう。

世界がどんなに歪んでいても、自由で愛に溢れた世界は私たちのものだ。

それは、世間の光とは反対側の闇の中にしかないけれど、その中では私たちは何も持た

なくていい、贅沢をするために嘘をつき、友達を売ったりしなくていい。当たり前に、純粋に生きる道を、彼は「ゴミ漁り」という手法を通して説いたのだ！　まさに、天国～PARADIS～に住む方法を。

村崎百郎とその精神の継承者たちに、そして我々の女王、森園みるく氏に祝杯の盃を捧げたいと私は思う。彼の説いた暗黒の世界は不滅であり、今も異形なる愛に満ち溢れているのだと。それを継承する夜の女王、森園みるく氏にも栄誉と感謝の盃を皆で捧げよう。彼女は彼を復活させる。彼の人生と活動の証を広め続ける。

私も又、その一人に加わることが出来たらと、願わずにいられない。

そして、今回こうして私に、村崎さんについて書かせてくれた森園みるくさんに、心からの感謝を差し上げ、筆をおきます。

２０２０年9月18日

GENET（AUTO-MODリーダー）

「鬼畜電波大魔神村崎百郎復活　今電波の時代に降臨せり」

村崎百郎氏とは過去一度電話で話した事がある。僕と村崎さんとのコンタクトは、後にも先にもその一度だけの接触で終わってしまった。しかも其れは、奥様の森園みるくさんに電話した時、至極普通に、しかしとても丁寧に『ちょっとお待ち下さい』と電話をとりついで頂いた唯其れだけの事であった……。僕はその時森園さんの旦那様が村崎氏であるとは知らず、まあ森園さんの同居人が繋いでくれた位にしか捉えていなかった……あの時僕と村崎氏とは、交信が出来ていたのだろうか……。残念ながらその時僕には、なにも聴こえて来なかった……。亡くなられた後、森園さんから、村崎氏が僕に熱烈なシンパシーを持ち、レコードやCDを全部購入して下さったり、ライブにも何度も足を運んで下さって居たとの事を聞き、あの村崎百郎が……、と驚き、同時にそこに出会いが無かった事に、無念さえも感じた。

電波系、鬼畜系、そんな言葉昔流行ったなと思いつつ、実は今、村崎氏の事を思うに、彼って本当に電波を受けてたんじゃないかなと思える様になって来ている。彼の三角頭巾に一つ目のスタイルは、実は第3の目を開化させての電波を感じ取る手段だったのでは無いか……。僕は元来人間は縄文の日本やウバイドの地で宇宙からの意志を第3の目（意識の目）で受けていたと考えている。当時は人類も生まれたばかりで、その思考も宇宙又は神に準ずる至極ピュアなものであった筈だ。お互いが反応し合い、共鳴し、それは真理に近い物だった筈。其れが当時の人類のコミュニケーションであり、文化そのものだった筈だ……。本来神に作られし者達はそんなチャンネルは持っていた筈だ。しかし今そんな

チャンネルを持った人間が現代の汚物思考の混沌に放り出された時、その無垢なる純粋さは、一瞬にして崩壊し、その全ては邪悪なる闇へと堕ちるしかない。

つまり、やられてしまったって事でしょう。村崎さん、持ってたんですよ。村崎さん、だから、やっぱりやられちゃったんですよ。村崎氏が盛んに自らをキ〇ガイと呼んで居たのは、あの20世期末の日本の狂〇に耐えられなくなっての足掻きだったのか……。もしくは本当に他の人間達とは、その内に流れる気が違って居たのか、いずれにしろ、村崎氏はきっとあの一つ目三角頭巾に、まさに気が違う程の暴力的自我を閉じ込め、その覆面で封じた古代の〇気と憎悪を、あの暗黒の深淵の象徴の様な一つ目の奥から、彼を排除した社会に、電波と言う武器を持ち、最大限に反撃をして居たのかも知れない。

今時代はコロナ騒ぎに端を発し、グレートリセットとばかりにAI社会を目指し、金融、経済、ライフスタイル、社会意識、社会構造、管理体制と何もかも変えてしまう正に大激変の真っ只中にある。その中で気をつけ無くてはならないのは、今回の世界的コロナ渦の裏でワクチン摂取の義務がマトリックス新時代への生存権を得る為の通過儀礼、デストピアへの踏み絵として用意された事だ。このワクチンなる物の得体の知れなさと言ったら半端ではなく、水銀やアルミニウム等から始まり、数知れぬ胡散臭い物質が多数混入されている。そして、今時代は5Gと言う電波を巡り、中国とアメリカは隠れた戦争迄起こしている。そしてこれは電波戦争でも有り、新時代の覇権戦争でさえある。

5Gは金属に激しく関与できる。当然身体の中の金属にも激しく関与する事が出来る

のだが、その事は殆ど言われる事は無い。又呼吸器系の障害を引き起こす事も出来るとも言われている。問題はそのワクチンに更にマイクロチップ迄入れられたりして、そこに5Gで電波操作されたらどうなるか……。

結局、電波なんです。

今、電波魔神村崎百郎が生きてたら、こんな今をどう見るのか、そして今彼は、どんな電波を受けて居るのか、切実に教えて貰いたい。いや今、この5Gの時代だからこそ、電波大魔神村崎百郎が必要なんですよ。今正体を晒そうとするマトリックス社会、真実のデストピアの出現、鬼畜電波魔神村崎百郎は復活しなくてはならないのです。しかし、そんな彼は死んでしまった。彼は自宅を訪れたキ◯ガイの青年に刺殺された。

驚く事に彼は自分のその死を予言して居た。信じられない事だが、事其れが村崎百郎ならば、有り得る事となってくる。しかも、其れから察するに、彼は自分の死さえも、操作して居た気さえしてくる。村崎さんは自らへの殺意を仕掛けたんじゃないかな……。電波は伝わる奴には伝わるものだ。きっと村崎さんには古の邪悪なる血が流れて居たんだろう。

ふと思うに、彼は自分を生贄にしたんじゃないかな……。神は試行錯誤の中、アダムとイブと、其れを誑かしたヘビも造っていたんですよ。アダムとイブの血統が在れば、ヘビの血統もあった筈。ひょっとしたら、村崎氏はレプテリアンの血を引いて居たのかも知れない……。故に、彼は自らを鬼畜と言い放って居たのかも知れない。村崎百郎が放つ電波

の時代は今なのだ。
鬼畜電波魔神村崎百郎はもう直ぐ復活する。いや、きっとその為に彼は死んだんのだ。
『ミズの中からさざ波を立てて移動しながら浮かび上がる十字架のイエス像』　邪悪なる復活はもう、始まってるのかも知れない……。

須川善行（編集者／元「ユリイカ」編集長）

村崎百郎が亡くなって10年。時の経つことの早さには驚かされるほかないが、それ以上に世間の常識の変わり身の早さには唖然とさせられる。しかし、いま読んでも村崎の挑発力がまったく衰えていないことにはともかくも頭が下がる。村崎は自分の中を掘り抜いて、ある普遍的なあられもなさに到達したのだ。人はみなこの恥部を抱いたまま、生きていかなくてはならない。村崎百郎という恥部を。

砂（漫画家）

「防疫のない世界から」
家が近所だったので、生前の村崎さんとはむしろ街角でばったり、古本屋やカフェなどでお会いすることが多かった。鬼畜の紫頭巾ではない村崎さん、だがそれを素顔とは言うまい。それも村崎さんの仮面であったはずだ、私たちと同じように。そんな村崎さんはいつもニコニコして優しかった。うるせえ！　の人である。他者の声がノイズとして脳髄に

割り込んで来る人である。仮面というほかない。昨日の夜はうるせえ！　になって大変だったのよ、と言う森園みるくさんに、村崎さんはパソコンでいえばファイアウォールが、セキュリティソフトが無い人だものね、と笑い話にしたことがある。帰宅した森園さんからそのパソコンのたとえを聞いた村崎さんも笑っていたそうだ。そう、ウイルスにさらされるがままのパソコン、他者の声のノイズにまみれた脳髄、今なら少しその感じがわかる気がする。このインターネットの、SNS以後の世界なら。心温まる話として胸糞悪い話がバズって流れ着き、可愛い動物画像は無断転載する業者のもので、世界中のすべての悲惨に心を寄せよと善意は搾り上げ、右を見ても左を見ても薄汚い憎悪と嘲笑にまみれている。うるせえ！　なるほどこれはたしかにうるせえであるし、自然と心もささくれて来ようものだ。私もカッとなって怒りにまかせてつぶやいてみようか、そして憎悪と嘲笑で憂さを晴らす右や左の紳士淑女の複製になるのだ……。だが憎悪と嘲笑、その言葉は同じながらも、それらは村崎百郎的憎悪と嘲笑からなんと遠いことか！　まるで似ていない。村崎さんはいつもニコニコしていて優しかった。素顔は優しい人だった、などという話ではない。それは仮面だ、そうなろうと化けるものだ。うるさい他者の声のノイズにまみれながらそれに感染せず、逆に人はなおいかにして優しくなれるか。それはまた、他者の憎悪と嘲笑を復唱するデッドコピーにならず、いかにして自分だけの憎悪と嘲笑を語る者になれるかと表裏一体のものだろう。私たちより少し先に、村崎さんはどうしたらそうなれるのかを試して生きていたのだ。

ソワレ（シャンソン歌手）

親愛なる森園みるくさんの最愛のお方をご紹介戴いたのは21世紀がはじまって4年程過ぎた頃。

お昼のPARCO劇場エレベーター前。黒い出で立ちと赤い唇とサングラス。二つの寄り添う影。

振り返ると忘れられない瞬間というのはそう多くは浮かばないものです。

公園通りを通るたびにあの日のことが蘇るのは村崎百郎さんの存在感とその個性が鮮明に刻まれているからでしょう。

人の心とはそういうもの。それぞれの村崎さんをもう一度咀嚼出来るだなんて素敵！

永久なる鬼畜な新刊に乾杯！

◆タ行

釣崎清隆（死体写真家）

私、釣崎清隆は死体写真家である。「鬼畜系」である。いまだに「鬼畜系」を名乗って活動を続けている唯一の現役アーチストである。あの文芸運動において生き残った最後の「鬼畜系」を自任している。そして、あれから二十年、当時は時代の恩恵にあずかってお きながら、それを恥じるかのように「鬼畜系」の看板を下げ、過去を抹消し、現在素知ら

ぬ顔をして蔓延するポリコレに阿るあまたの悪趣味系文化人たちとは一線を画し、「鬼畜系」を今まさに声高に叫ぶ必要を感じている。

先日、バイト先で若者にこう話しかけられた。「釣崎さんて、鬼畜カメラマンなんですか?」私のことをスマホで検索したようだ。「『鬼畜』カメラマンて言い方はないでしょう。『鬼畜系』カメラマンです」

村崎さんの本意とは異なるかもしれないが、私なりの理念をもって「鬼畜系」に殉死する覚悟である。

◆ナ行

流水りんこ（漫画家）

村崎先生のこと、今更ではありますが心よりのお悔やみを申し上げます。

もう10回忌なのですか。時の流れの速さに驚きます。

また村崎先生の作品の刊行、素晴らしいことだと思っております。

作家として作品が残っていくことは夢のようなことです。

私が村崎先生とご縁があったのは1度だけ、『赤ちゃん泥棒』の取材で、うちまでいらしてくださったことがあったのみでして……。

村崎先生の素顔をそれまで私は存じなかったもので正直驚きましたが、本当に穏やかで物言いも優しくて、というのを覚えています。あれはうちの子供達を怯えさせないように溢れんばかりに気遣いをされていたのだと思います。

そのせいで、最後にはうちの母まで村崎先生に懐いてしまっておりました。

村崎先生は姿のインパクトと心遣いがこれでもかというくらい違って、思い出すたびに思わず　笑顔になってしまうと言ったら失礼でしょうか。本当に忘れ得ぬいい思い出です。

二村ヒトシ（AV監督）

「こぎれいな明るい場所」

いつごろだったか、どこだったのか忘れてしまったのだが、こぎれいなラウンジみたいな明るい場所で、ゆったりしたソファーに腰掛けて、人間が3人で話をしていた記憶があります。

3人のうちの1人が、まちがいなく村崎百郎さんだった。もう1人は、たしか福居ショウジン監督だったように思うのだが、福居監督ともその後ずっとお目にかかっていないので確かめられていません。

ホテルのロビーのような場所だったのかもしれない。昼間だった。あたりは清潔な感じだったような気がする。

村崎さんは、覆面をかぶっていなかった。

何の話をしたのかもまったく覚えていないのだが、村崎さんは話しながら、ご自分の髪の毛に手をつっこんで、爪を立ててひっ掻きまわし、ちぎれた髪の毛や剥落したふけがある程度の量、爪や指のあいだにたまると、それを撒き散らすのではなく、周囲の床のタイルだったか絨毯だったかに優しく置くように、ふわり、ふわりと落としていた。

ふけの粉がゆっくり落ちていった。

村崎さんが我々に「こうしてDNAを残していくようにしているのです」と静かにおっしゃったような気がするのだが、もしかしたら記憶ちがいで、村崎さんのしぐさを見た福居監督がそう評したのだったかもしれない。

いったいどうしてその3人でその場所にいたのか、さっぱりわからない。大きな窓から外の光が差しこんでいた。

◆ハ行

比嘉健二（元「GON!」編集長）

エ、本当にそこのゴミ漁るのかよ、まったく頼むにはいいけど、万が一何かあったら責任とってくれる、わけないよな。ホント、あの編集長は顔色一つ変えず、淡々とこういう

きつい依頼してくるからまったくとらえどころのないゲスな野郎だぜ。でも、ま、いいか。女子大の寮のゴミなんて野郎なら誰だって覗き見たいよな。

清楚な顔して汚い汚物まみれのタンポンやらナプキンもあるに違いないし、マ◯汁まみれのパンティだって今夜あたりは収集できそうな予感がするぜ。おまけにもしかしたら、男をひっそり連れ込んでよがりまくった証のザ◯メンたっぷりのコンド◯ムもゴロゴロ出てくるに違いない。

そんな連れ込む男のいない寂しいメスどもが使いまくったぶっとい大根やニンジンの残骸も収集できそうだ。そう考えたら何やらえらく興奮してきたぜ。今夜は同行するあの雌猫の編集者をゴミ収集場で押し倒しても俺のせいじゃないぞ。あの雌猫いい乳してるもんな。そういえばあの雌猫が担当になる時、編集長は乳揉みは自由にどうぞって言ってたもんな。今夜がその夜だぜ。

では今夜依頼どうり、ミッション系の女子大寮のゴミを勝手に収集だ。帰りに汚物まみれのパンティを被ってる俺が目に浮かぶぜ。

これは1996年『GON!』8月号の連載「村崎百郎の勝手に清掃局」の連載11回目「ミッション系大学女子大寮のゴミ漁り」当日を俺が勝手に妄想したものだ。思えばこんなゲスで下品な企画を4年間も続けたものだ。おまけに都内中の汚物をかってに回収したのをわざわざカラーページで読者に提供してたんだから、よくよくどうしょうもない雑誌

だ。今なら関係者一同ブタ箱行きだろう。連載当初はエリアとか地域斬りしていたが後半から俺も村崎さんも頭が完璧に腐りかけ、「修道院のゴミ」だとか「風俗嬢のゴミ」だとか果ては「クリスマスイブのラブホのゴミ」なんて次第に野郎のゲスな願望と妄想が次第にエスカレートしていった。

おまけに、おメガネにかなった女性スタッフは軒並みかってに生ゴミを回収させられその恥を紙面にさらされもした。

返す返すもひどい雑誌だ。こんな最低のクズ雑誌だから適当に手を抜けばいい企画なのに村崎さんはホントガチで取り組んでくれたのが素晴らしい。こういうゲス雑誌こそ真剣に取る組まないと恥ずかしいだけだ。

そういう意味でも『GON!』イコール〝ゴミ漁りの雑誌〟と連想する読者も多数いたのはこの上なく誇りに思ってる。

ありがとう村崎さん。合掌

福居ショウジン（映画監督／演奏動画（VJ）／TVBARけむり（マスター））

村崎百郎氏と初めて出会ったのはイベント打ち合わせで新宿の喫茶店だった。

事前に『鬼畜のススメ』を渡されていて読むのになんか嫌な抵抗感を感じていたのを覚えている。パラパラとページを捲るんだけど頭に入って来ない。これホンマの変態が書いたシャレにならん本やろ。俺が人の事を変態とか言えるポジションに居ない事は分かってて

いる筈なのにこの触れたく無い感が甚だしい『鬼畜のススメ』、初日は全く読むに至らなかった。翌日思いっきり酒を飲んで確かマイヤーズラムをお湯割にして飲んだ様に記憶しているけどもしかしたら二階堂のお湯割りかもしれない。ともかくかなりのハイペースで一本飲みながら再びパラパラと捲り目に飛び込んでくるワードと言うか下世話な単語が生々しくというよりナマ臭く生理的嫌悪感に満ち溢れながらフッと気がつくと前に戻って読み返し更に先に読み進めまた前に戻って読み返すを繰り返していたのだ。一文字でも理解出来ないと前に戻って読み返しているうちに物凄い集中力が湧いてきて限界に来ていた吐き気や生理的嫌悪感がむしろ淀みのない勃◯力へと移行していき吐き気と快感が表裏一体となってどんどん読み進めていくスピードが加速し一言一句が嘘みたいにスポンジ状態の脳に吸収されていく快感が今でも忘れられないでいる。これ体感型の今までに無い探偵小説的マニュアルやないか！　もしかしたら今後CIAやMI6、モサドがバイブルにするかもしれない。いやもしかしたら百郎さんが諜報活動的な方法論を徹底的に研究した結果なのか？　それにしても読み終わったこの感触は初めての体感だ。酔いは覚め頭の中は実にクリアーでもう一度読み始める。再びあの快感を体感する為だ。

スタッフと二人で待ち合わせの30分前に到着し多分、いや絶対マスク（覆面）を装着して来るから目立たない一番奥の窓側席を確保して百郎氏を待つ。珈琲よりビールやろな。いやいや絶対にバーボンや。ツマミどないしょ？　チーズとかソーセージの盛り合わせかな。もしかしたら腹減ってってなんか食うかもしれんな。あれこれ考えながらどんな怪物が

来るんやろと身構えながら数日前から鍛えていた筋肉を確認しつつ益々テンションが高まって来たタイミングで目前に物凄い長髪で黒いピチピチのTシャツ（この時はまだチビTは発売されていない）のレスラー的な感じの人物が現れる。想像していた覆面姿とは全然違うが発する熱量が物凄く一瞬で百郎さんやと直感し次の瞬間にはお互いに挨拶を交わしこちらは直ぐにハイテンションな状態で色んな事を凄まじい速度で喋っていた。初めて会ってこんな状態（しかもノンアルコール）になったのはなかなか無い事で何度か客観的に抵抗しながらもグイグイと百郎ワールドにそのまま引き込まれていった。この人はプロデューサー的な人なのか？　最初に『鬼畜のススメ』を手にした時に感じたキ〇ガイなのか？　それとも変態なのか？　どれも違っていた。全部の要素を含んでいるようでこれもまた違う。ただ話が進行していくうちに脚本家と監督の次回作の企画会議的な場に展開していく。トークイベントの打ち合わせだった筈がこんな感じだ。百郎氏の壮大なSFプランはこれまで読んで来たどんなSF小説よりも刺激的で斬新で今までに無い全く新しい感触のものだった。長い髪の毛を手櫛ですきながら指に絡んだ髪の毛を床にハラハラと撒き散らして……。はたして髪の毛の意味するものとは？　この光景は一生脳裏に焼き付いて離れないだろう。百郎氏の大切なアイディアなのでこれ以上は語らないけどともかくその時浴びた感触を今でも何かのタイミングで思い出す。『鬼畜のススメ』を書き上げた凄まじい観察力で創造するSFプランはリアリティを超え現代（２０２０年）を間違いなく予測していた。予知と言った方が的確かもしれない。アメリカの技術は10年先を走っていて

一般に普及されるのは10年前の技術だという認識が巷で語られることが多いが、実は遥か50年先を爆進していてSF的想像力を持ってないと恐らく受け止められないレベルが展開しているらしい。もし生きていたらの〝もし〟は実にナンセンスかもしれないが、百郎さんなら確実にテクノロジーを操り最先端の場で次なる時代を先導していたに違いない。時代が漸く百郎さんに追い付いたんだと思う。しかも百郎さんは更に先に進みまた遥か先をノシノシと歩み進んでいるに違いない。

丁度この時期は森園みるく氏原作の映画化企画を進めていたタイミングで、たまたまなのか、それとも必然なのか、そうなる運命だったのか、両氏からほぼ同時に〝逢いたい〟と言うリクエストを受けお二人を引き合わせる事になる。今これを書きながら改めて確信している。これは運命だったんだ。そしてこの時代に10年という時を経て改めて村崎百郎氏の事を脳内で展開させるのは、これもまた運命だったんだ。

◆マ行

三浦悦子（造形作家）

みるくさんの所に私の人形が居ます。みるくさんがご生前のときのお話をさせて頂きます。村崎さんがご生前のときのお話をさせて頂きます。

村崎さんからご連絡がありご自分が大切にされている本を私にお渡ししたいということでした。今思うと村崎さんはみるくさんが好きな物や人を大切にされているからでしょ

う。
私はウルトラマンの「この人に近づいちゃダメセンサー」を持っています。なんと村崎さんとお会いしたときに光りました。折角の本も貰うのが怖かったのです。しかも題名が「黒魔術」……何度も読み返しているであろう本の形跡……。
しかし人間こうなると逆に興味が湧くものです。
結局読みました。本は村崎さんのおっしゃるように変に宗教的だったり呪いなどではなく論理的ですんなりと楽しく読ませて頂きました。読み終わった頃には怖さもなくなり、なるほど！　村崎さんってこおいう方なんだなと納得した気になりました。ごめんなさい！　私のウルトラマンセンサーもあてになりません。

ピュアなお心の村崎さんどうかお静かにお眠り下さい。あなたの生きた形跡は消えることなく皆さん深く感じている事でしょう。

目黒子（江古田・フライングティーポット洞主）
「村崎百郎さんと、プログレとか、江古田とか」
村崎百郎さんは、私が江古田でプログレ喫茶フライングティーポットを開店した１９９７年の６月頃から姿を見せるようになりました。

ピンクフロイドやサードイヤーバンド、ロバート・ワイアットなどがお気に入りだったですかね。
そう言えば「プログレは寒いところの方が良く聴かれるんだよ」みたいな事を言ってました。
彼も私も北海道出身なのですが、寒冷の地方ほど引きこもって聴くような音楽（プログレ）に夢中になるんだと言うことでしょう。
まぁ、言い得て妙と。
ロバート・ワイアットの新譜の話をしたり。
ロジャー・ウォータースのライブ会場でバッタリ。
クラウス・シュルツェのライブにお誘いしたり。

私は、神保町の大型書店で働いていたことが有り、彼の文章も読んでいました。
同僚達とも彼の下品でユニークな文章が話題になったりもしていましたね。
後で、ペヨトル工房に勤めていたと知ったのですが、
担当していた音楽・芸能・演劇・映画の棚にはペヨトル工房の本も多く入れていて、
ちょっとした縁が有るものだなぁ、などと思いましたよ。

一緒に来店された方に村崎さんを紹介された時にも、なんとなく驚きは無かったという

か、
何故か身近なところに居ても不思議は無いような気がしたのです。
これが、電波の導きというヤツでしょうかね？

それからも、何くれと無く文章でフライングティーポットを紹介してくれました。
イベントに出演者として参加してくれたことも何度かありましたね。
そして、森園みるくさんの漫画に登場することもしばしば。
村崎さんの文章を読んで、訪れてくれた方も少なくありませんでした。
ノイズイベントを行ってくれるようになった方も居るくらいです。

以前は近隣の大学生の中に村崎百郎ファンも多かったですね。
常連大学生が「中卒、工員でこんな面白い文章を書くなんて凄いです」なんて言うものですから、
「欺されるなよ、北海道生まれ、明大卒、出版社勤務経験者だぞ」と業務妨害的暴露。
「えぇ～がっかりですよ」なんて言うので「何言ってるの、鬼畜なんだから、そのくらいの嘘なんてへっちゃらなんだよ」と、
「あっ、ホントそうです。やっぱ凄いですね」だって。
ははは、大学生、チョロいぞ。

そして、何と意外にも女性ファンも少なくなかったのです。

今でもフライングティーポットの本棚に入れてある村崎本を読み始めた女性客が、興味を持って村崎さんについていてたずねて来ることもあるくらいです。

江古田の町中でも見かけると挨拶を交わしたりしてましたが、古本屋で棚を物色している姿が真剣そのもので、何か気後れして声をかけられなかったことも度々ありました。

村崎さんが亡くなってから後、世界中に起こった災害、事件、政変などなどについて、今こそ鬼畜力を全開にした彼の文章が読みたかったと思えますよ。

もっと、無理にでも色々と話をしておけば良かったとわけですが、これはばかりは……。

村崎さん、死んでる場合じゃ無いですよホントに。

Wish You Were Here ですよ。

◆ヤ行

安田理央（フリーライター／アダルトメディア研究家）

村崎さんと木村重樹さんが各界クリエイターや業界関係者の赤ちゃんを見に行くという『赤ちゃん泥棒』という『スタジオボイス』誌の連載があり、そこに当時生後４ヶ月の娘と僕が取材されたことがあった。

僕の事務所に入ってきた時、村崎さんは例のマスクを被ったままで、結局最後までマスクは取らないまま帰っていった。僕は「ああ、徹底して素顔は見せない人なのだな」と感心した。

それからしばらくして、娘をベビーカーに乗せて散歩していたら、長髪でヒゲを生やした悪役プロレスラーのような男がいきなりニコニコしながら「わぁ、○○ちゃーん、ベロベロバー」と娘の名前を呼びながら近づいてきた。もちろん僕は「うわぁ、やべえ奴！」と身構えたが、それが村崎さんであった。

実は自宅がすごく近所だったのだ。でも、素顔知らないんだから、わかんねぇよ！　驚くよ！

結局、実際に村崎さんと顔を合わせたのはその2回だけだったが、近所ともあって行きつけの店が重なっていたりして、話はよく聞いたりしていた。だから、あの凶報を知った時も、あまりに身近でゾッとした。

あれから、もう十年という時間が過ぎたのか。僕も隣町に引っ越したし、『赤ちゃん泥棒』で取材された娘も、もうとっくに成人している。記事の中で僕は、若いうちにさっさと結婚して子供をボコボコ産んじゃうような子になってくれればいいなぁ、と話していた

が、残念ながら孫の顔は当分見られそうにない様子だ。これで孫が生まれてれば、無類の赤ちゃん好きだった村崎さんの墓に見せに行ったところなんだけど。

湯山玲子（著述家／プロデューサー）

ＳＮＳ以前、まだ世間がオモテの建前で動いていたときに『鬼畜のススメ』は、きちんと「人間なんて所詮ゲス」という影を示して、世界は健全だった。そして、現在はご存じの通り鬼畜がその意識もなく跋扈する時代。村崎百郎が今、生きていたならば、何を表現しただろうか。

萬眞理子（編集者／株式会社シュークリーム代表）

「森園さんと村崎さんのこと」

森園さんと最初にお会いしたのは１９８６年の夏前くらい、当時は大人の女性向けのレディス漫画雑誌が創刊花盛りで、まだ少女漫画を描いていた森園さんに、今の『フィールヤング』の前身『微笑フィール』での執筆を依頼したのが始まりです。

時はバブルの真っ盛り、レディス漫画も全盛期を迎え、森園さんのオシャレな絵柄と、余計なものを一切省いたスピーディな作風、女性主体の恋愛＆性の描写が時代にマッチして売れに売れ、レディスの女王と呼ばれるまでになって、一世を風靡していたのです。

そんな女王様の素顔はとても気さくで、とにかく元気、美味しいものとお酒と男が大好

きで、そして占いやオカルトも大好きなのでした。

で、その頃、森園さんに頼まれて、とある霊能者の先生をご紹介したのです。その先生はかの『うしろの百太郎』に登場する船越先生のモデルとなった方で（漫画では男性ですが、実際には女性です～）、当時離婚したあと彼氏ともうまくいかなくなっていた森園さんは、一も二もなく将来の結婚について霊視してもらったのでした。

「あなたはね、なんかこう大柄な……プロレスラーみたいな男と結婚するよ」

先生は森園さんの背後をじっと見つめながら、どう言えば良いかなぁ？　という感じで「プロレスラーみたいな」と表現されたのでした。後になって、「あれは村崎さんの事だったんだね～！」と、二人で言い合ったものです。

先生はこうも仰いました。

「あなたの魂はとても若いのね。だから今はなんでも面白くて興味津々で、怖いもの知らずで首を突っ込んでは痛い目もみるけど、彼と結婚すると落ち着いてね、素晴らしい成長ができて、理想の女性になれるかもしれないよ」。

ちなみに「魂が若い」というのは、転生した経験が少ないという意味です（笑）。

（理想の女性ねぇ……締切守んないわ、掃除はしないわ、1日が40時間くらいでぐるぐる回っていて一旦寝ると起きられない森園さんが理想の女性になれる結婚って……そりゃそうなったら素晴らしいでしょうけどね……）。口には出さずにそんな失礼なことを思っていた私でしたm(_ _)m

思います）。

さて森園さんと結婚されてからの村崎さんは、かなりの時間と労力と才能を、森園さんの原作に注ぎ込みました。それまでいろいろな方の原作を手掛けていた森園さんですが、結婚してからは森園さんの方も村崎百郎原作をメインに執筆するようになり、担当の私もよく長時間3人で打合せをさせていただいてました。

そんな時、打合せがてらいろいろなお話を伺う事も多く、ああ、この人は視えたり聴こえたりする人なんだなぁ……と、つくづく思ったものです。

最初に村崎さんに原作をお願いした作品は『フィータス』というタイトルで、殺人を犯しても目撃しても、何も感じない女性が主人公で、当時はまだあまり知られていませんでしたが、今でいうサイコパスものでした。そういう人間が本当にいて、奴らは最低なんだという話をずいぶん聞いたような気がします。でもそれは、本当にそういう人間で、悪気はないのだとも。自分でもなぜ自分に感情がないのかわからない人たちなのだと……そういうお話でした。

そして、ドッペルゲンガーを目撃したり、夏前の空に響き渡る特攻隊員の叫び声を聴いたり、自分がアタマのおかしい人間に殺される幻影を視たりなど、とにかくいろいろ視えたり聴こえたりして煩くてしょうがないのだとおっしゃるのでした。

ご自分では電波系と名乗ってらっしゃいましたが、私的には霊感体質の方なのだろうな

それから10年ほどの月日が流れ、本当にプロレスラーのような男性が現れ、あれよあれよという間にお付き合いを始め、一緒に住む事となり、そしてご結婚！（といっても、婚姻届を出すだけのシンプルなものでしたが）されたのでした。

結婚届の証人欄を頼まれて、私の旦那や息子も一緒にみんなで食事に行ったのですが、たぶんその時が村崎さんとゆっくりお話した最初かな？　と思います。みなもと太郎の『風雲児たち』を熱く語ってくれて、その後コミックスを購入してみたら家族でハマってしまい、今でも新刊を楽しみに読んでいます。

著作や業界内でのイメージはともかく、私はいつも優しそうなニコニコした村崎さんしか知りません。私には息子が二人いるのですが、ある日偶然近所の公園で村崎さんと出会い、少し遊んでもらい、その風貌と実際には優しい人柄から、それ以来息子たちは村崎さんのことを「ハグリッドのおじさん」と呼んでいたくらいです。こまめでお料理好きで猫も大好き！　鉢植えの世話も上手で、以来森園邸の観葉植物たちは枯れなくなりました（笑）。住んでいた江古田の商店街を、森園さんと村崎さん二人で仲良く自転車に乗って、移動する姿もよく見かけたものです。何しろあの巨体の村崎さんと、度付きサングラスをかけた個性的なファッションの森園さんが、ママチャリで並んで移動するのですから目立ちます～！　かなり遠くからでもそれとわかり、とても微笑ましい光景でした（たぶん当時の江古田の住人は、相当な数の人が彼ら二人を印象深く覚えているのではないかと

と思い、そのように言いますと、自分は霊能者ではないし、幻聴や幻覚、妄想などの統合失調症的症状は誰にでも多かれ少なかれあって、自分にもそれがあるにすぎないのだと。

そんな村崎さんはショートスリーパーでもあり、4時間以上寝れないのでした。森園さんは一旦寝ると、まる30時間寝てしまう事さえあるロングスリーパー。既読がつくなどの便利なSNSがなかった時代、連絡手段は電話のみ……それまで一旦寝ると電話のベルがいかに鳴り響こうとも起きなかった森園さんですが、結婚してからは必ず村崎さんが電話に出てくれて、さらにいついつ寝たから次に起きるのはこれくらいと、見込みまで教えてくださるので、とてもとても助かりました。そしてよく「僕が起きてる時間の半分を森園は寝ているんですよ……僕は彼女の寝顔を見てるだけなんです」と、嘆きとものろけともつかない愚痴を電話口で話し続けるのでした。

村崎さんの悲報はラジオで知りました。なぜその時ラジオが点いていたのかは覚えていません。びっくりして旦那と森園邸に駆けつけましたが、すでにロープが張られ警官だらけ……とりあえず「担当編集者なんですが」と言ってはみましたが、もうここは立入禁止で、森園さんもういないと言われるばかりでした……。電話も通じませんし、仕方なくメールだけ出して、できることがあったらいつでも連絡くださいとだけ……。

ようやく連絡がきた後は、とにかく怒涛のようにいろいろなことがあって、書くのが憚られる事も多く（詳しくは森園さんのデジタルエッセイ漫画『私の夫はある日突然殺され

た』を是非お読みくださいませ。めちゃコミで配信中です）、森園さんは本当に本当に大変だったと思います。悲しみやショックなどの精神的な苦痛や、理不尽さに対する怒りなどは勿論ですが、物理的にも大変な作業の連続だったと思います。

村崎さんが借りていた資料部屋の整理と撤去（扉を開けた時、天井まで本や雑誌に覆い尽くされたその部屋は、入ることすらできませんでした……！）、自宅兼仕事場の整理と撤去だけでも毎週1回のお手伝い数人がかりで半年、さらにそこで選り分けた膨大な量の本、雑誌、コミックス、写真集etc.収集したゴミ、書き付け、魔術道具等々の収納先の交渉と確保（本は明治大学に今後できるという漫画や雑誌の資料館へ寄付、ゴミや道具系は伊豆の博物館『まぼろし博覧会』内に『村崎百郎館』を設立して収めるなど、もう数年がかり！　しかも全て自費）を、持ち前のバイタリティーと周りを巻き込む力で次々と成し遂げていったのでした。

この間、犯人が実は森園さんをも狙っていたという警察からの情報でウィークリーマンションを転々としたり、その後も度重なる引越し、そして何より統合失調症という事で無罪（！）になってしまった犯人に対する民事訴訟など、普通の人ではとても無理と思われることを延々とやり遂げ、なおかつお仕事の方も続けてこられた森園さんには本当に頭が下がります。村崎さんとの結婚は、まさに素晴らしい女性を生み出したんですね（涙）。

今回、村崎さんの10回忌にあわせ、今度は名著『鬼畜のススメ』を電子書籍として復刊

終章



後書き＆奥付＆次号予告

され、これもお互いに尊敬しあっていたからこそなのだろうなぁと思います。本当にベストカップルでしたから。村崎さんも今まで以上に喜ばれていることでしょう！（合掌）

復刊おめでとうございます‼　そして、おつかれさまでしたー‼

終章
後書き&奥付&次号予告

データ版「鬼畜のススメ」～発売までの道のり②～

村崎百郎の10回忌である2020年7月23日、四苦八苦しながらも、何とかデータ版「鬼畜のススメ」～村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！①～をKindleKDPで発売することが出来ました。

ところが、発売直後に自分で購入して（実はKindleで書籍を買ったのはこれが初めてでした……汗）確認したところ、何と自分の漫画と根本敬先生の漫画がボケてて全く絵もセリフも読めないと分かり、尚且つ本の説明ページにも文字のミスがあると分かり（↑こちらは知人に指摘されるまで全く気がついていませんでした）大驚愕！

思えば、KDP入稿した後、発売する前に内容を確認する（この時ミス等があれば直してもらえる）のを適当に、というかミスは無いはず！　と勝手に思い込みちゃんと確認しな

かったのが原因でした。

大慌てで、代行出版の担当さんに連絡して修正をお願いし、既に購入された方々に修正版を（無料で）ダウンロードしていただく方法を担当さんに聞いたり調べたりして、ようやく発売から数日後に修正版が発売になり、再ダウンロード方法をSNSで告知してようやく胸をなでおろしたのでした。

書籍の「鬼畜のススメ」の付録付きデータ版を発売する事に決めた時、せっかく個人（私のアカウントで）出版出来るようにしたのだから、1冊だけではなくその続刊（第2巻や第3巻）も発売してみようかな～……と考えていました。

1冊目は初めての書籍出版だったので分からないことだらけだったし、入稿してからもミスの連発で大変だったけれど、そのおかげで色々学んだこともあり、次は大丈夫！　という妙な？　自信もついて、内容もだいたい決まっていました。

村崎が過去にかなりの数の寄稿文を書いていたので、そのセレクト集と、村崎が中学生の頃から詩や文章を書き溜めていた大量のノートが残されていたので、その中から選んだものを未発表セレクト集として1冊にしようと考えていたのです。

作業的には確かに1巻目よりは楽ではあったものの、寄稿文と未発表分をチェックしてセレクトするのは、多分私一人では時間的に厳しいだろうと思い、制作進行や校正をお願いしている小山繭子さん、ライターの佐藤勇馬さん、知人のけいしけいさんに一緒にセレクトする作業をお願いしました。

寄稿文のセレクトは意外と簡単に終わったのですが、未発表のノートの文章のセレクトはともかく、その文章をテキスト化する作業がとっても大変だったのです。

なぜかと言うと……そのノートの文章は、村崎の10代〜20代の頃が中心で当然PC登場の前なので、ほとんどが村崎の手書きで、その文字たるや最初は綺麗な字で書かれていても途中からどんどん変形？　していって最後の方はもはや字というより記号と化してしまっていて、全く判読できないものだったのです。

そう言う事情で、なるべく面白くて読めそうな文章を選び、私と先ほどの小山繭子さん、ライターの佐藤勇馬さん、知人のけいしけいさんと、村崎の姪っ子のゆなさんとで手分けをして、読めないところは姪っ子のゆなさんに解読をお願いして（流石に血筋というべきなのか？　彼女は私たちの読めない文字もかなり判読することが出来ました）ゆなさんですら読めない部分は諦めて××表記にする事にして、無事？　テキスト化する事が出来ました。

この文章を書いている時点ではまだ入稿していないのですが、この後入稿した後にミス等が無いかしっかり確認して前回のような事が無いようにしたいと思います。

この本を買って読んでくださった方々には、村崎百郎（黒田一郎）の寄稿文を、そして若い頃の文章を楽しんで頂ければ幸いです。

当初から色々アドバイスをして下さり、データハウス鵜野社長のコメント録音と文字起こしと文章セレクトを手伝って下さった佐藤勇馬さん。アドバイスをはじめ、煩雑な連絡や文字校正、台割り等の進行全般の担当と、文章セレクト&テキスト化を手伝って下さった編集の小山繭子さん。文章のセレクトとテキスト化のご協力をして下さった、けいしけいさん。テキスト化を手伝って下さったゆなさん、本当に有難うございました。

そして、素晴らしいコメントを下さった皆さまに心から感謝いたします。

２０２０年　９月25日　森園みるく

※追記　２０２１年１月　その後色々あってKDP以外の電子配信サイトから再出版する事になりました。

村崎百郎（むらさき・ひゃくろう）

60年シベリア生まれ。中卒。80年に上京。凶悪で暴力的な性格が災いし、陰惨な傷害事件をくり返しながら多くの工場や工事現場を点々とする。現在は工員兼鬼畜ライター。生まれつき神や悪魔の声が頭の中に直接聞こえてくるという「電波系」であり、その体質を利用して、「妄想神経」と呼ぶ透明無形の神経繊維を体外に無限に伸ばして、他人の体に潜入&憑依をしたり、路上のゴミを探査したりと、いつ精神病院からスカウトがきても不思議ではない状態のキ○ガイ技を多数会得している。95年より「すかしきった日本の文化を下品のドン底に叩き堕とす」ために「鬼畜系」を名乗り、この世の腐敗に加速をかけようと、「卑怯&卑劣」をモットーに日本一ゲスで下品なライター活動をはじめる。（この活動に関する同志&奴隷&喜び組&敵対する「正義の味方」は常時募集中）主な執筆雑誌は『危ない1号』（データハウス）、『GON！』（ミリオン出版）、『イマーゴ』（青土社）など。共著に『ジ・オウム』（太田出版）、近刊予定に『鬼畜系』（太田出版）、『電波系』（太田出版／根本　敬と共著）などがある。

村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！②
誕生編～中学生日記からサブカル芸術論まで～

著者　村崎百郎
発行者　有限会社　ミルキーワールド
スキャンニング　株式会社　エレキテル　電子化代行スキャンＰＲＯ事業部
新表紙デザイン　電子書籍出版代行サービス
モノクロ表紙デザイン　森園みるく
表紙デザイン　電子書籍出版代行サービス
表紙カバー写真　村崎百郎
編集　校正　森園みるく　小山繭子

協力　佐藤勇馬　矢崎雅之　黒田ゆな　けいしけい

☆参考サイト
「まぼろし博覧会」で検索
http://maboroshi.pandora.nu/

「怪しい少年少女博物館」で検索
http://ayashii.pandora.nu/

「猫の博物館」で検索
http://nekohaku.pandora.nu/

Ｔｗｉｔｔｅｒ「セーラちゃん　まぼろし博覧会」で検索
https://twitter.com/maboroshimusume

ＹｏｕＴｕｂｅ「アムールみるくチャンネル」で検索
（「まぼろし博覧会」内「村崎百郎館」の完成工程動画が観られます）
https://www.youtube.com/user/1225MILKMILK

ｎｏｔｅ「milk 村崎百郎の言霊」で検索（村崎百郎の過去の文章が読めます）
https://note.com/kitiku

「村崎百郎非公式ＨＰ」で検索
http://murasaki100.com/index_00.html

「森園みるく公式ＨＰ」で検索
http://morizono.babymilk.jp/

★次号予告★

２０２１年３月頃「鬼畜のススメ」第３弾発売予定！

〜内容紹介〜
村崎百郎のパンデミック時代を生き延びろ！③
鬼畜のススメ
復活編〜純粋妄想電波批評〜

☆村崎百郎寄稿文セレクト集

☆村崎百郎書き下ろし小説
情熱

&MORE

乞うご期待！

情報は以下よりチェックよろしくお願い致します。

「森園みるく　FB」で検索

https://www.facebook.com/milk.morizono

「森園みるくTwitter」で検索

https://twitter.com/noritakamilkmor